

第2節 古 墳

1号古墳（5区SZ1、18区SZ1）

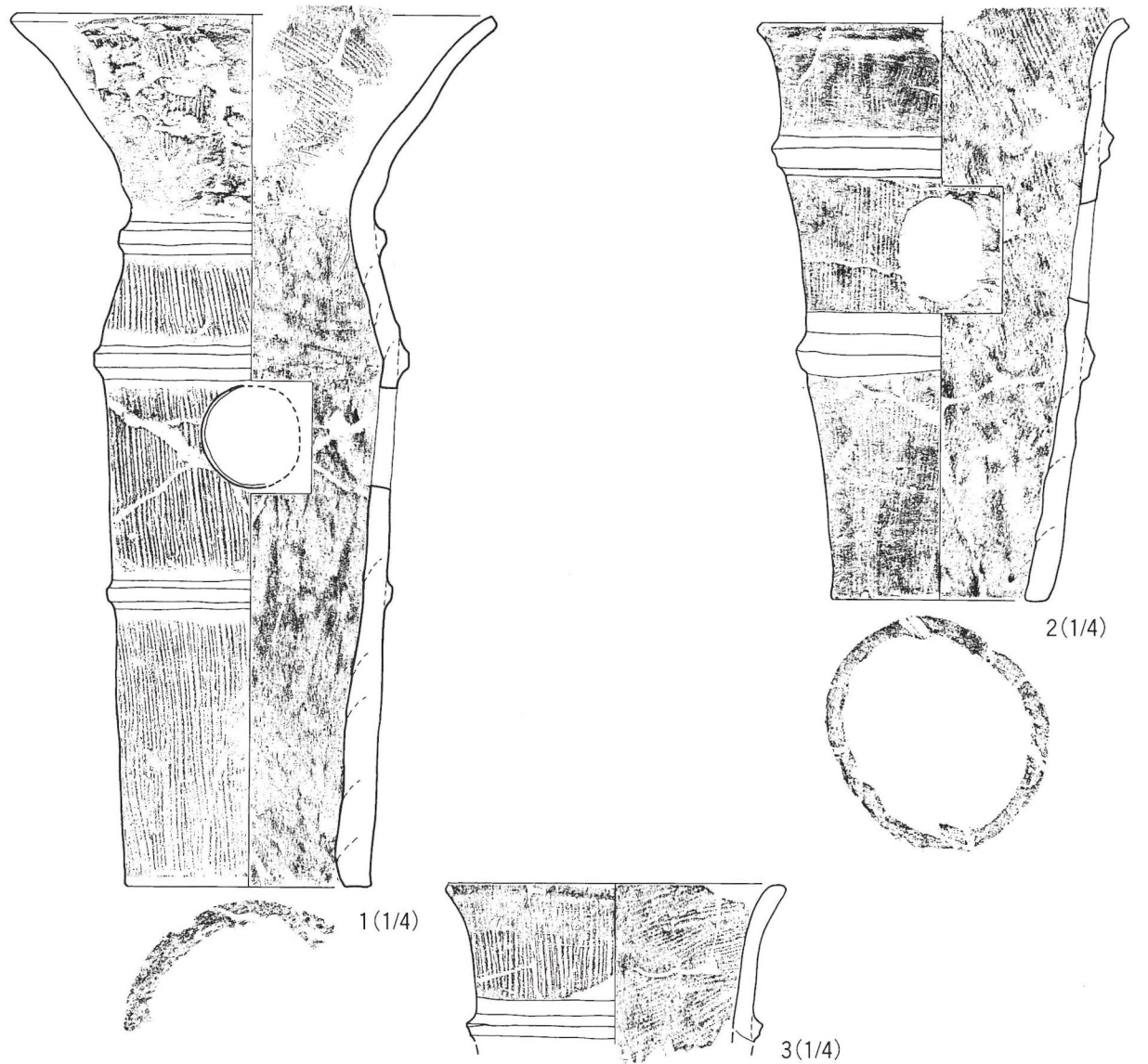
1号墳は、調査区の東南端となる5区・18区で検出された。墳丘は削平され周堀が埋没した状態で発見された。



なお、周堀の位置には、中世の掘立柱建物跡が検出されている。

古墳は、直径22.0m、周堀の幅3.0m～7.2m、周堀の深さ0.45m～0.55mの規模である。円墳と考えられる。主体部は削平されており不明である。また、葺石の存在も不明である。周堀には、墳丘から転落したとみられる須恵器の甕片が多数出土している。整理の結果2個体が復元できた。No66は口縁部に波状文が巡る。胴部外面は平行叩き、内面は同心円叩きである。埴輪は、朝顔形埴輪、円筒埴輪、形象埴輪の人物と盾がある。円筒埴輪は一次タテハケのみであり、二次調整は確認出来ない。透孔は円形のみが確認できる。突帯の断面は台形とM字形とがある。朝顔形埴輪は、全体形状を1個体確認できた。口縁部は頸部から斜め上方に立ち上がる。外面の調整は一次タテハケのみである。突帯は3条、台形をしており、最上部の突帯は頸部の位置となる。透孔は円形とみられるが、透孔の半分以上が欠損するため詳細は不明である。

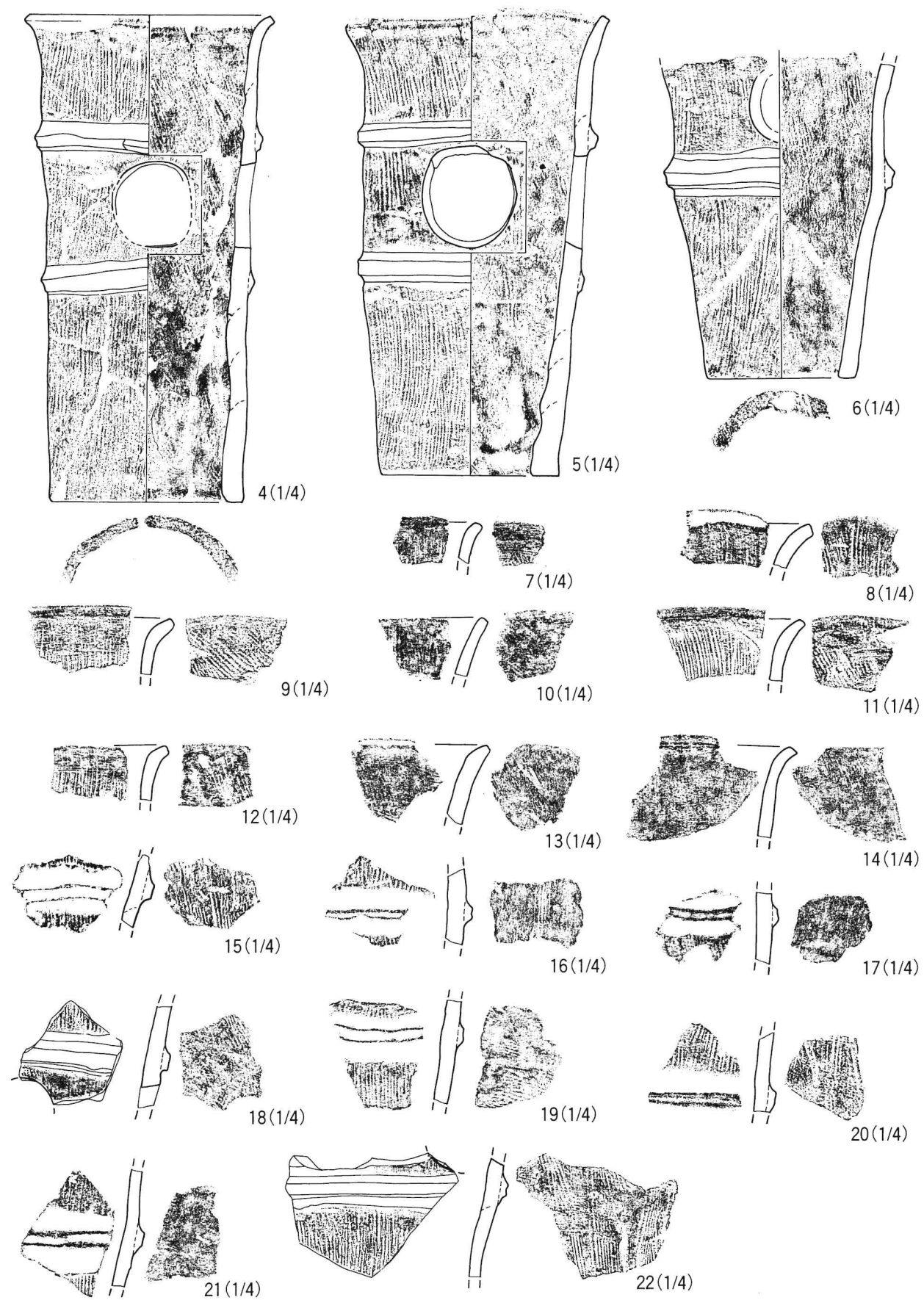
埴輪胎土には結晶片岩が目立ち、白色針状粒が確認できる個体もある。出土土器は、土師器坏・高坏・甕・鉢、須恵器蓋坏（身）・壺・甕・横瓶がある。土師器高坏は脚部が長く発達している。また、甕は長胴で下膨れである。埴輪と土器の特徴から、古墳の築造は6世紀後半と考えられる。



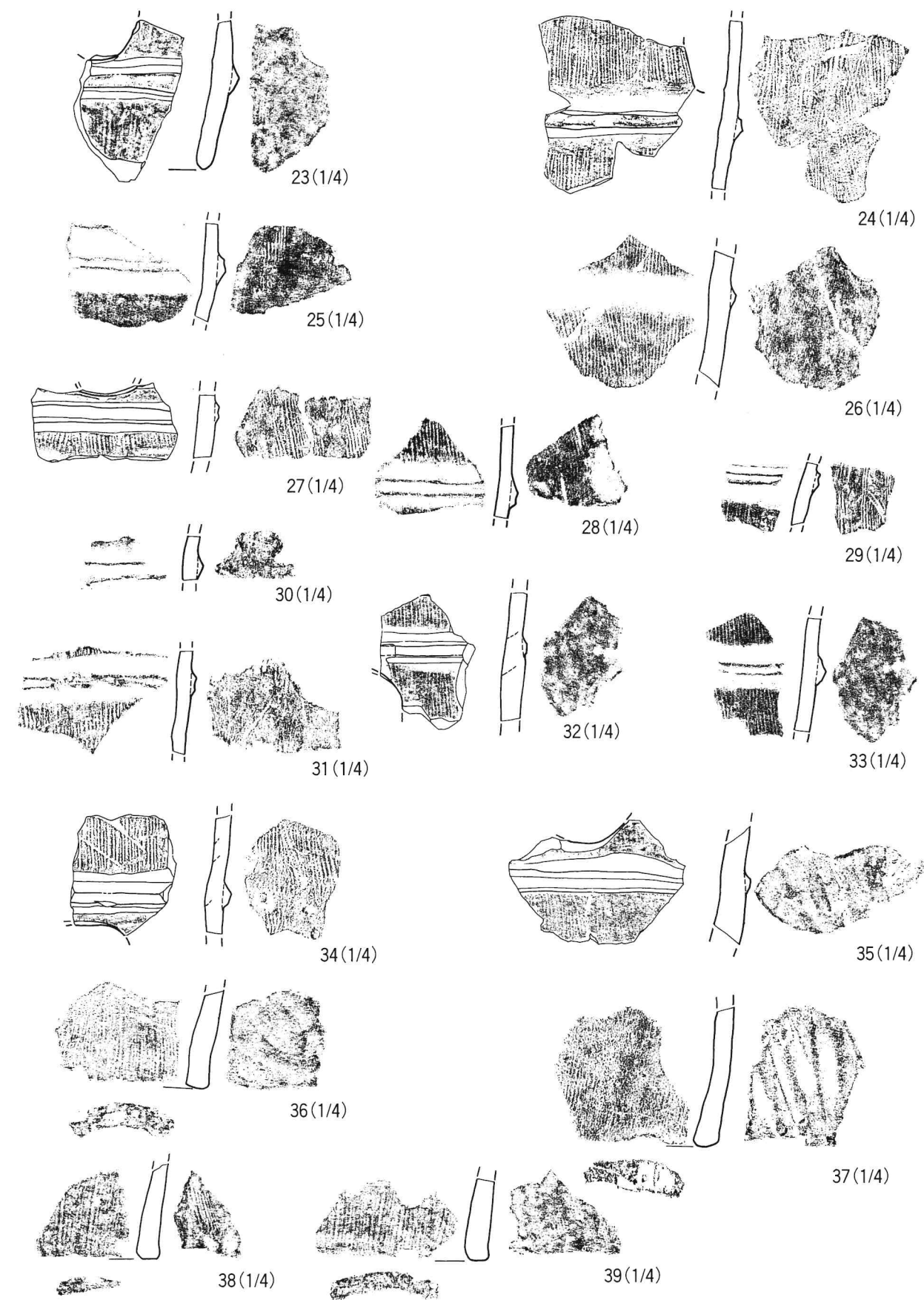
第593図 1号古墳出土遺物ー1



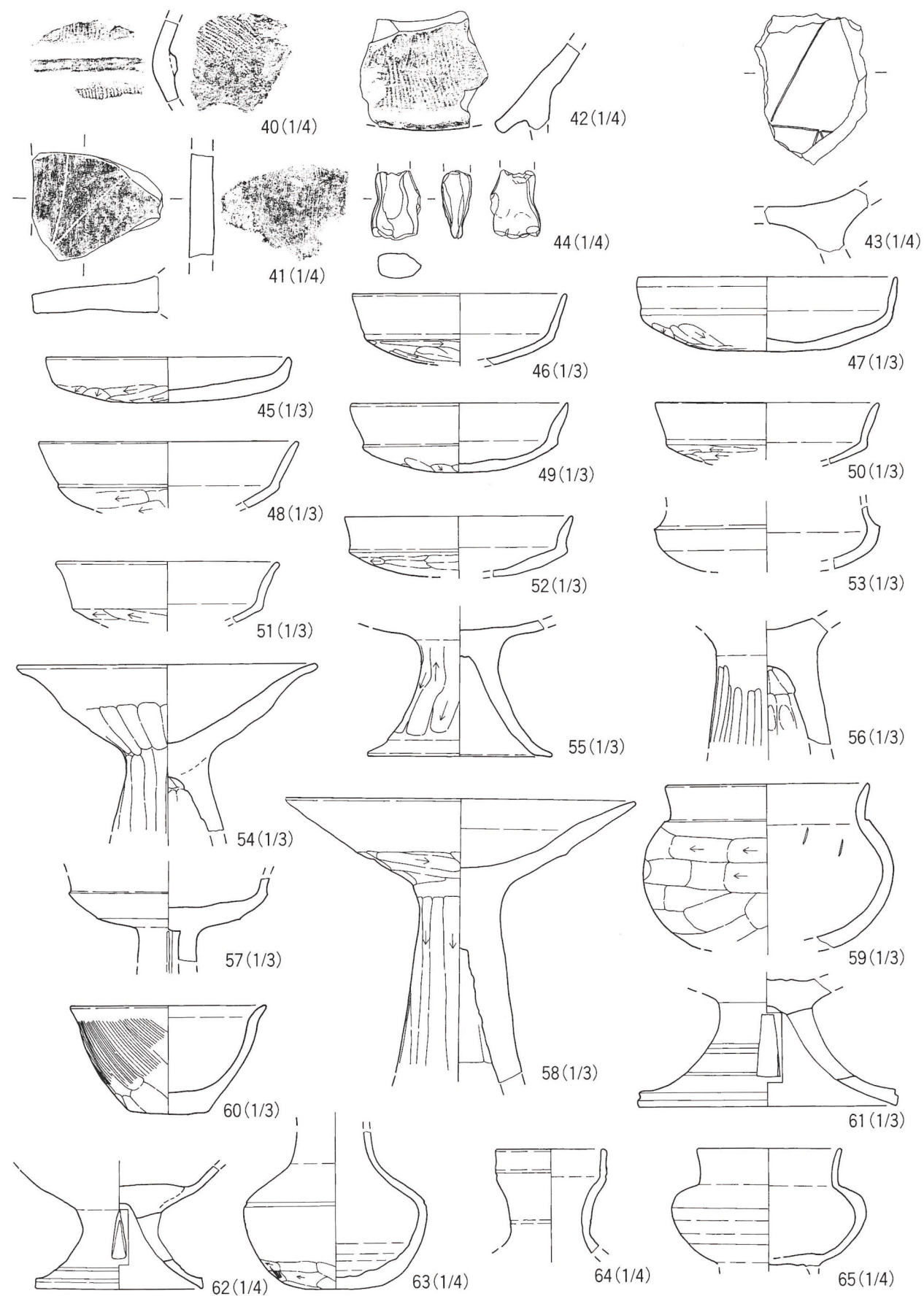
第592図 1号古墳エレベーション・セクション



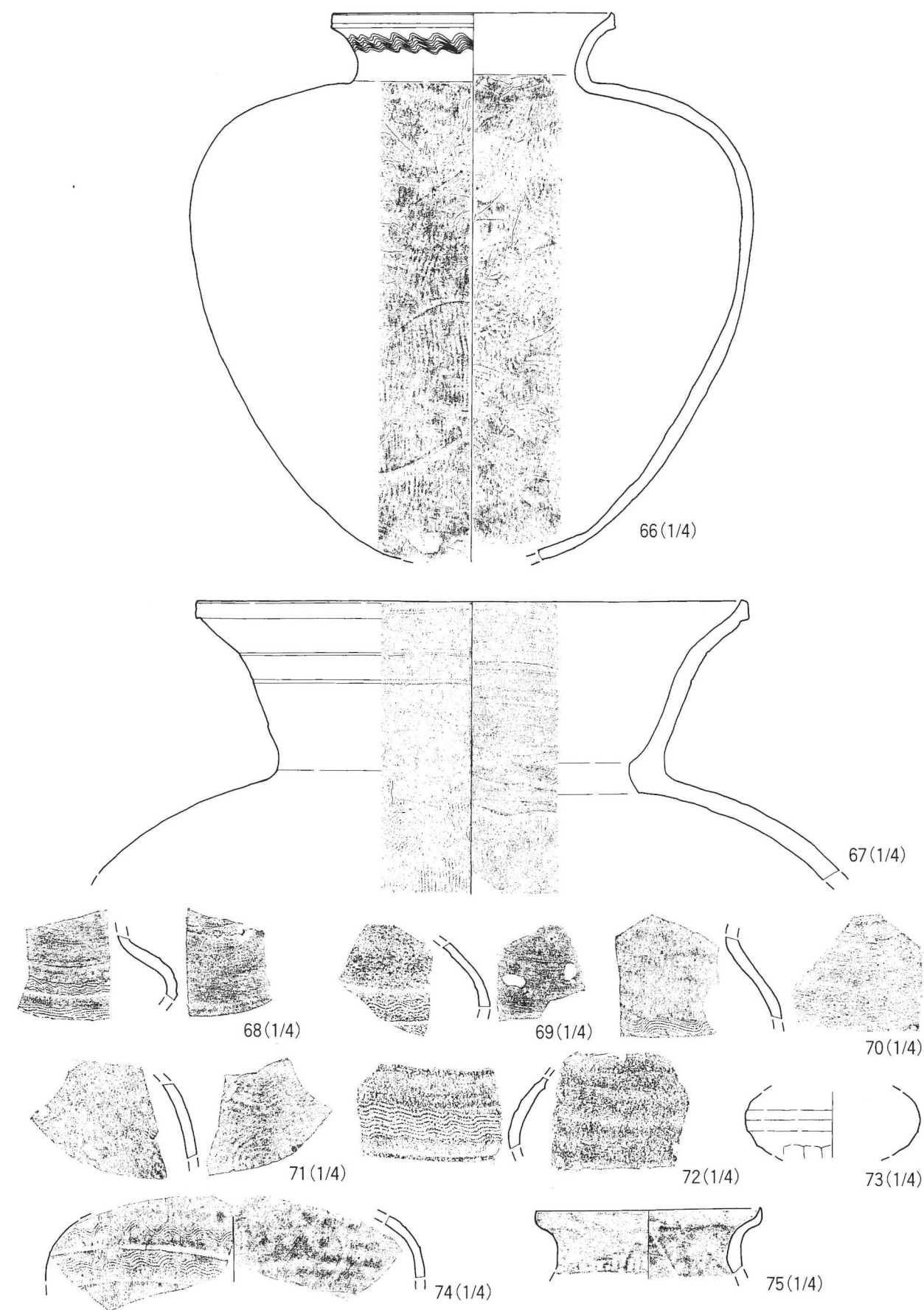
第594図 1号古墳出土遺物－2



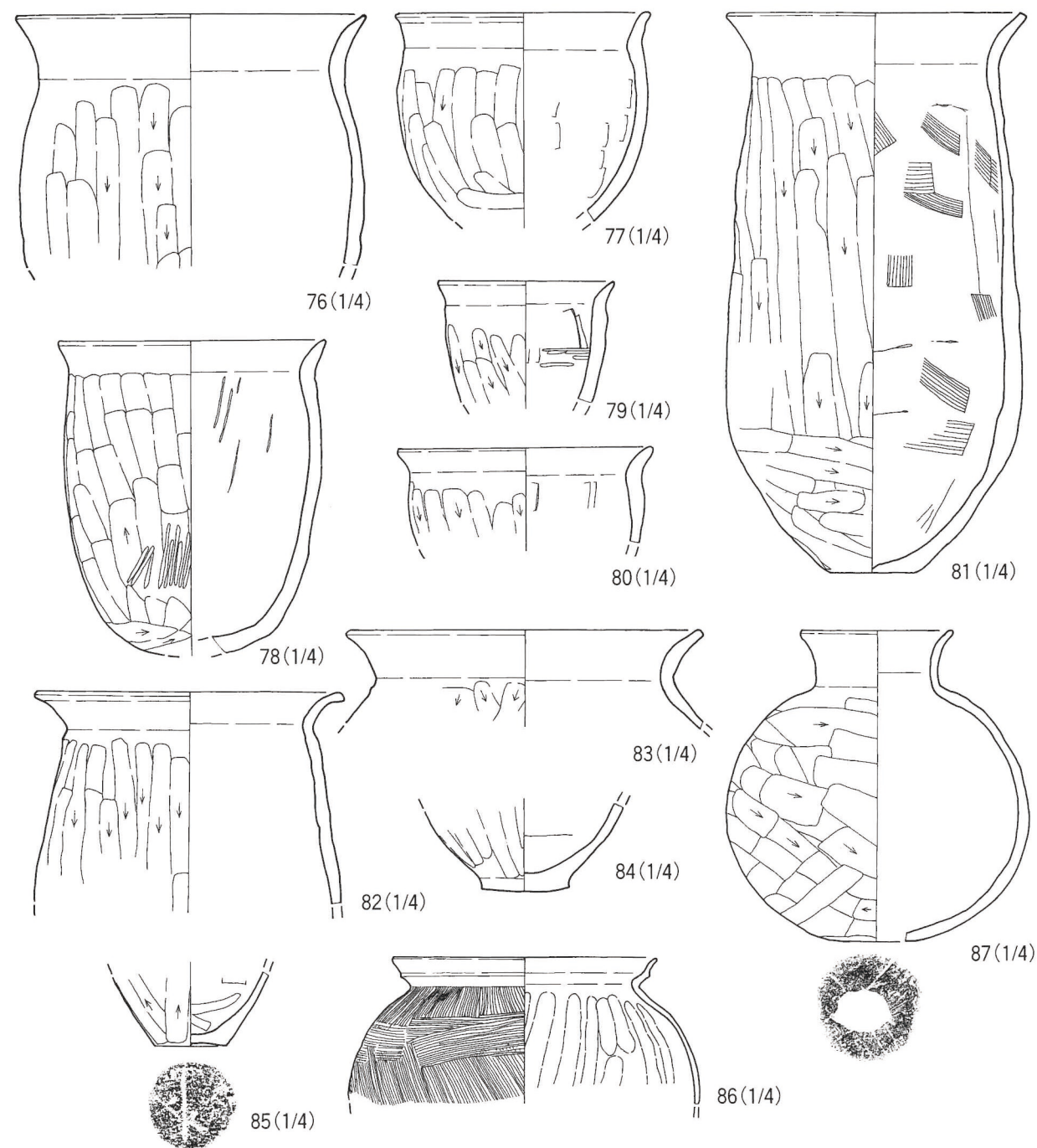
第595図 1号古墳出土遺物－3



第596図 1号古墳出土遺物－4



第597図 1号古墳出土遺物－5



第598図 1号古墳出土遺物－6

2号古墳（6区SZ2）

位置 2号墳は6区の西端にあり、周堀が3分の1ほど確認された。直径18m程度の円墳と推定される。主体部や葺石の有無は不明である。周堀は、幅2.2m～3.2m、深さ0.5m程度である。周堀の断面は、ゆるやかな逆台形である。古墳は基壇面まで残存していたため樹立する埴輪列があった。大部分が第1段（基底部）のみだが、第2段の透孔の位置まで残っていたものもある。埴輪と埴輪の間隔は8～10cmであり、口縁まである埴輪を想定すると、埴輪同士がかなり接近していたとみられる。形象埴輪は、家形埴輪の妻側の壁を表現した個体が出土している。

調査区土層を観察すると、周堀の最下部に赤土状のシルトの堆積が見られたため、自然科学分析を(株)古環境研究所に依頼した。この土層はHr-FAとの結果が出ている。

円筒埴輪は、全体形状を示すものはないが、突帯は2条で3段構成と推定される。残りがよい個体は、下から2段目までである。これと焼成・調整の似た埴輪の口縁部の破片を合わせて全体を推定した。器高32.0～37.0cm、口径20.0～26.0cm程度である。形状は基底部から口縁部までハの字形に外反するとみられる。

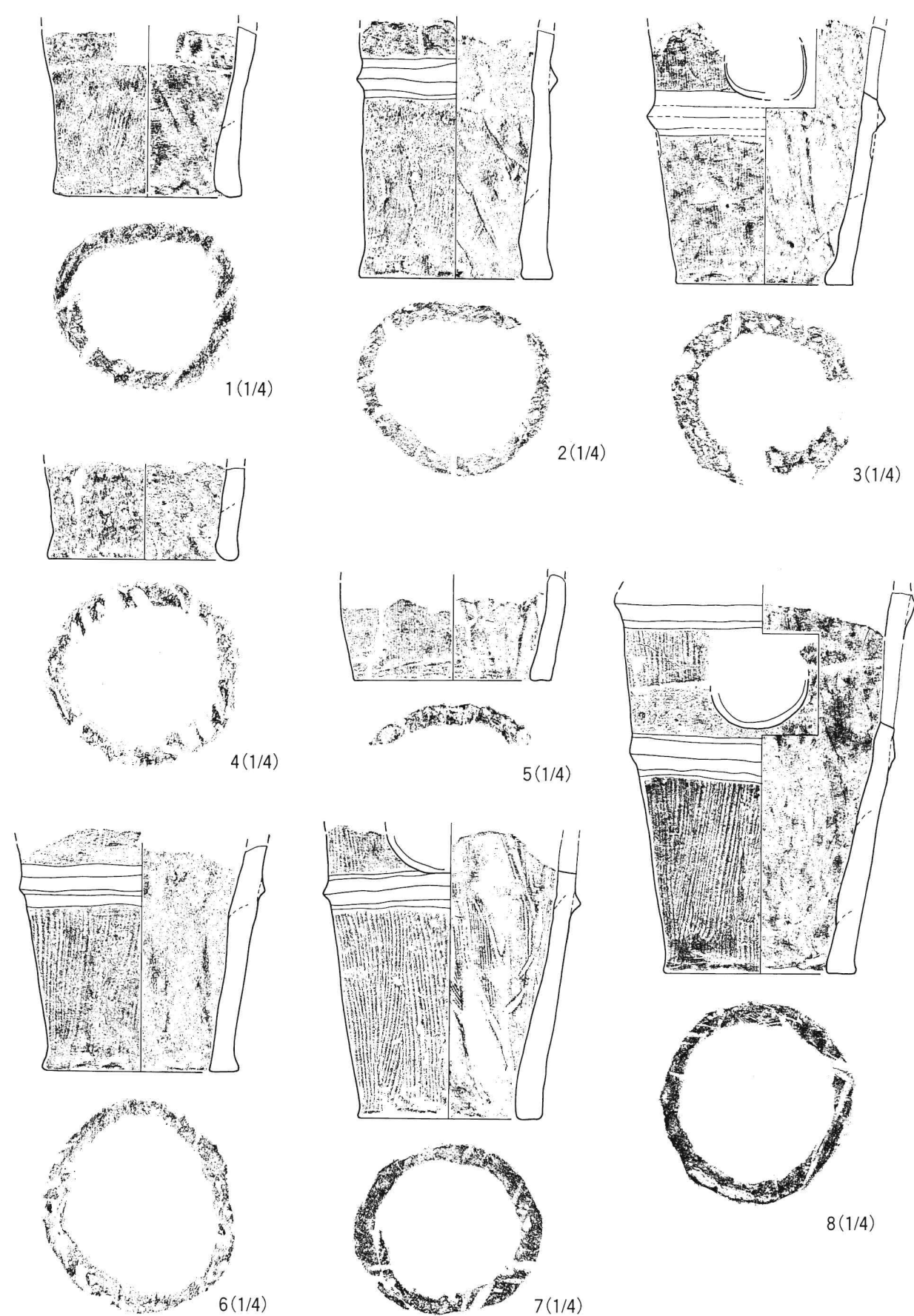
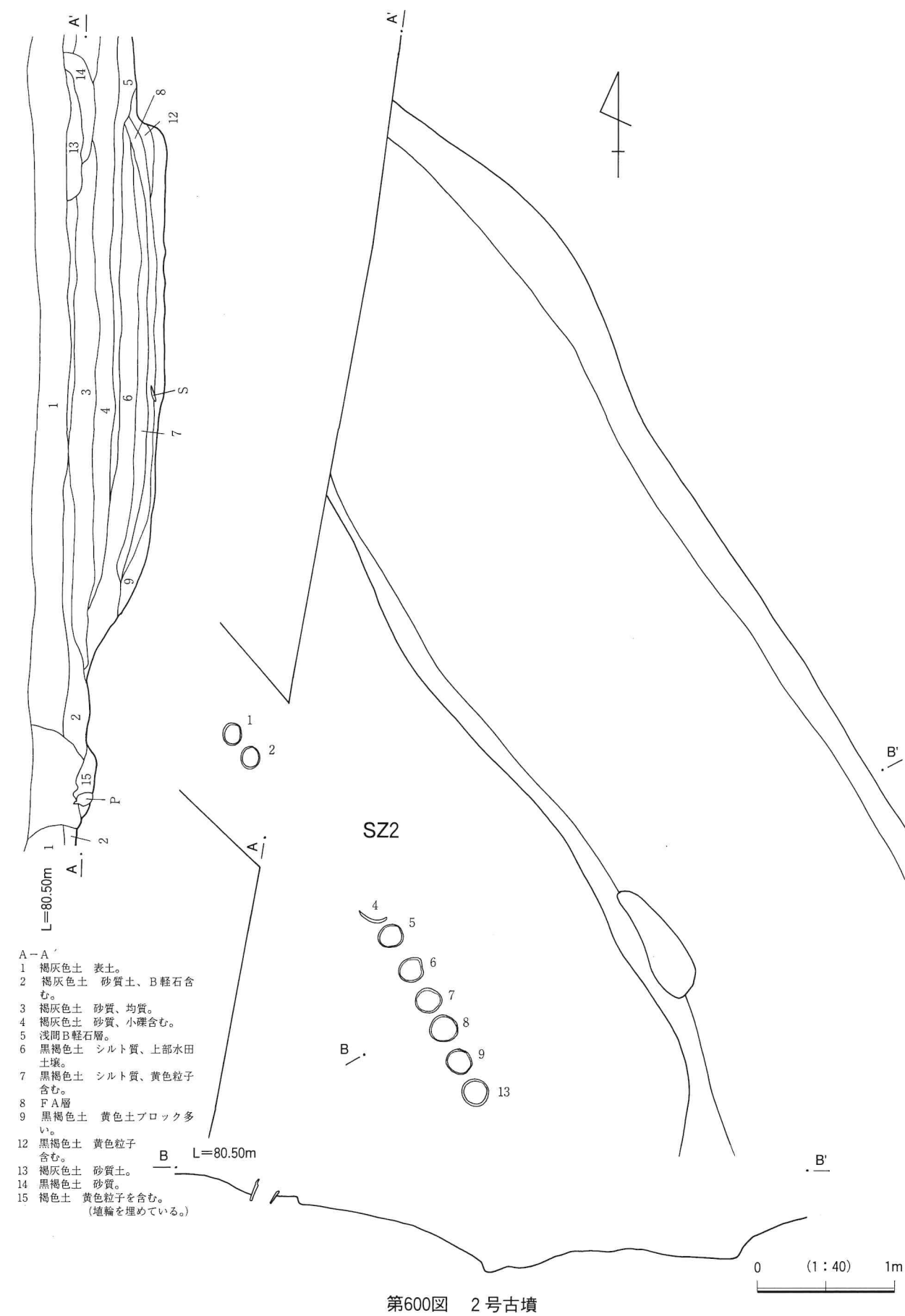
基部の直径を確認したのは26点ある。直径11.9cmから15.0cm、楕円形に歪む個体もある。基底部の成形は幅2.5～7.0cm、厚さ1.6～2.4cm程度の粘土板をまわし、その後粘土紐を巻き上げている。突帯は2条貼付されている。貼付後はヨコナデである。突帯の断面形状は、三角形と台形とがある。幅1.3～2.2cm 高さは4.0mm～8.0mm程度である。透孔は下から2段目に一対配置されている。円形の透孔が主体で半円形のものも確認できる。外面の調整は、縦方向のハケ調整と、ヘラナデ調整のものがある。内面の調整は、ハケ調整後に指頭によるナデ調整、口縁はヨコナデを施すものとタテハケのみで終わるものがある。ハケ目は2cm幅あたり7～11本である。

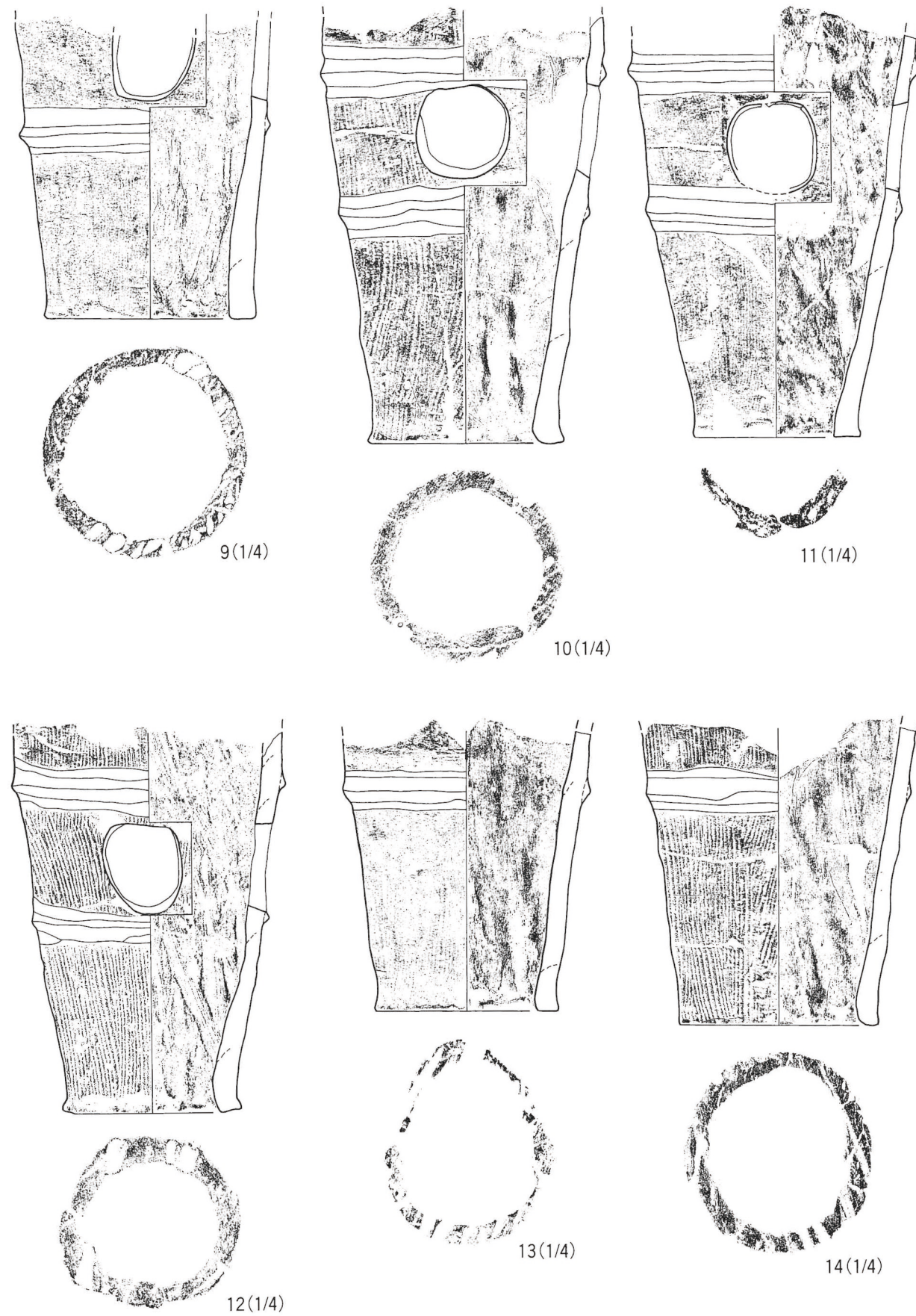
埴輪の胎土中には、結晶片岩、石英、輝石、雲母、黒色粒、赤色粒などが含まれている。また、白色針状粒が確

認される個体もある。須恵器は、周堀中の甕片が1個の甕として復元できた。また、口縁に隆線と波状文を巡らす甕の破片がある。周堀中にHr-FAが堆積すること、及び埴輪・土器の特徴から古墳の築造は5世紀末と推定される。

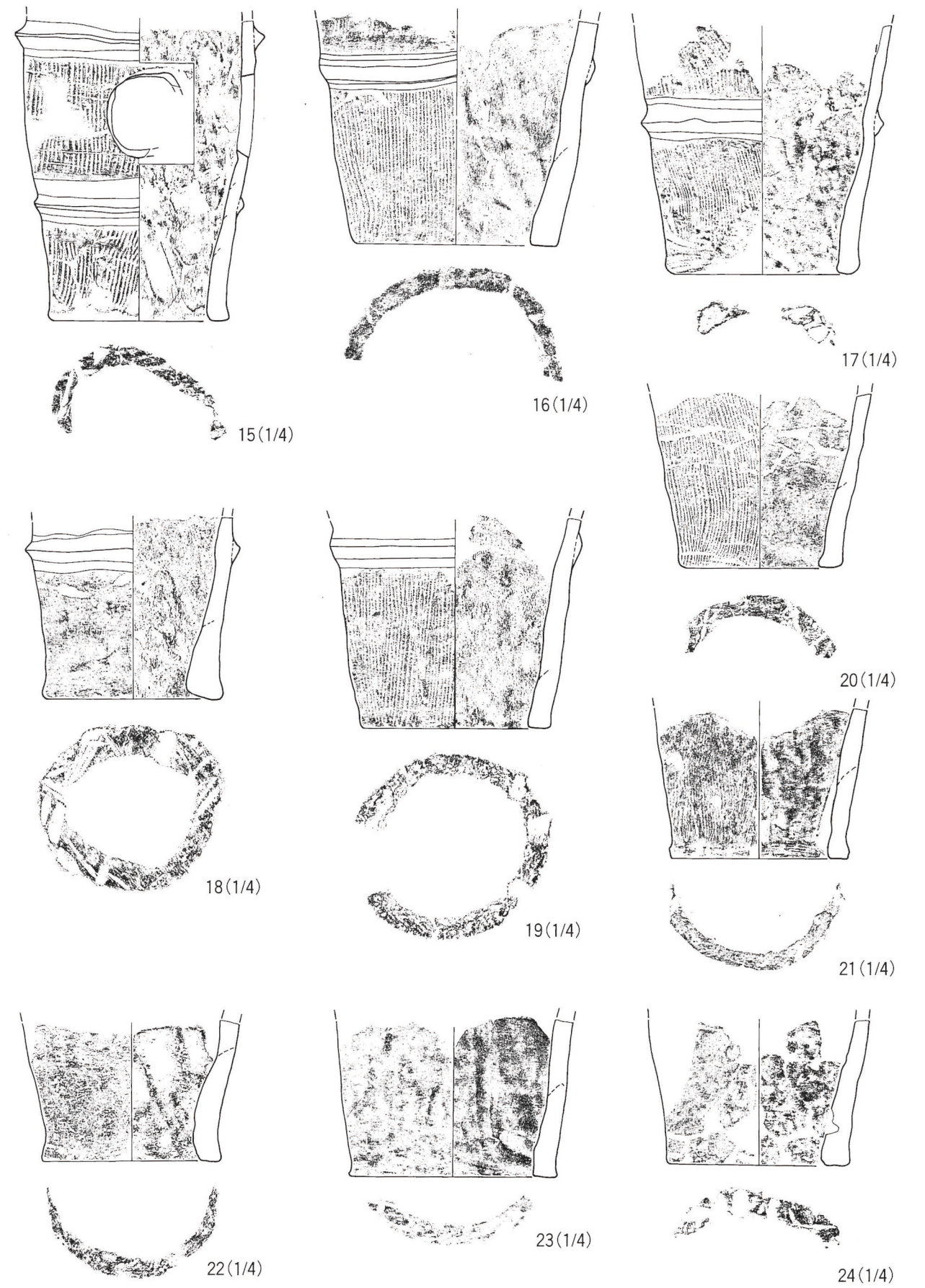


第599図 2号古墳

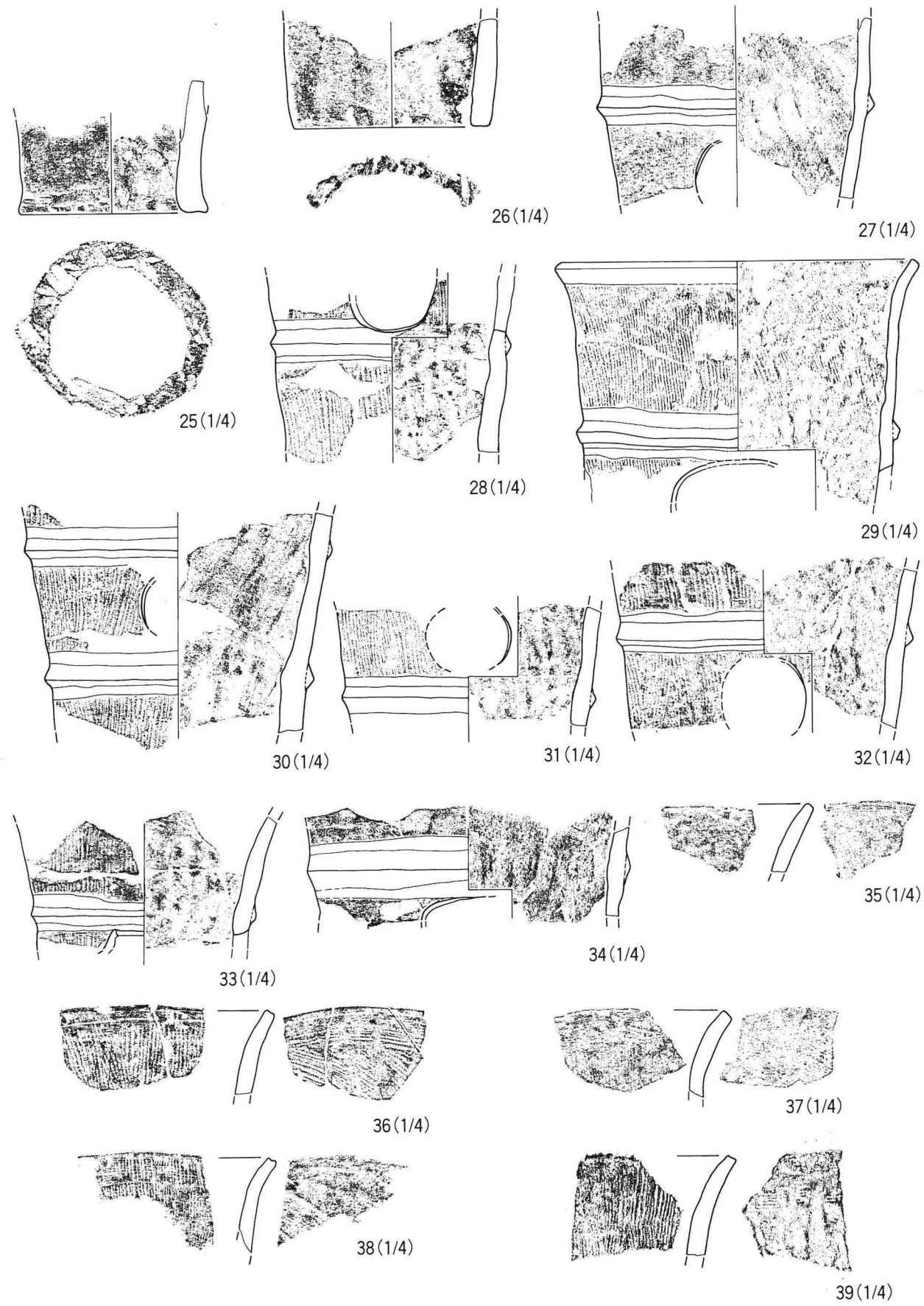




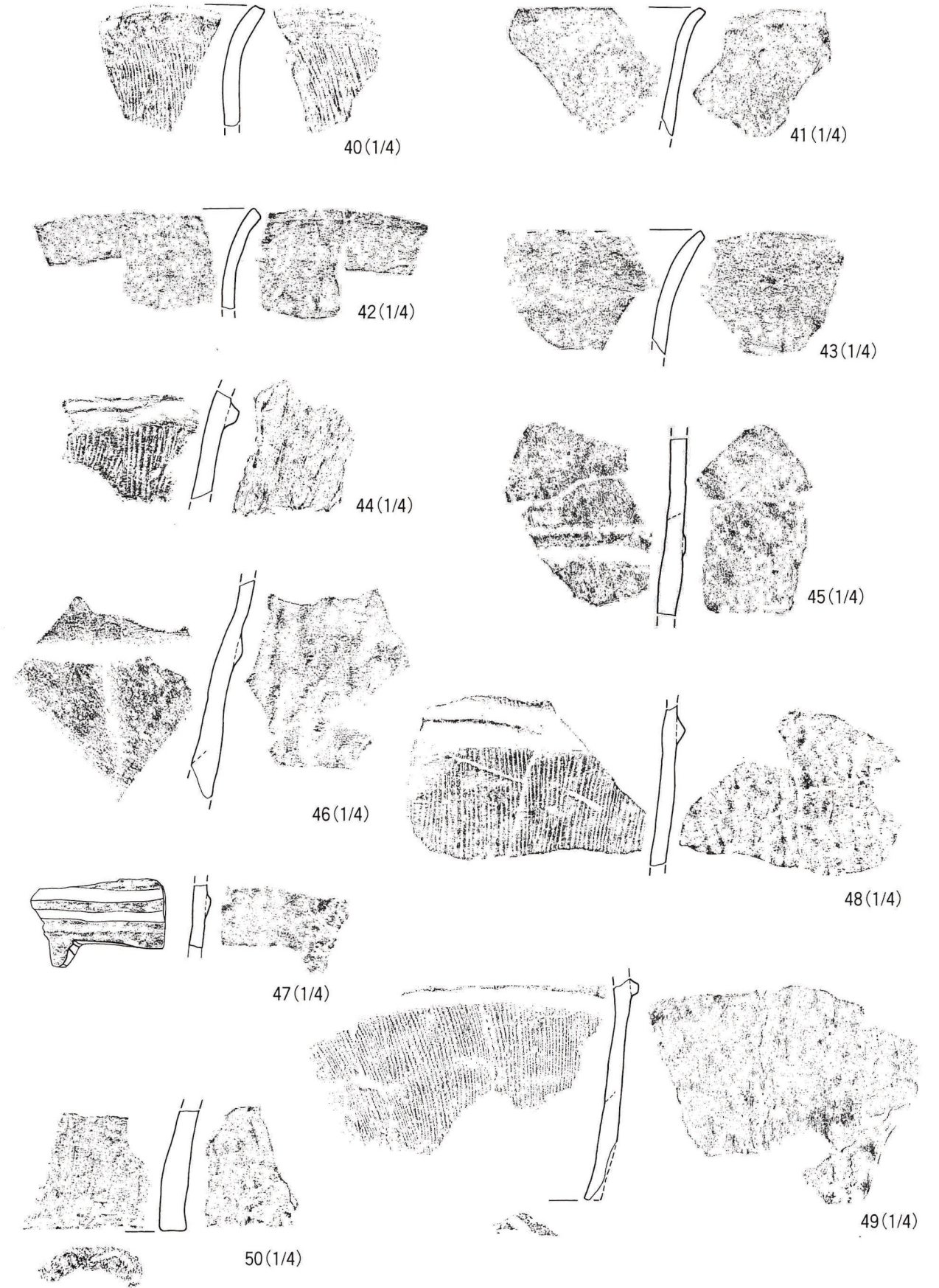
第602図 2号古墳出土遺物－2



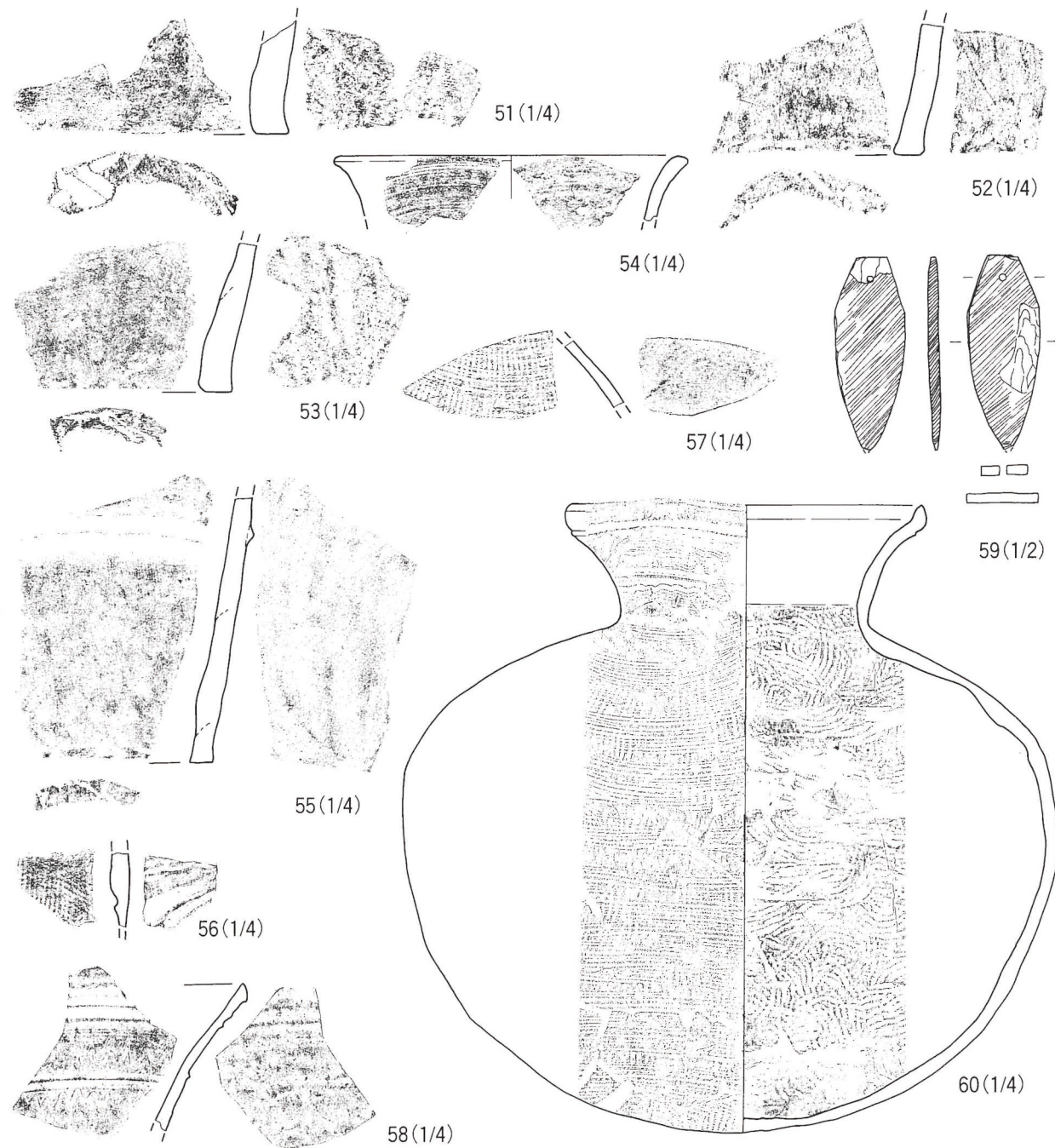
第603図 2号古墳出土遺物－3



第604図 2号古墳出土遺物—4



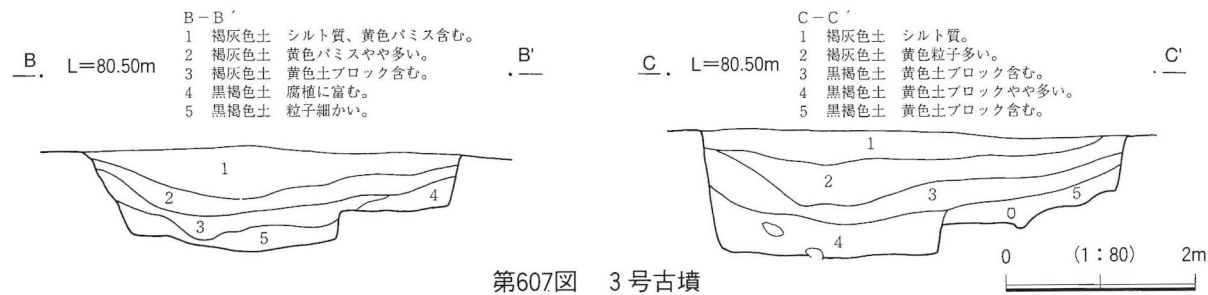
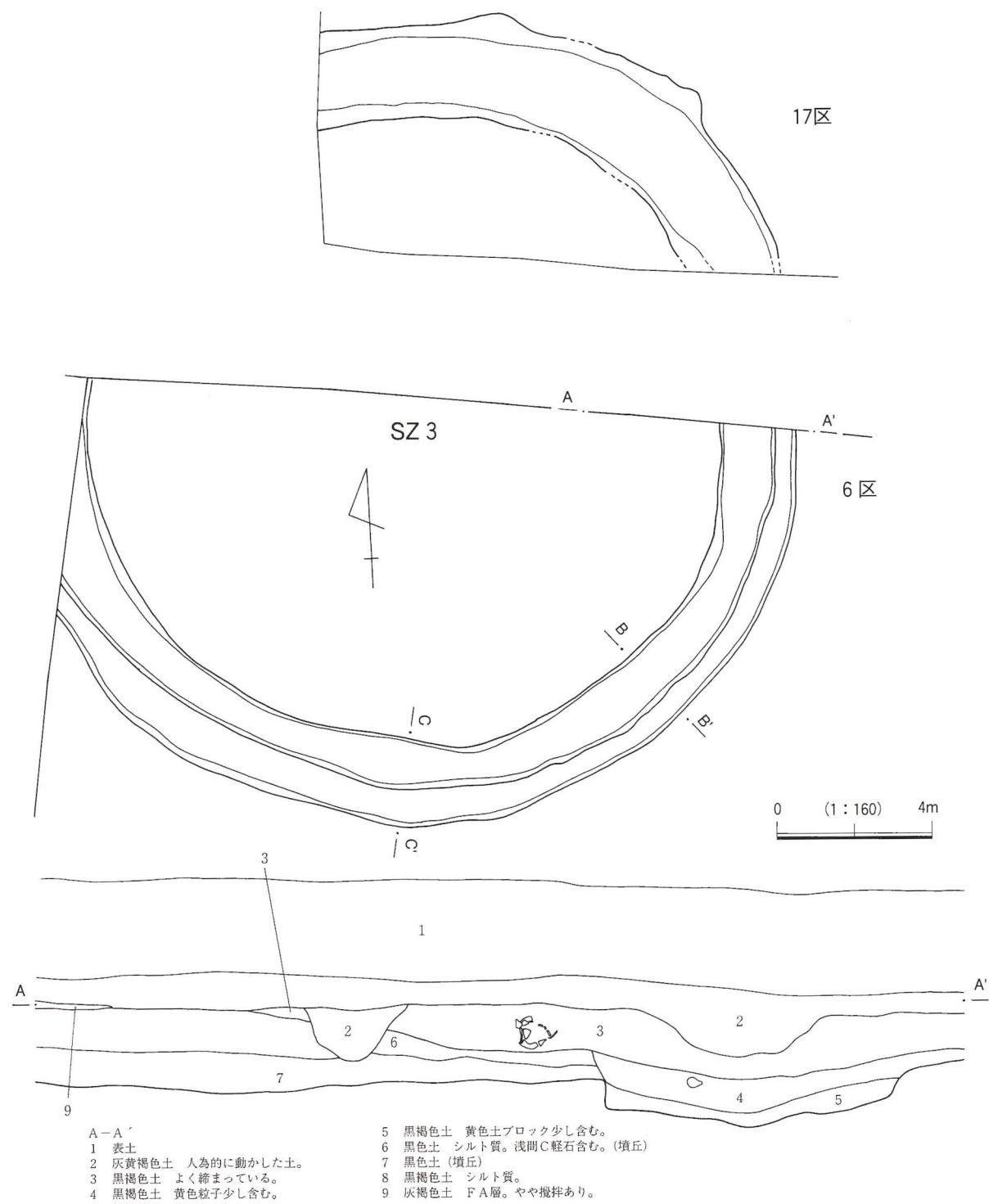
第605図 2号古墳出土遺物—5



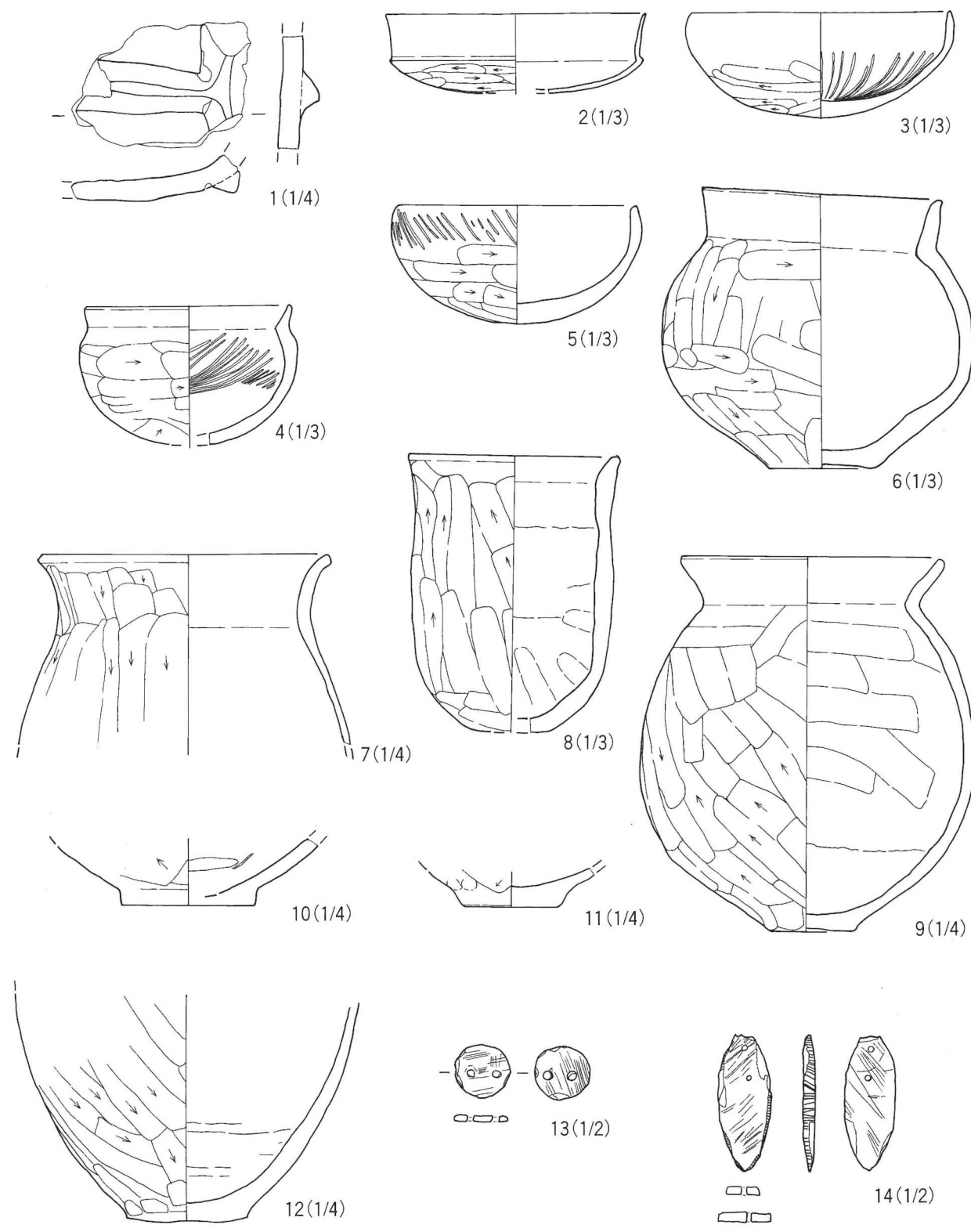
第606図 2号古墳出土遺物ー6

3号古墳（6区SZ3、17区SZ1）

3号墳は、6区の2号墳の東で古墳南半部を、17区で北半部を調査した。直径が16.5mの円墳である。周堀は幅1.0～1.3m、深さ0.3m程度である。断面は逆台形をしている。周堀中には丸みを帯びた川原石が見られ、葦石があったと考えられる。墳丘は一部残っており、その様子は6区の調査区北の壁で知ることができた。墳丘は当時の地山を削り出して造っている。中央部では一部薄く盛土が見られた。主体部は既に削平され不明である。周堀からの埴輪の出土は破片が少量である。埴輪が樹立されていたと考えられるが、原位置にあるものはない。遺物は他に土師器の坏・甕・小型甕が出土している。土師器の甕は墳丘から転落した状況であり、他は周堀中の出土である。埴輪は形象埴輪が出土している。家形埴輪で、壁を表現したものと考えられる。6区の北壁の盛土下部には、黄色の火山灰の堆積がみられた。テフラ分析では、Hr-FAとの結果が出ている。これと、墳丘及び周堀から出土した土器の特徴から、3号墳は6世紀初頭の築造と考えられる。なお、墳丘中から図化はしていないが土師器坏が出土している。



第607図 3号古墳

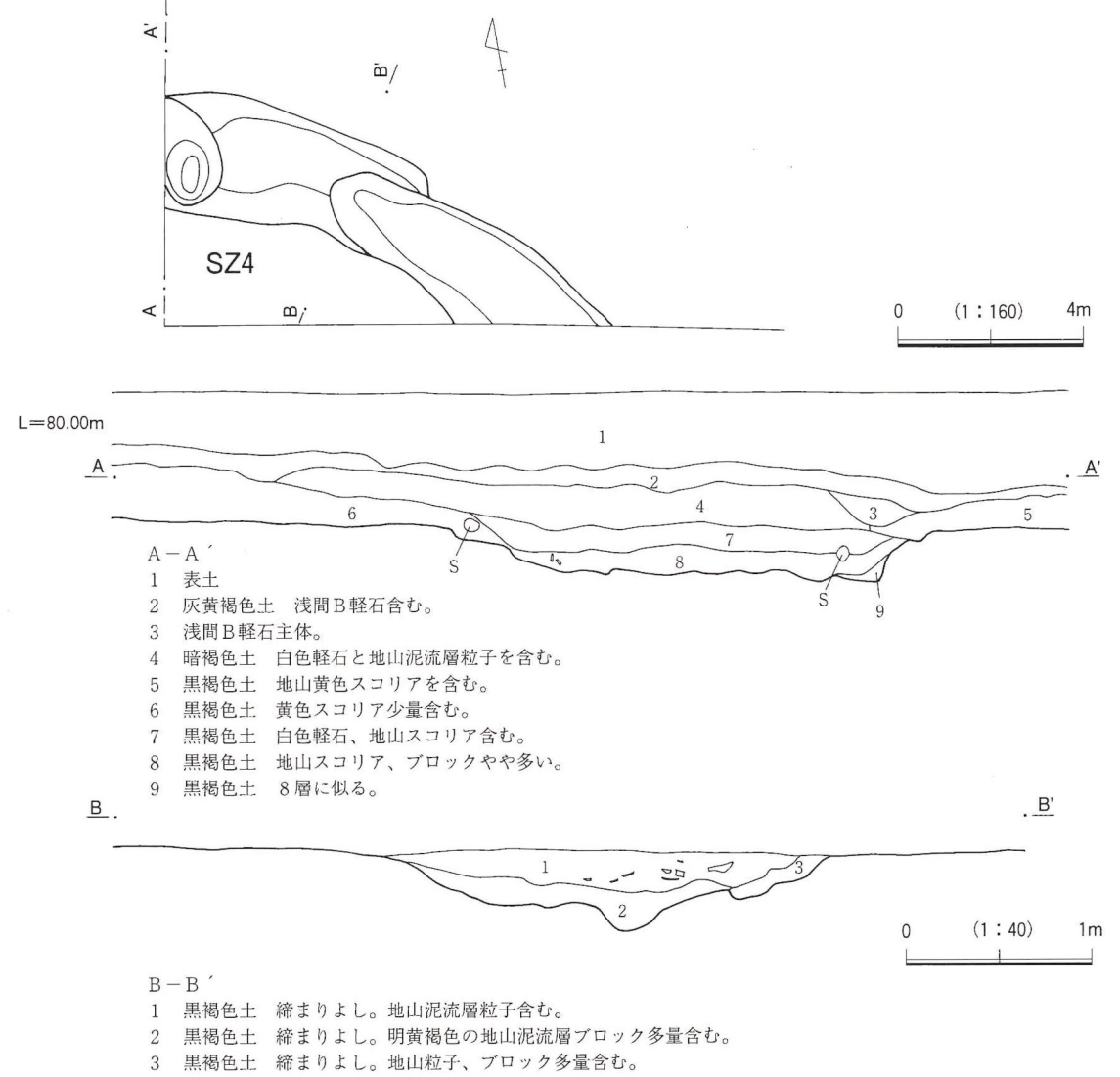


第608図 3号古墳出土遺物

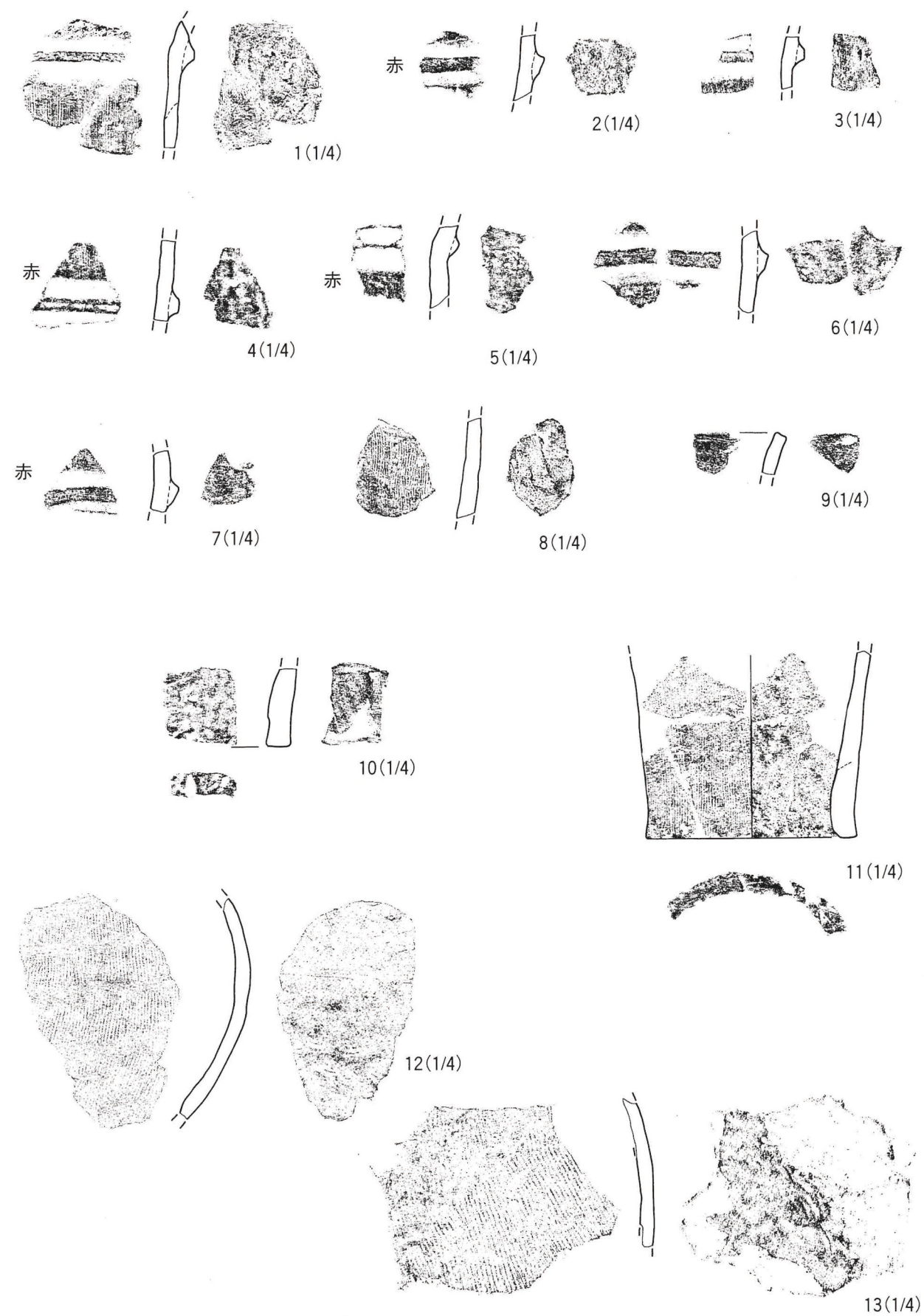
4号古墳（2区SZ4）

4号墳は、2区の南西隅で検出した。墳丘はすでになく周堀と見られる溝のみの検出である。周堀の断面は逆台形で、上幅1.8m～2.4m、深さ0.35m程度である。出土遺物は、円筒埴輪と須恵器の甕・壺、土師器甕がある。川原石もみられるので、葺石があったと考えられる。円筒埴輪は、かなり細片となっており、全体形状は不明である。突帯は台形、外面は細かい一次タテハケのみ。胎土はやや粗く、焼成は良好で橙色をしている。

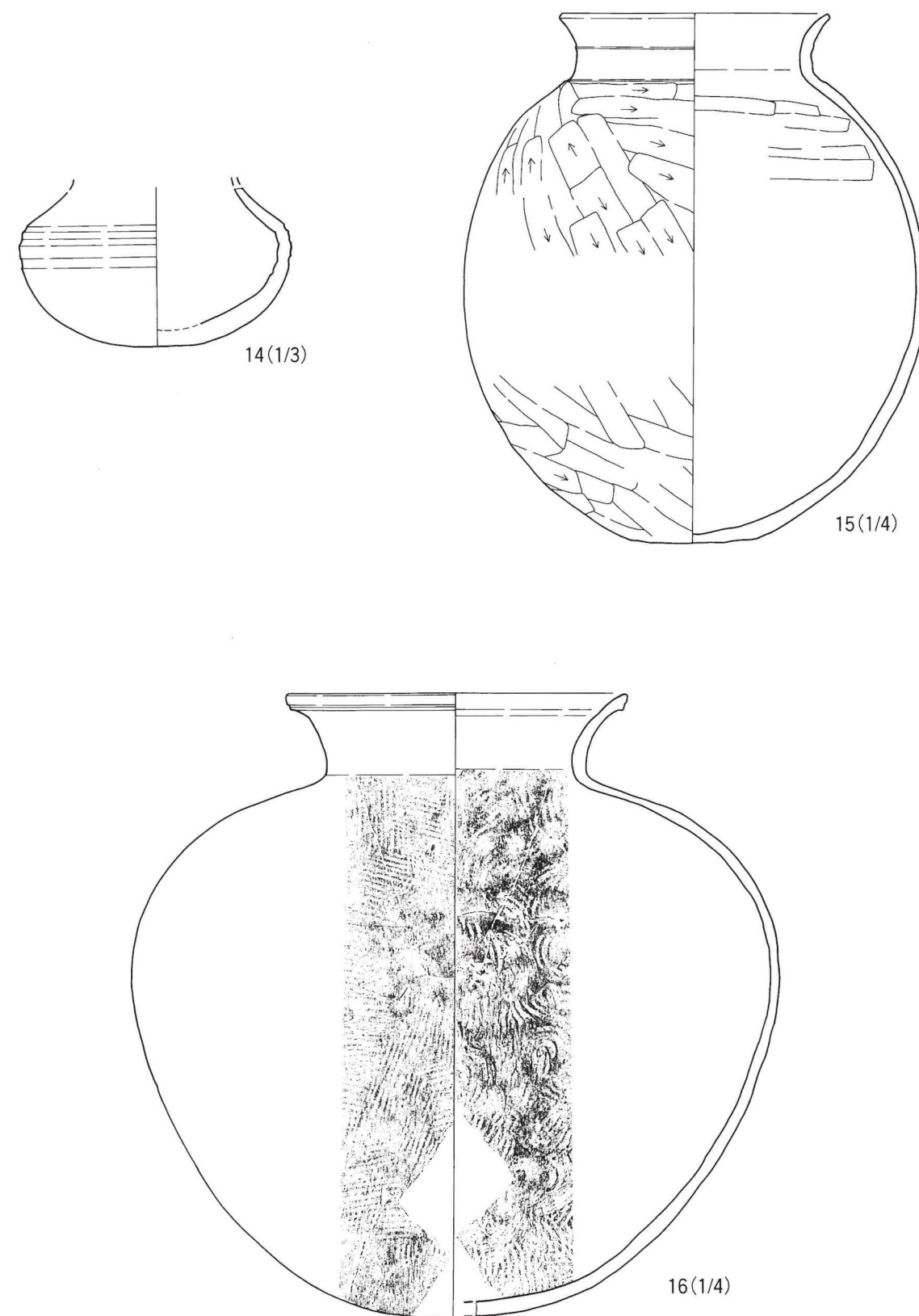
透孔部分は若干残っているだけで、形を判断する材料に欠く。なお、外面に赤色塗彩された個体が何点か確認できた。須恵器の甕は1個体を復元できた。肩が張り、薄手である。口縁部無文で端部に凸線が巡っている。外面平行叩き後カキ目、内面同心円叩きで一部半スリケシ手法がみられる。なお、出土した破片から須恵器甕は4個体あったと判断される。須恵器は他に焼成不良の短頸壺1点、及び土師器の甕が1点ある。なお、埴輪には外面赤彩されたものがある（2・4・5・7）。土器や埴輪の特徴から、4号墳は5世紀末の築造と考えられる。なお、No14の短頸壺・No15の土師器甕はやや時期の下る可能性が高い。



第609図 4号古墳



第610図 4号古墳出土遺物－1

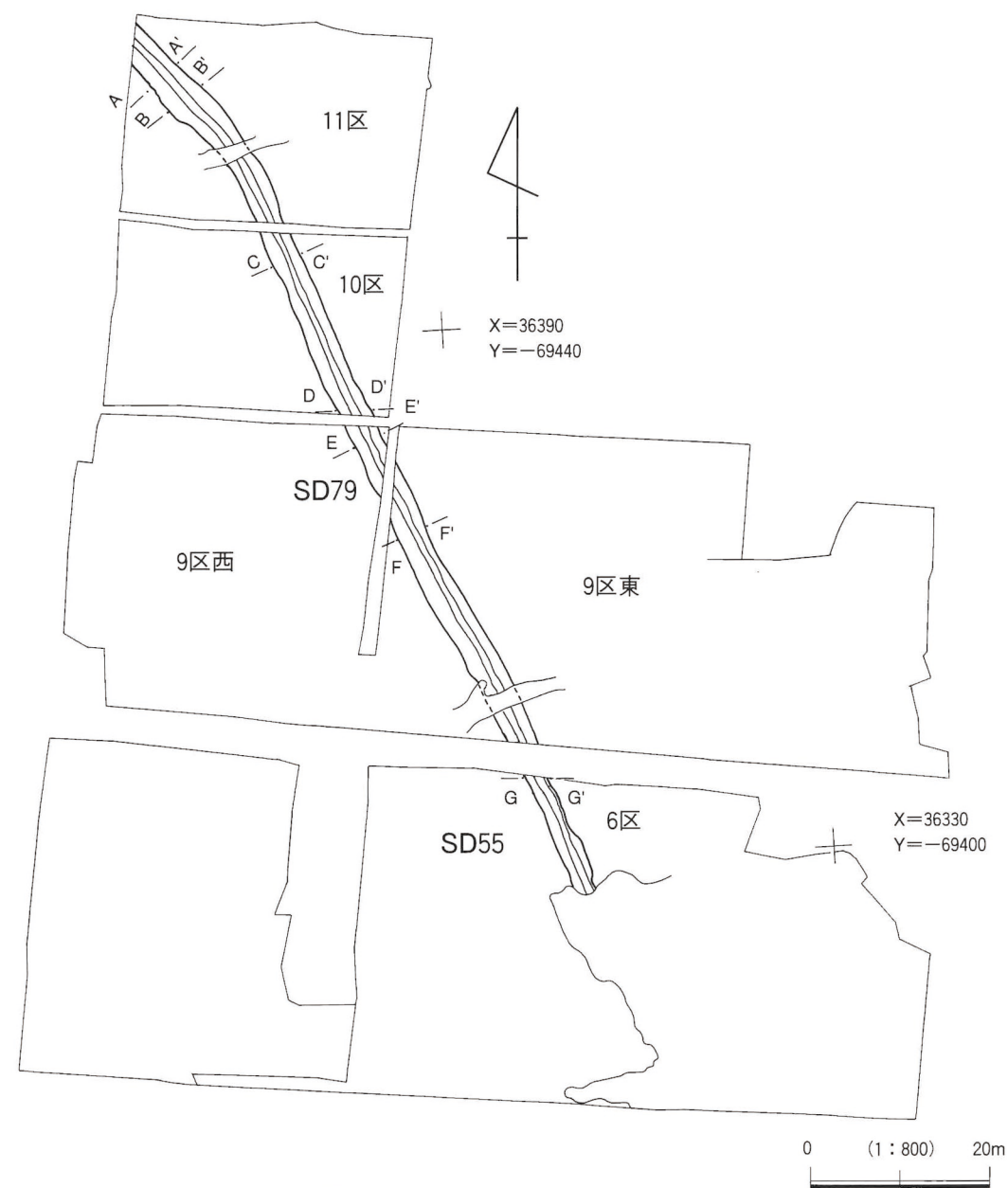


第611図 4号古墳出土遺物－2

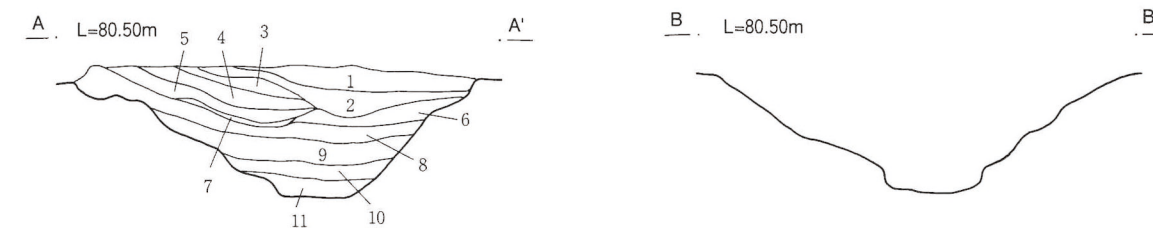
第3節 溝

79号溝（SD79、6区SD55）

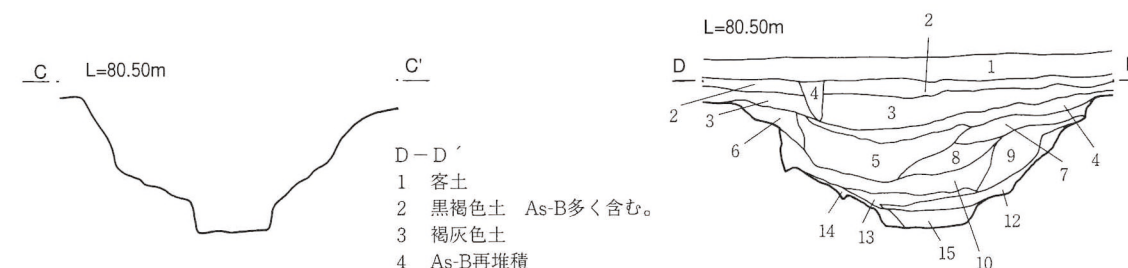
11区・10区から9区東、6区まで走ることが確認できる、南北走行の大きな溝跡である。断面形状は大きく開く台形で、底は平らである。規模は、上幅3.0～4.3m、下幅0.75～1.0m、深さ1.2～1.5m程度である。6世紀前半の9区東174号住居をはじめ、古墳時代の住居を壊し、埋没土中からは5世紀～6世紀の土器が出土する。7世紀後半の土師器も（1）覆土上層で確認される。79号溝の溝底の標高は、北から南に向かって次第に低くなり、溝の埋土下層に流痕が確認される。6世紀後半に掘削された水路と考えられる。



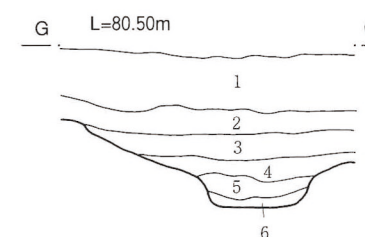
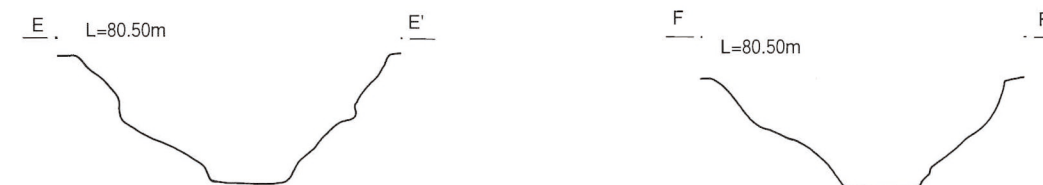
第612図 79号溝（9～11区SD79・6区SD55）



- A-A' 1 におい褐色土 砂質。 2 灰褐色土 シルト質。 3 におい褐色土 砂質、黄色粒子含む。 4 におい褐色土 砂質、黄色粒子含む。 5 におい褐色土 シルト質。 6 灰褐色土 シルト質。 7 灰褐色土 シルト質。 8 灰褐色土 シルト質。 9 におい褐色土 砂質。 10 灰褐色土 小礫含む。水成堆積。 11 褐色土 砂質。水成堆積。



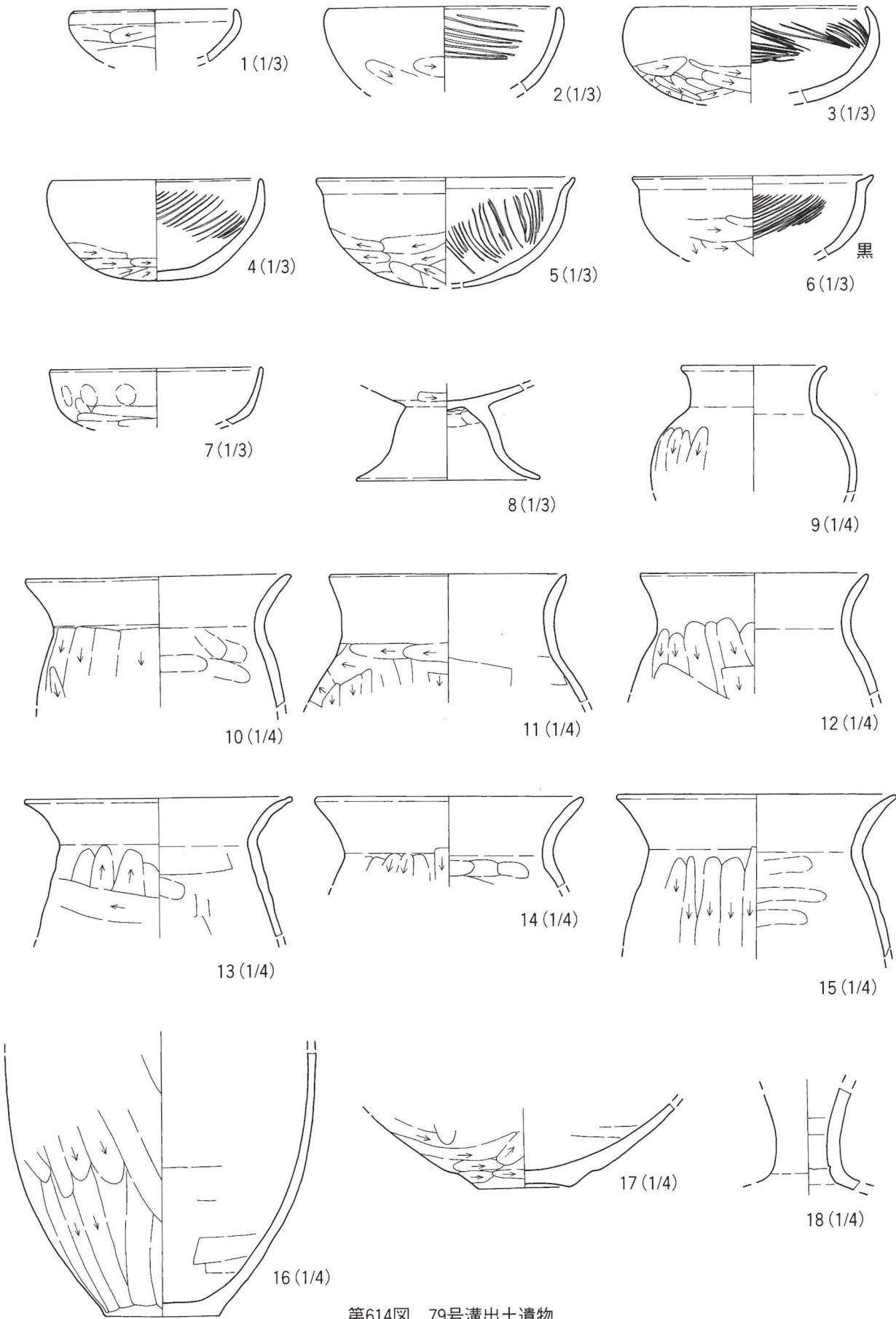
- D-D' 1 客土 2 黒褐色土 As-B多く含む。 3 褐灰色土 4 As-B再堆積 5 褐灰色土 粘性あり。 6 黄灰色土 バミス多い。 7 褐灰色土 As-C含む。 8 褐灰色土 黄色バミス含む。 9 黒褐色土 堆積は密。 10 褐灰色土 川砂多い。 12 黒褐色土 黒色土と粘土の混土。 13 黄灰色土 川砂、礫主体。水成堆積。 14 黄灰色土 15 黄灰色土 川砂多量含む。水成堆積。



- G-G' 1 客土 2 褐灰色土 シルト質。 3 褐灰色土 シルト質。 4 褐灰色土 川砂多い。水成堆積。 5 褐灰色土 砂主体。水成堆積。 6 褐灰色土 細かな川砂主体。水成堆積。

0 (1:80) 2m

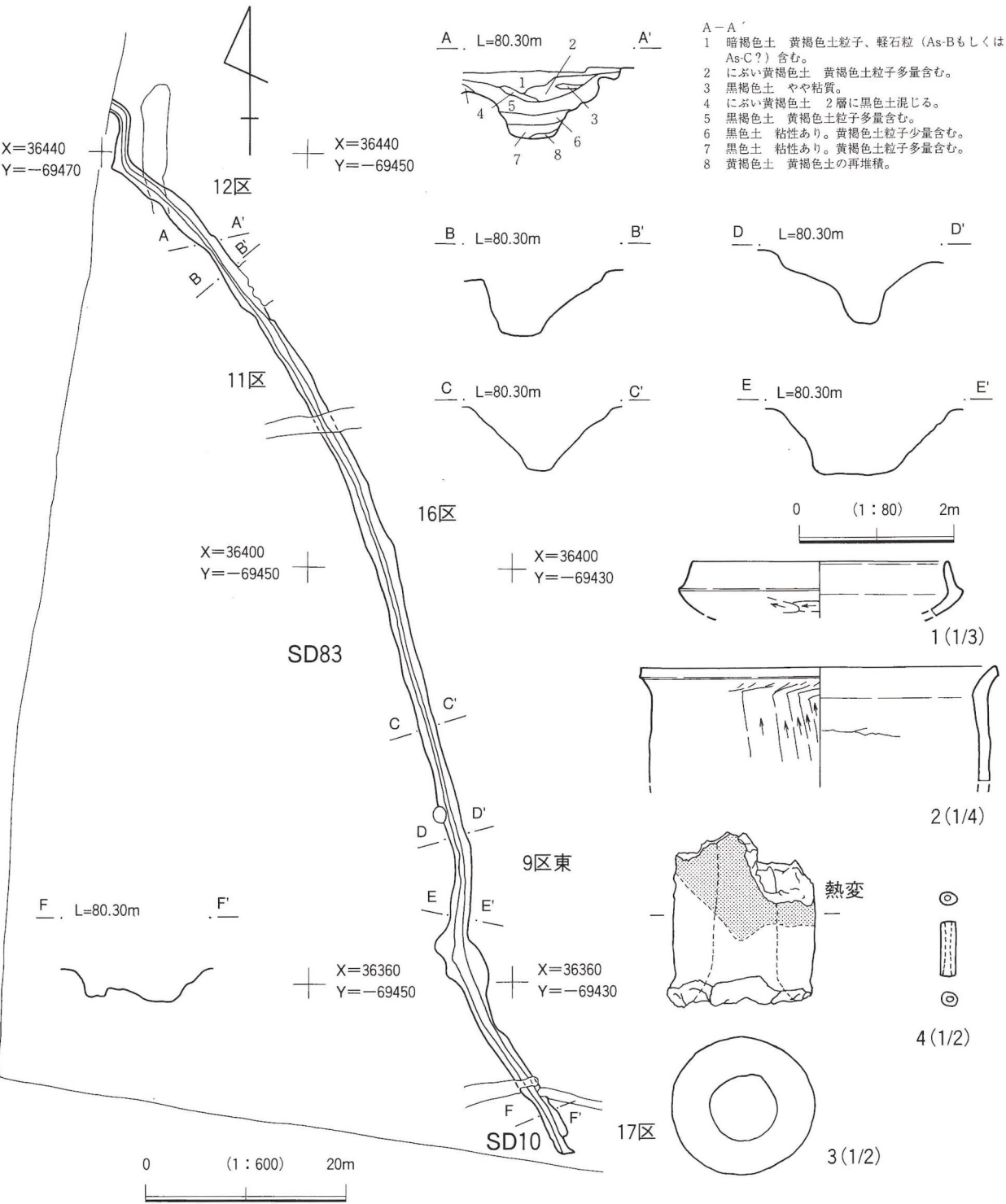
第613図 79号溝



第614図 79号溝出土遺物

83号溝 (SD83)

12区・16区を南北に走り、17区まで連続することを確認できる。断面形状は逆台形、上幅1.0～2.2m、下幅0.4～0.6m、深さ0.9m程度である。溝の覆土中から古墳時代の土器が出土している。土器は6世紀前半～後半に位置づけられる。土層下部に流痕が見られることから水路と考えられる。5・6世紀の住居跡、掘立柱建物跡SB14などを破壊して溝は掘削していること、及び出土遺物から6世紀後半以降に掘られた水路と考えられる。なお、No 3は土師器高坏転用羽口である。

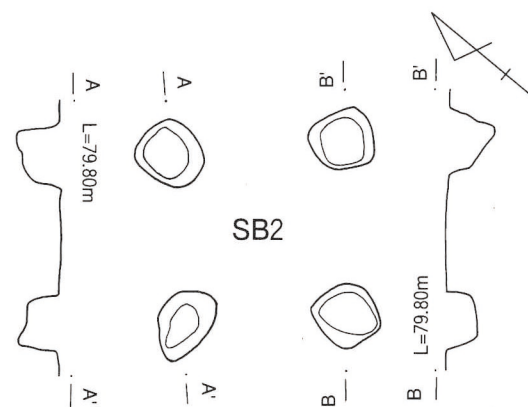


第615図 83号溝 (9区東～12区・16区SD83・17区SD10)

第4節 掘立柱建物

2区SB2

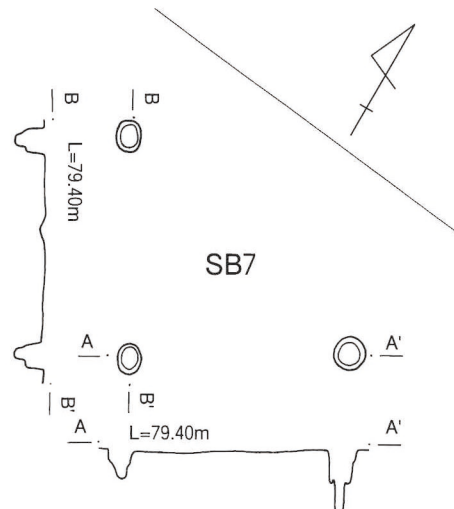
1間×1間の方形の建物跡である。建物軸は北－48°－東、東西1.8m、南北1.8mある。柱穴は、隅丸方形ないし楕円形で0.7～0.8m、深さ35～40cmである。



第616図 2区SB2

2区SB7

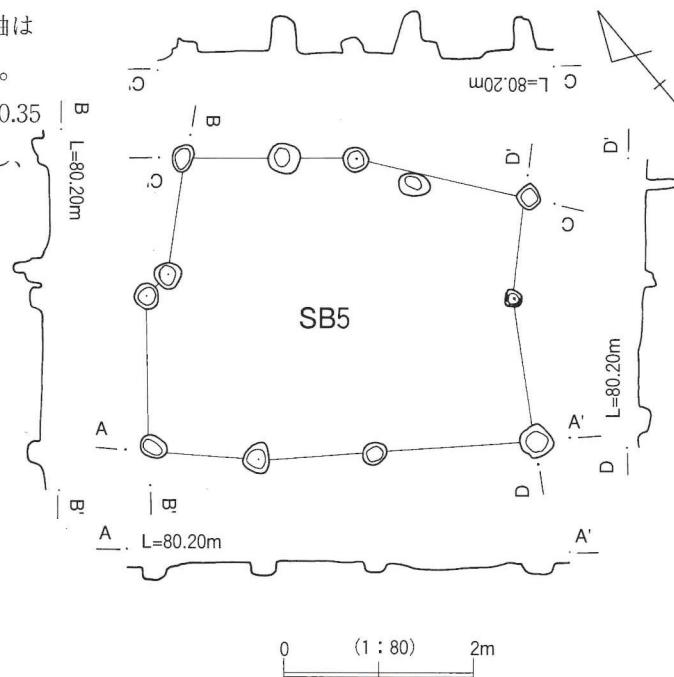
1間×1間の方形の建物跡である。建物軸は北－27°－西、東西2.3m、南北2.35mある。柱穴は円形で0.3～0.35m、深さ30～35cmである。古墳時代の104号住居に柱穴を壊される。



第617図 2区SB7

16区SB5

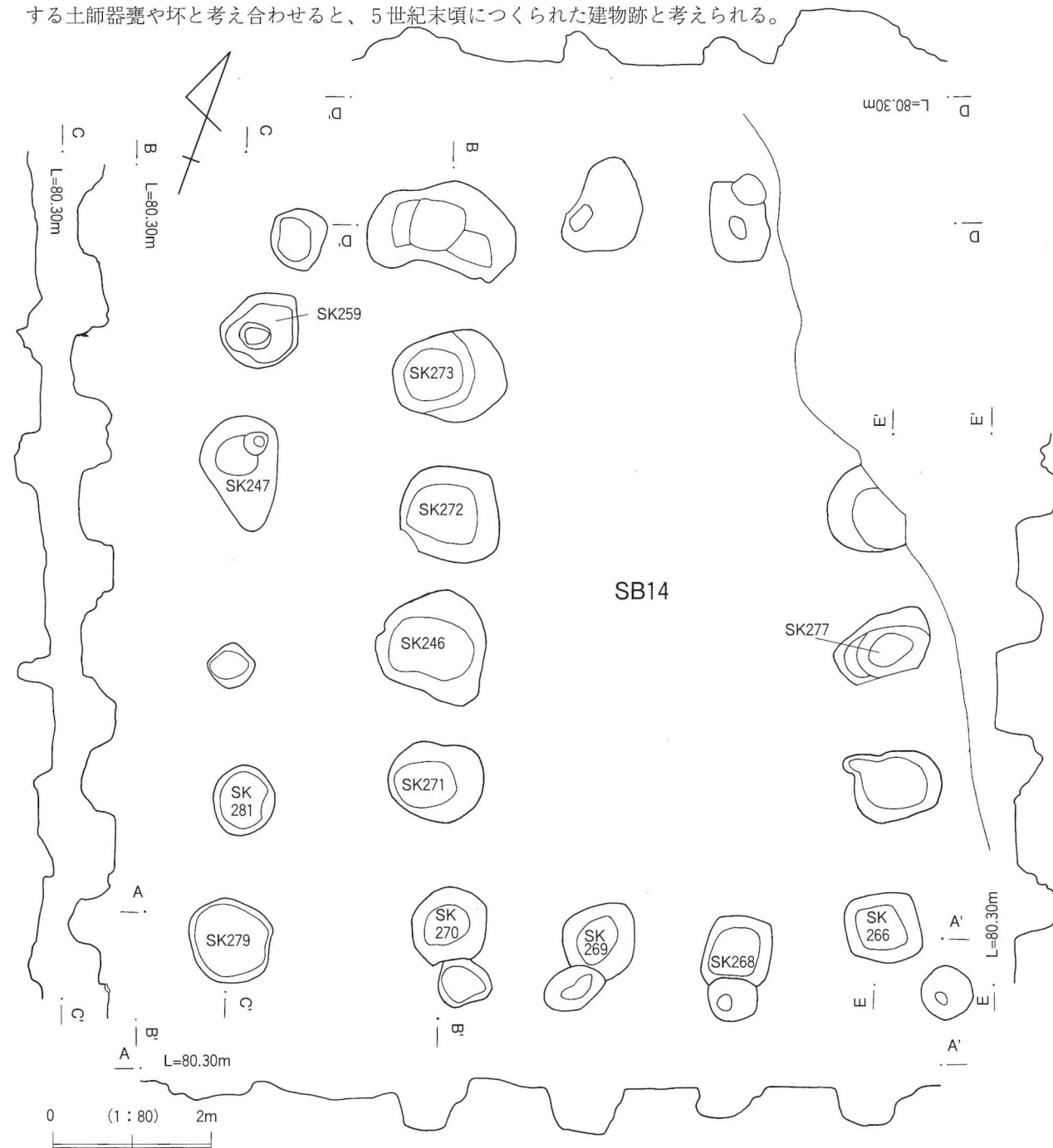
南北に長い2間×2間の建物跡である。建物軸は北－18°－西、東西4.4m南北5.0mの規模である。柱穴は円形ないし隅丸方形で、0.6～1.0m、深さ0.35～0.55m程度である。SK52、SI91、SI80と重複し、これらの遺構を壊す。



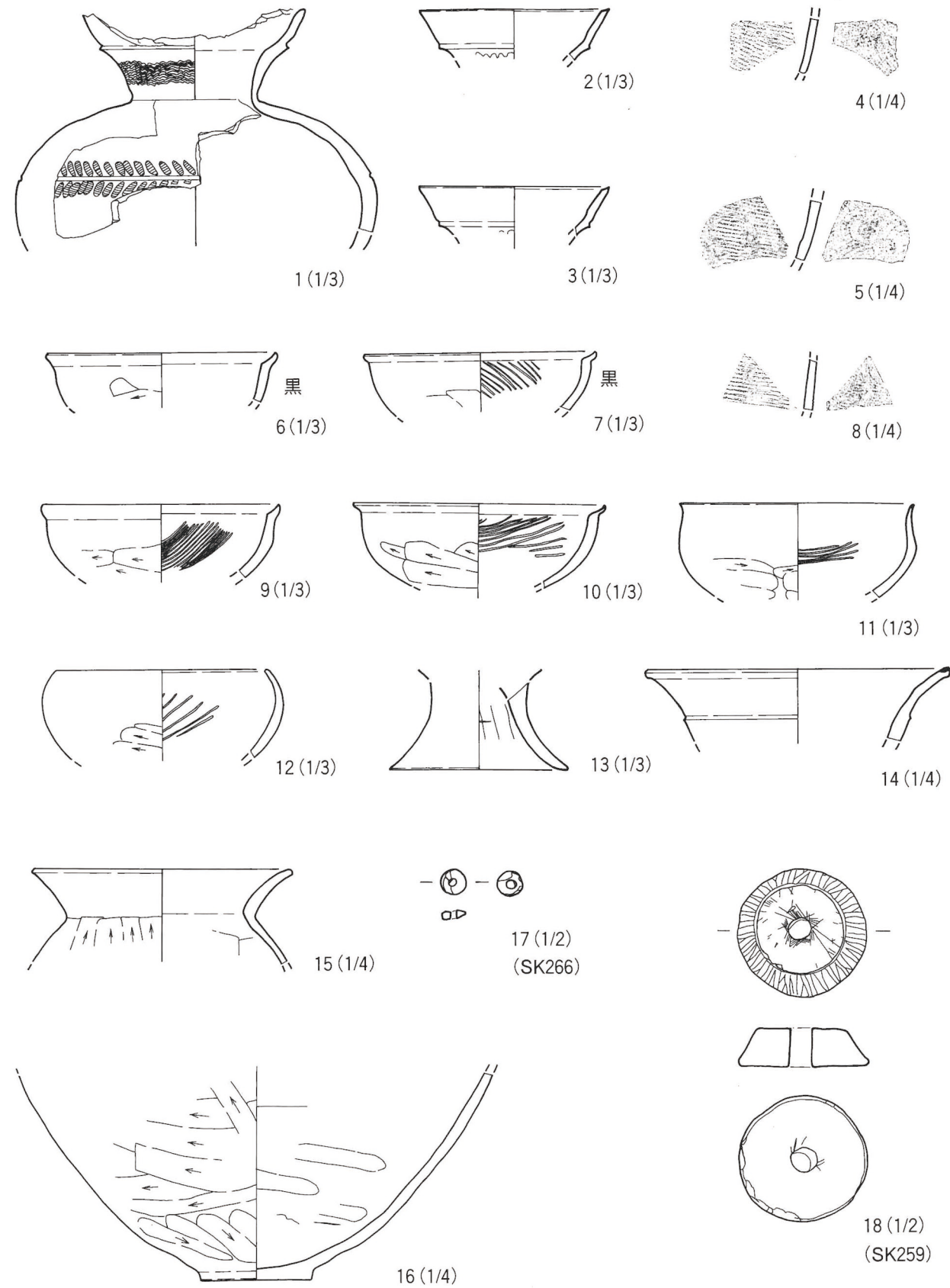
第618図 16区SB5

11区14号掘立柱建物

もとは土坑としてSKの番号をふったが、後に掘立柱建物と判明したため、14号掘立柱建物（SB14）とした。西に幅2.5mの廂、南に幅0.8mの廂を持つ。身舎は3間×5間で5.9m×8.8m、廂を含めた全体では9.8m×8.3mと規模の大きな建物跡である。身舎部分の柱穴は丸みを持った方形プランで、断面形が台形のものが多い。柱穴のうち最大のは、建物北西隅の位置にあるもので1.1m×1.9m、深さ0.45mである。1.2m×1.2m深さ0.45mのものが多い。5世紀後半の竪穴住居を壊して柱穴が掘られ、柱穴の覆土から5世紀末～6世紀初頭に位置づけられる土器片が出土している。なお、SK273とSK246・SK272から出土したハソウの破片は整理の段階で接合した（1）。もとは1個体であったものを破砕し、意図的に柱穴に入れたものと考えられ、石製模造品白玉（17）とともに建築時の祭祀行為が想定される。このハソウは肩部がやや張り頸部は幾分細く、TK23併行期と考えられる。柱穴から出土する土師器甕や坏と考え合わせると、5世紀末頃につくられた建物跡と考えられる。



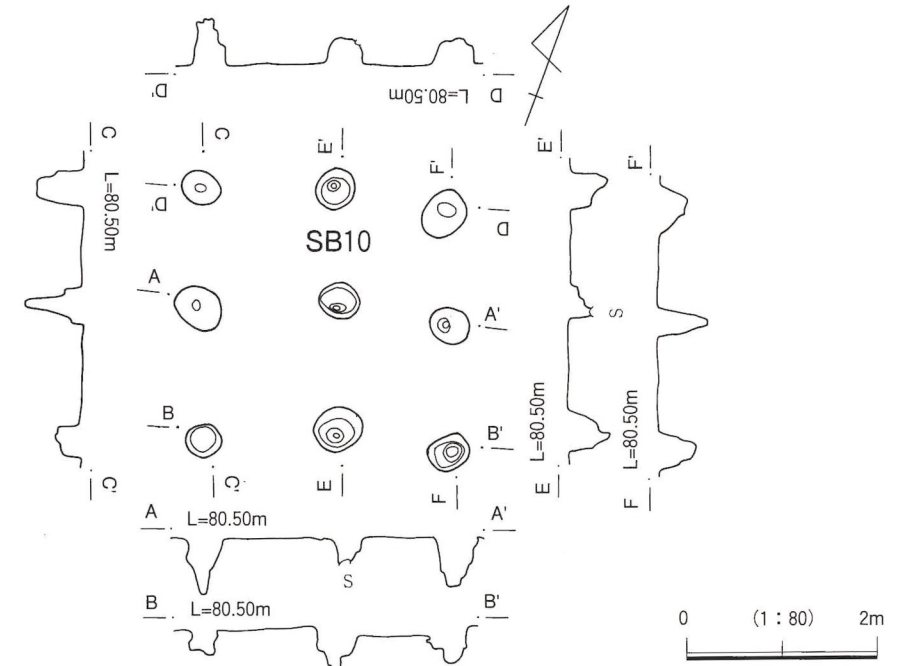
第619図 11区14号掘立柱建物



第620図 11区14号掘立柱建物出土遺物

9区西SB10

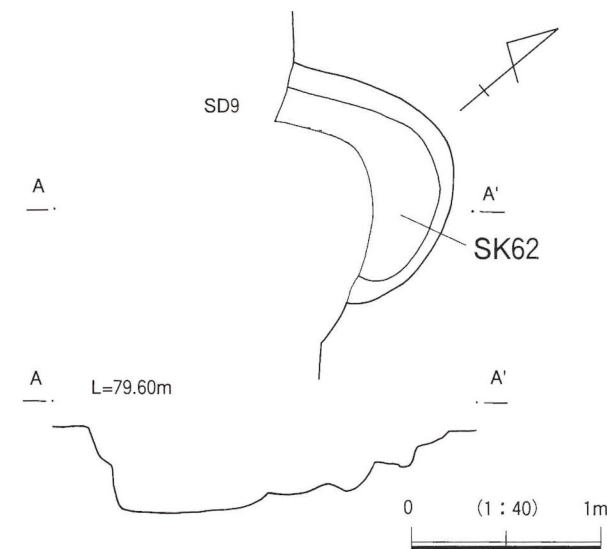
2間×2間の総柱の建物である。東西2.55m、南北2.55mと方形プランである。建物軸は北-15°-西、柱穴は皆大きい。円形ないし楕円形プランで、径0.4~0.5m、深さ0.3~0.5m、底に行くにつれ、すばまっている。柱穴セクションについては、柱が皆引き抜かれたためか柱痕は観察できない。また、As-Bは埋土に含まれていない。柱穴からの出土遺物は、縄文土器と古墳時代の土器に限られる。この建物は、総柱であり、古墳時代の倉庫の可能性が高い。



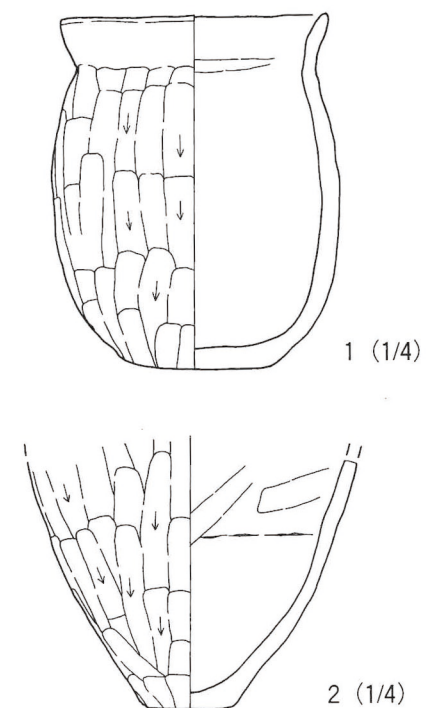
第621図 9区西SB10

第5節 土坑

2区SK62 1.06m×0.9m+αの楕円形プラン、深さ0.35mの規模である。自然埋没、6世紀後半と考えられる。

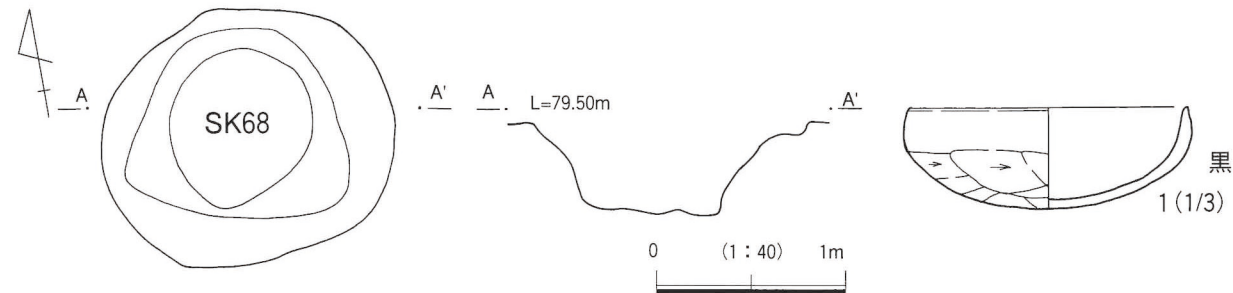


第622図 2区SK62



第623図 2区SK62出土遺物

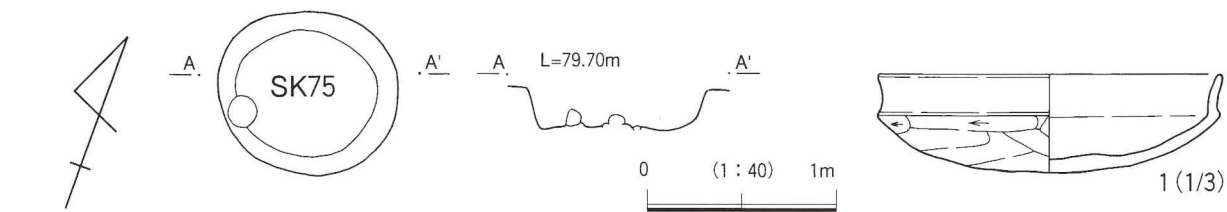
2区SK68 1.57m×1.35mの円形プラン、深さ0.48m、自然埋没、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。



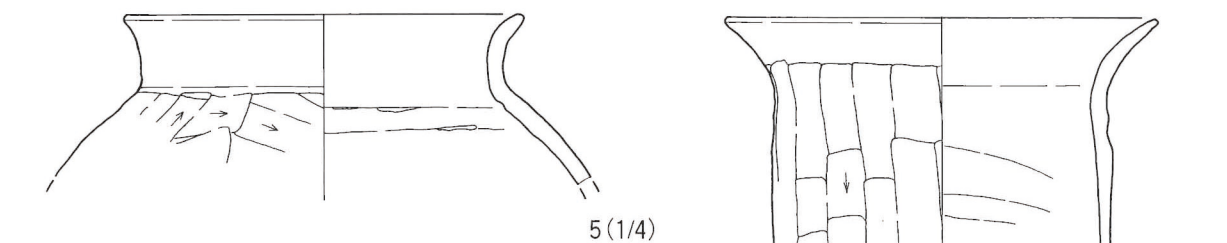
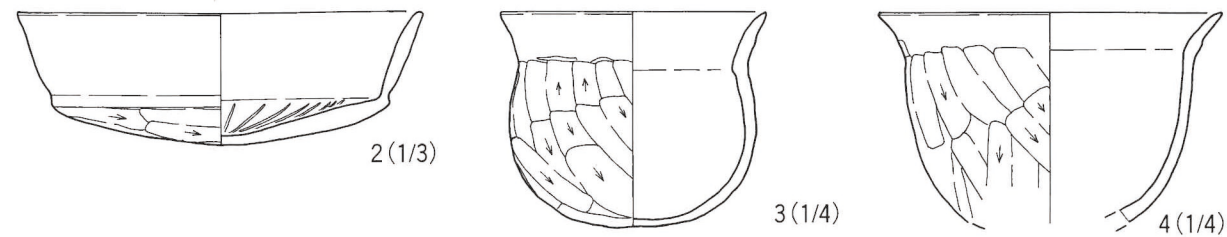
第624図 2区SK68

第625図 2区SK68出土遺物

2区SK75 0.98m×0.90mの円形プラン、深さ0.20m、礫混じり、一次的な堆積、6世紀後半と考えられる。

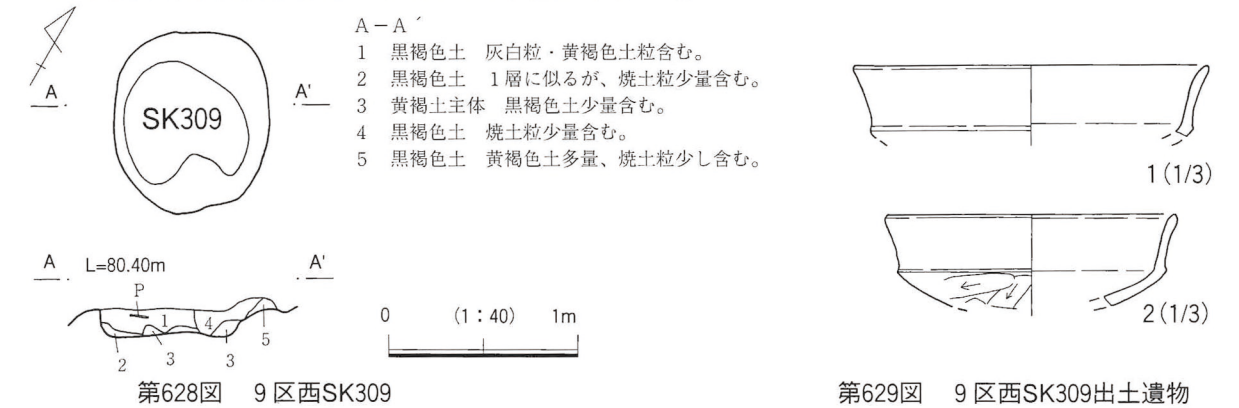


第626図 2区SK75



第627図 2区SK75出土遺物

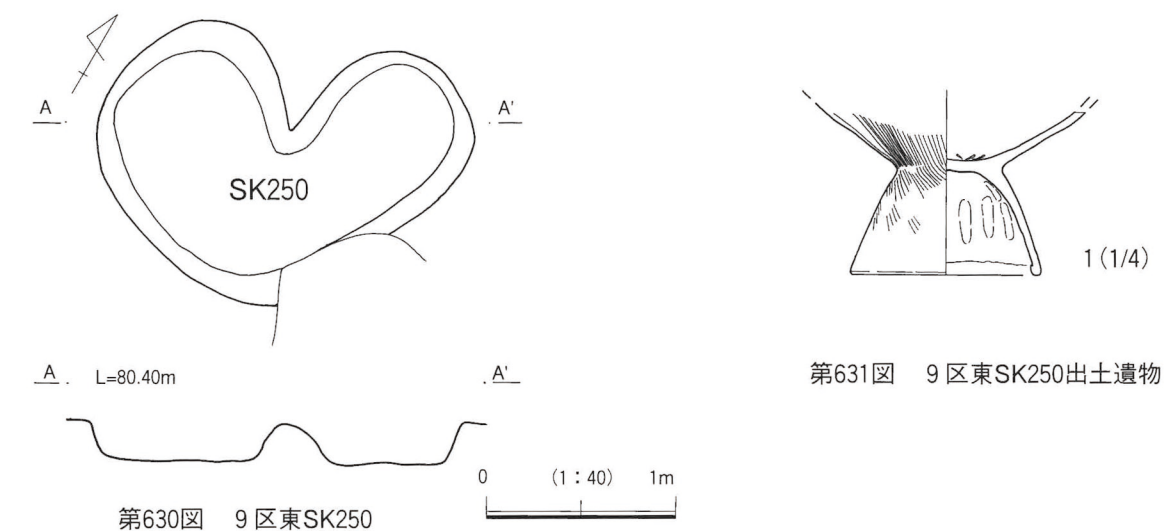
9区西SK309 174号住居のカマド部分にあり、カマド袖を壊す。長軸0.95m短軸0.80mの楕円形プランで、深さ0.20m程度である。自然埋没。6世紀後半に位置づけられる。



第628図 9区西SK309

第629図 9区西SK309出土遺物

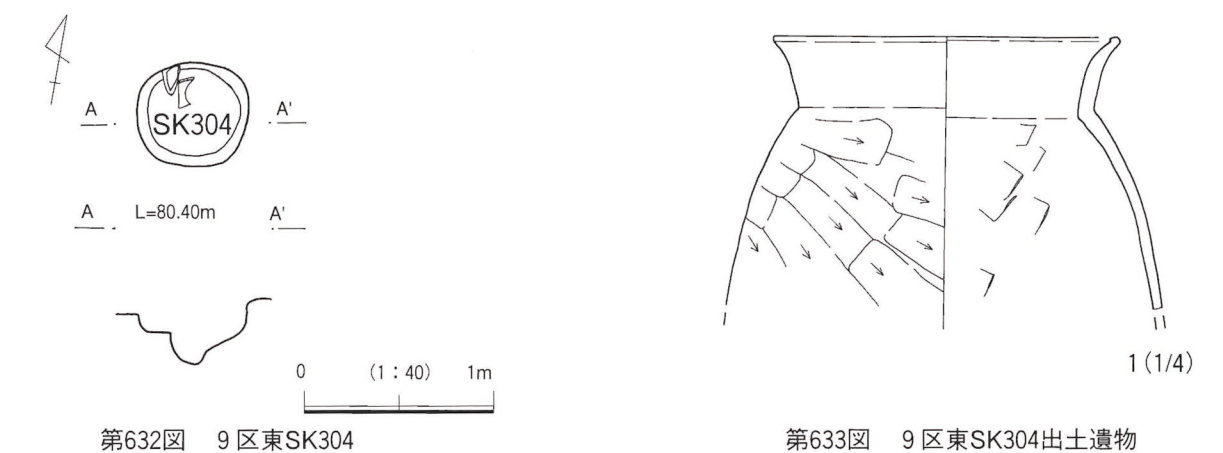
9区東SK250 1.95m×1.50m、中央がくびれる形をしている。深さ0.30mと浅い。西部分で83号溝に壊されている。自然埋没。古墳前期に位置づけられる。



第630図 9区東SK250

第631図 9区東SK250出土遺物

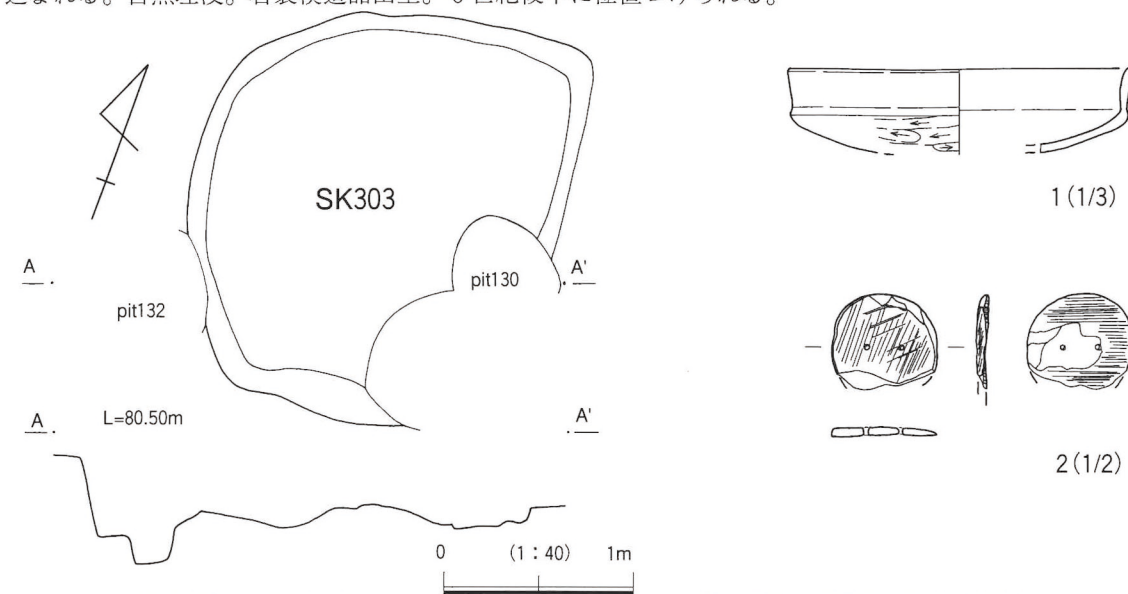
9区東SK304 0.6m×0.55mの楕円形プランで、深さ0.35m。二段に掘られている。5世紀末と考えられる。



第632図 9区東SK304

第633図 9区東SK304出土遺物

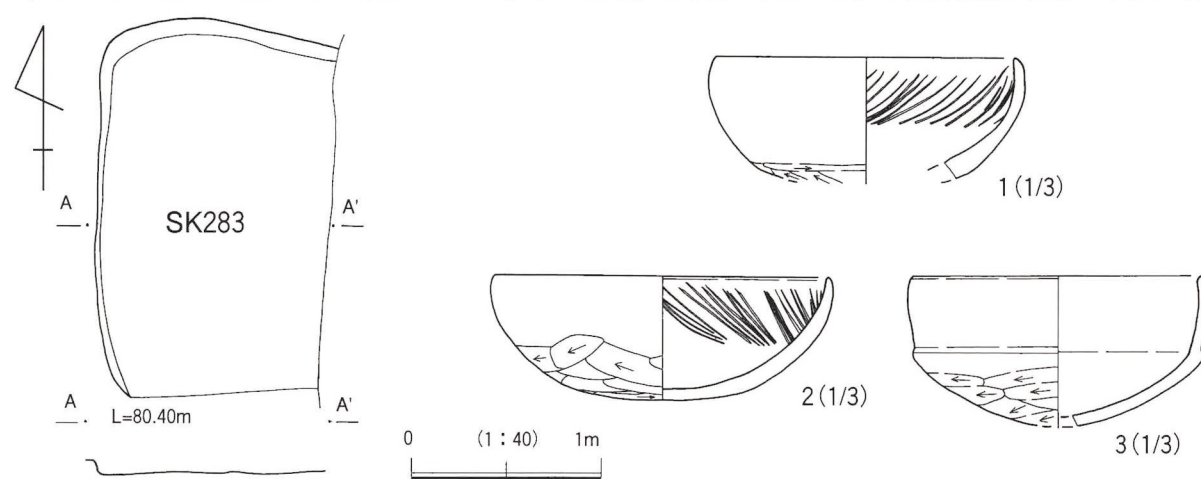
10区SK303 2.2m×2.0mの隅丸方形で、深さ0.3m程度である。197号住居を壊し、ピット130・132・305に掘り込まれる。自然埋没。石製模造品出土。6世紀後半に位置づけられる。



第634図 10区SK303

第635図 10区SK303出土遺物

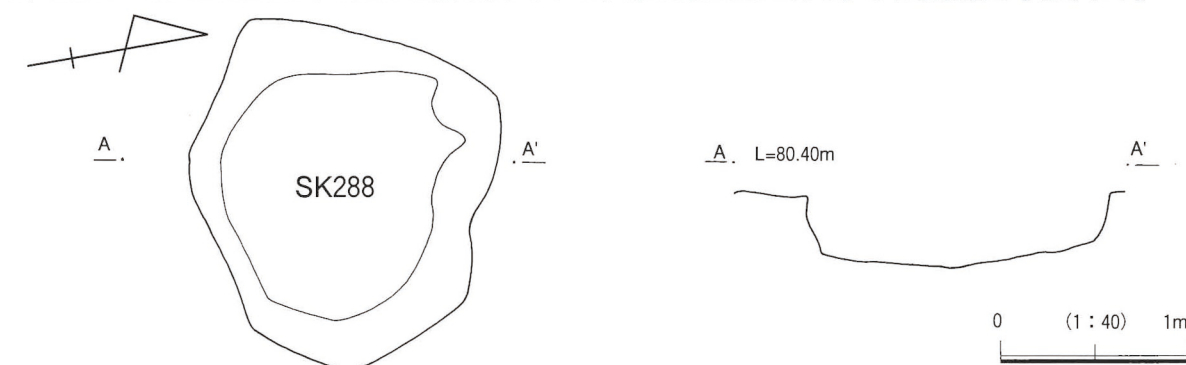
11区SK283 2.0m×1.3m+αの方形プランで、深さ0.1m。98号溝に壊される。6世紀初頭に位置づけられる。



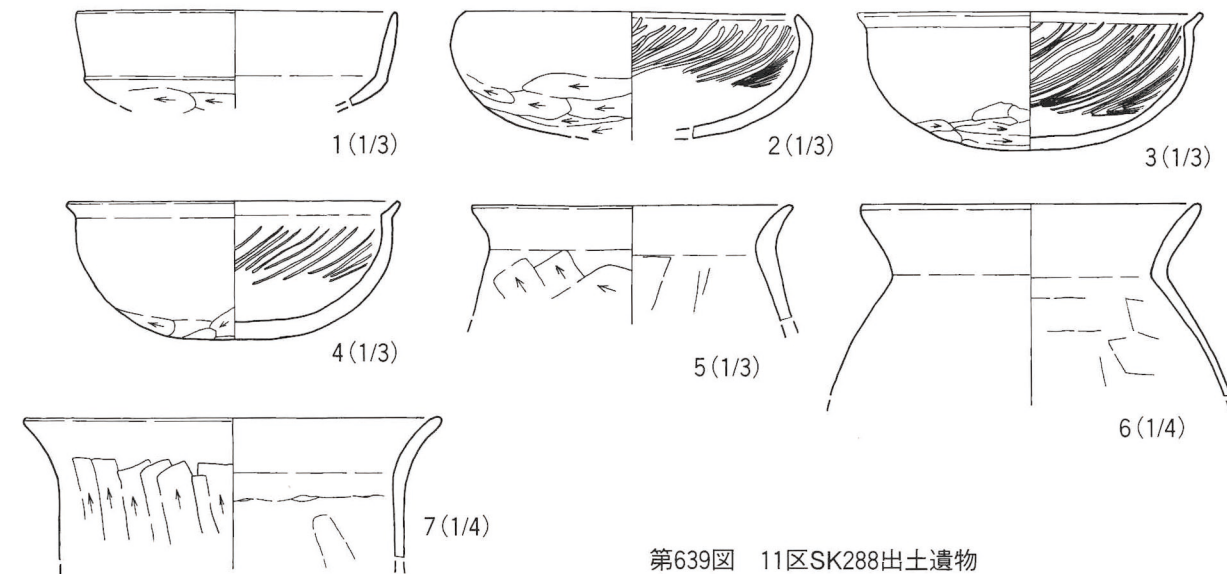
第636図 11区SK283

第637図 11区SK283出土遺物

11区SK288 1.8m×1.5mのやや歪んだ楕円形プランで、深さ約0.15mである。6世紀初頭と考えられる。

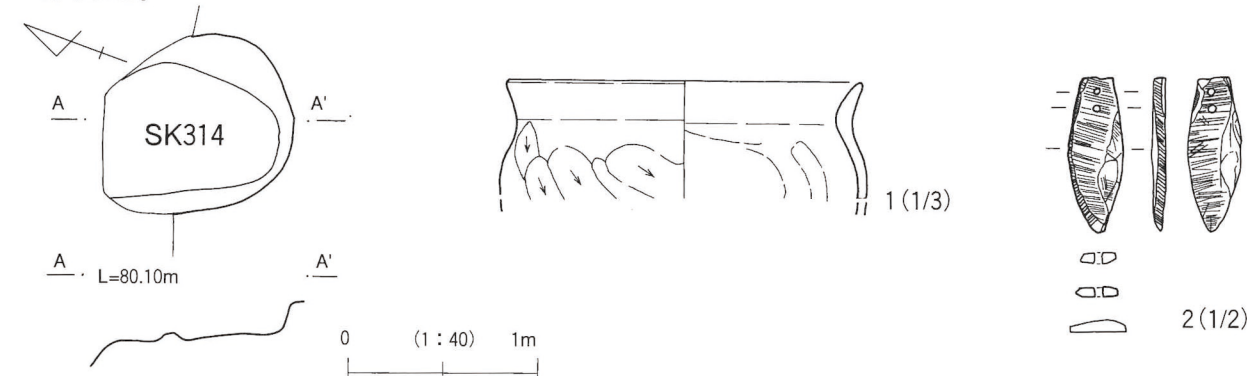


第638図 11区SK288



第639図 11区SK288出土遺物

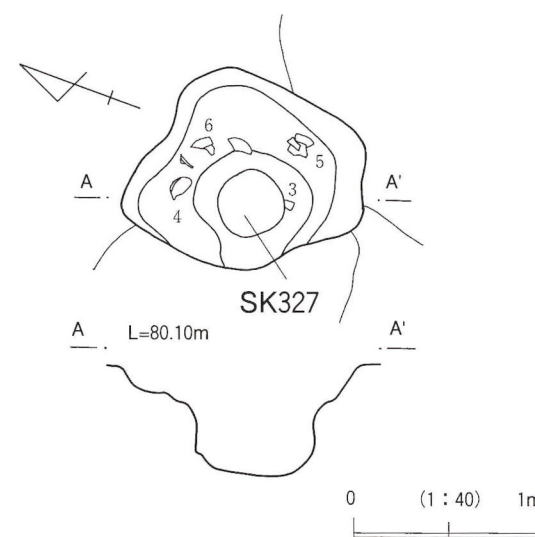
11区SK314 1.1m×0.9mの楕円形プラン。深さ約0.2m。自然埋没。SD80（中世）に壊される。6世紀初頭と考えられる。



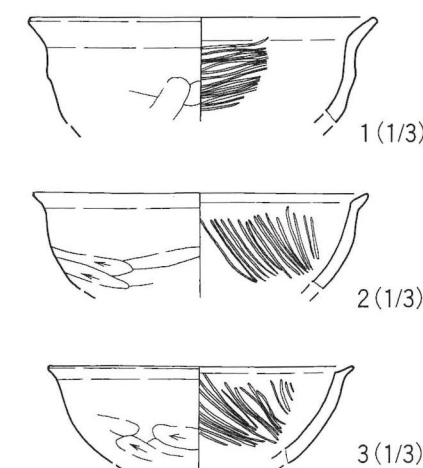
第640図 11区SK314

第641図 11区SK314出土遺物

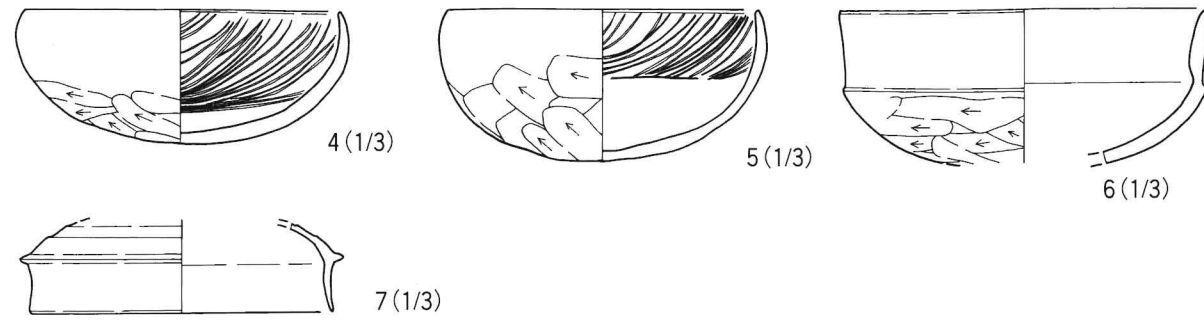
11区SK327 1.32m×1.05mのやや歪んだ楕円形プラン。深さ0.64m。137号住居を掘り込み、246号土坑を壊す。5世紀末に位置づけられる。



第642図 11区SK327

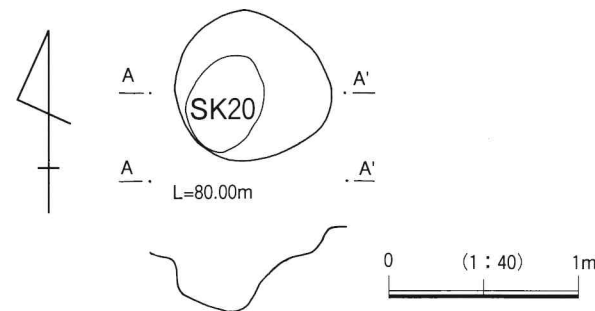


第643図 11区SK327出土遺物一

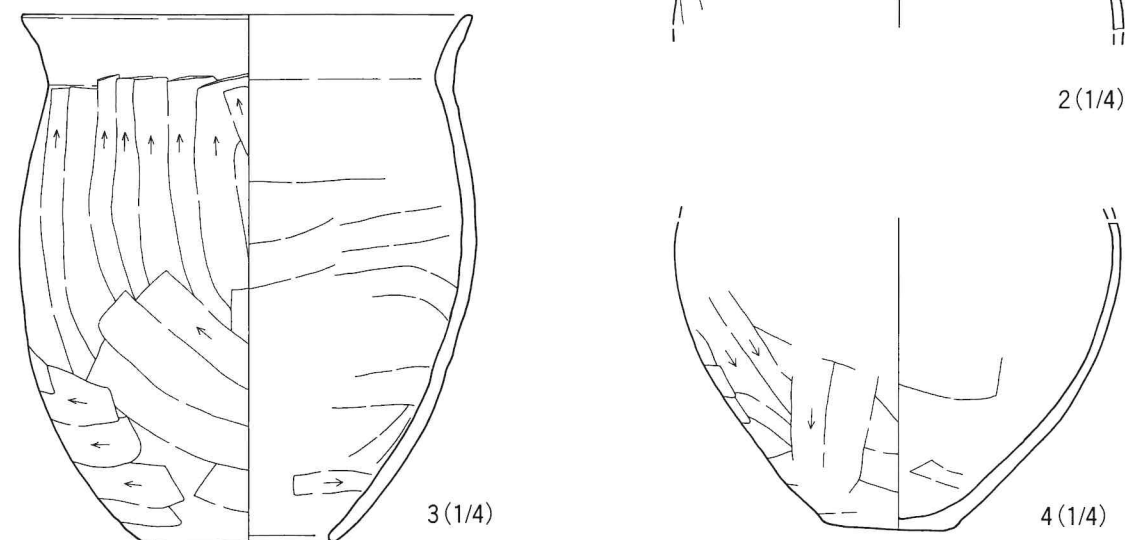


第644図 11区SK327出土遺物ー 2

12区SK20 0.85m×0.80mの楕円形プラン、深さ約0.3m。12区SD2（東山道側溝）に上部を壊される。5世紀末と考えられる。

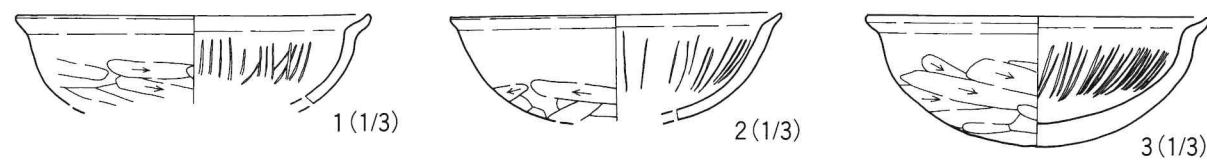


第645図 12区SK20

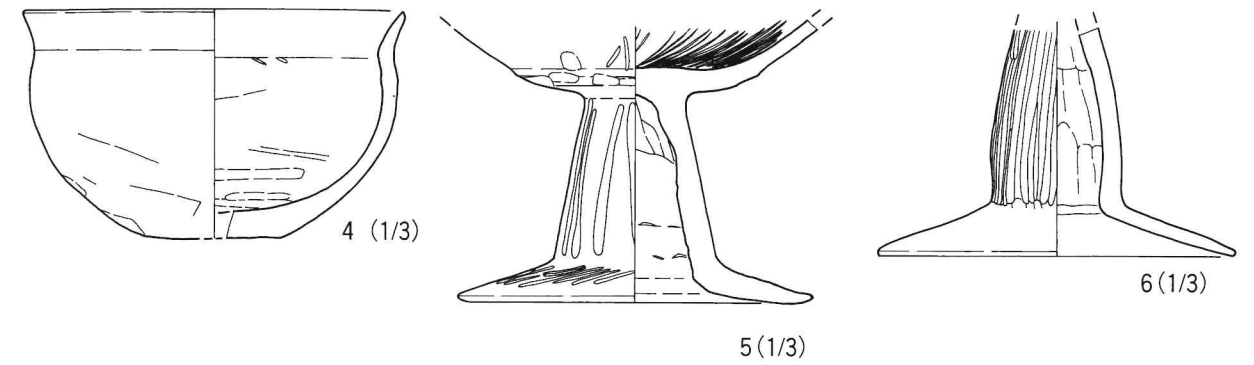


第646図 12区SK20出土遺物

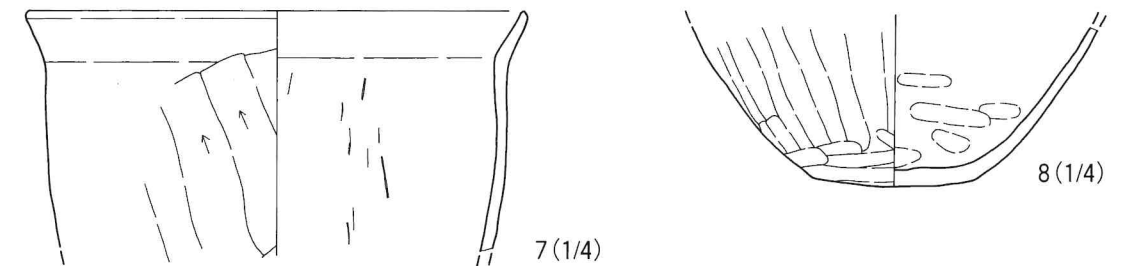
13区SK6 1.3×1.3mの円形プラン、深さ0.36m。円筒状の掘方、自然埋没。5世紀後半に位置づけられる。



第647図 13区SK6出土遺物ー 1

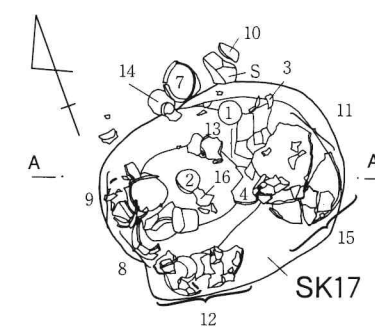


第648図 13区SK6出土遺物

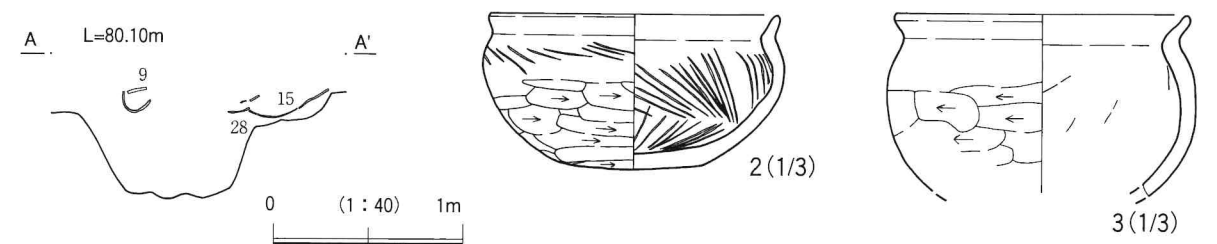


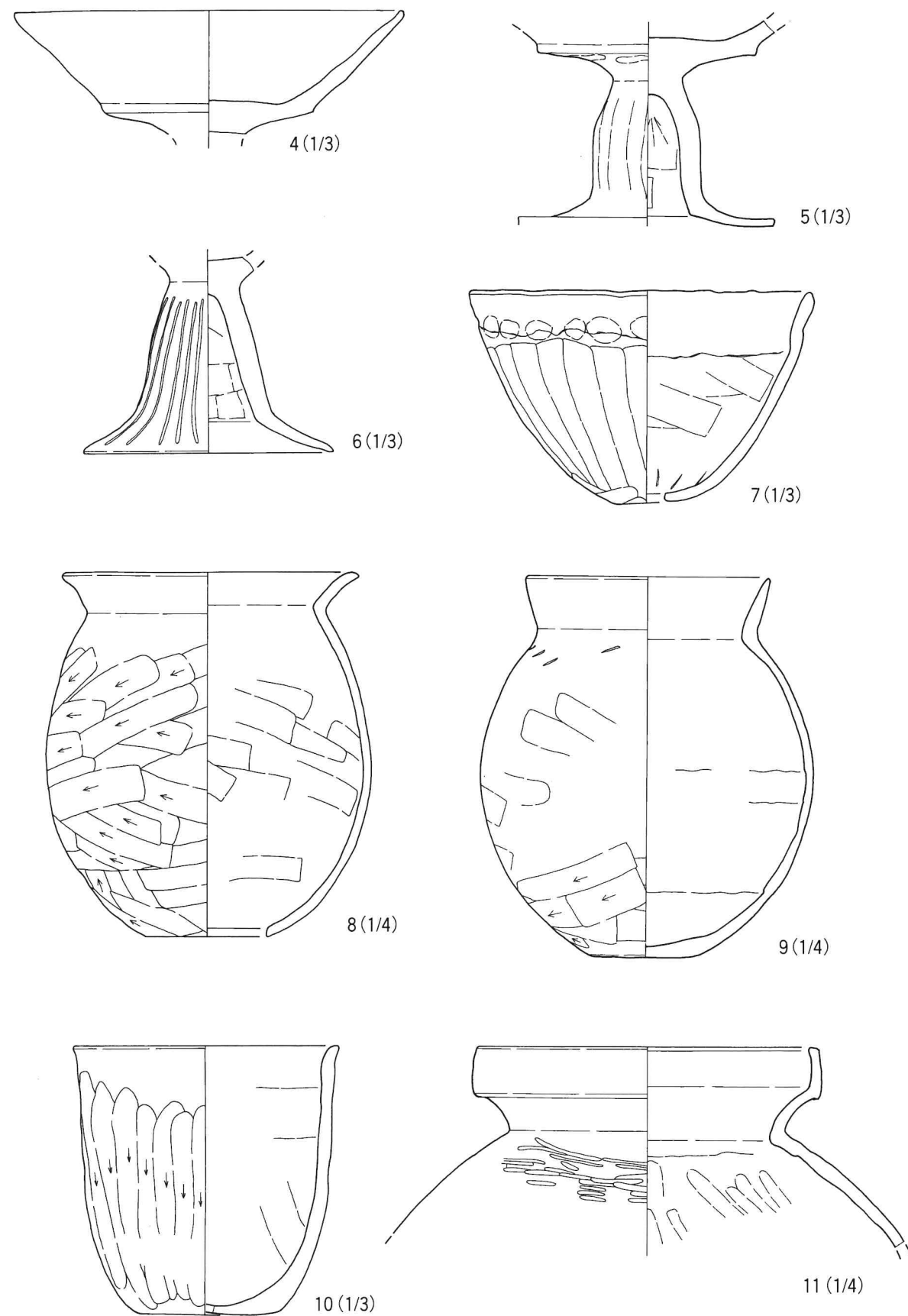
第649図 13区SK6・出土遺物ー 2

13区SK17 1.30m×1.0mの楕円形プラン、深さ0.56m。自然埋没。5世紀前半に位置づけられる。

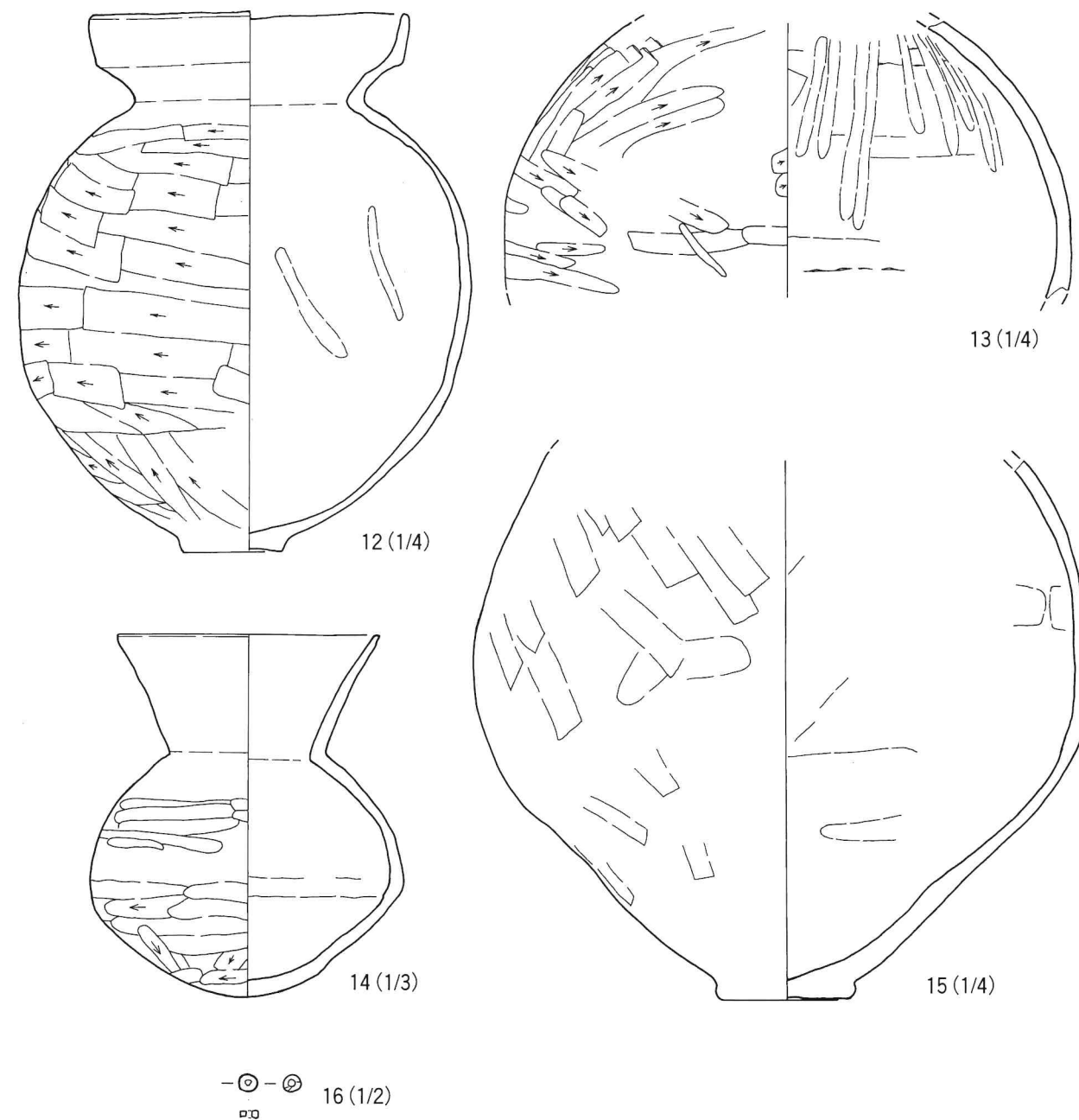


第650図 13区SK17・出土遺物ー 1



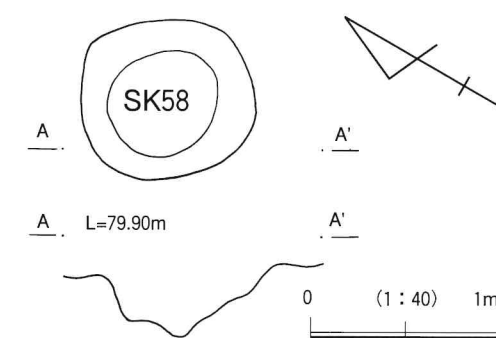


第651図 13区SK17出土遺物－2

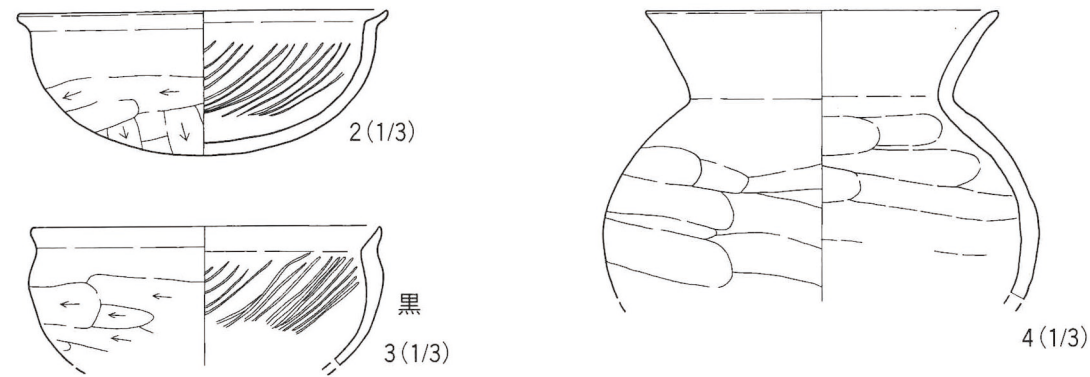


第652図 13区SK17出土遺物－3

16区SK58 0.90m×0.86mの楕円形プラン。深さ0.44m。5世紀末に位置づけられる。

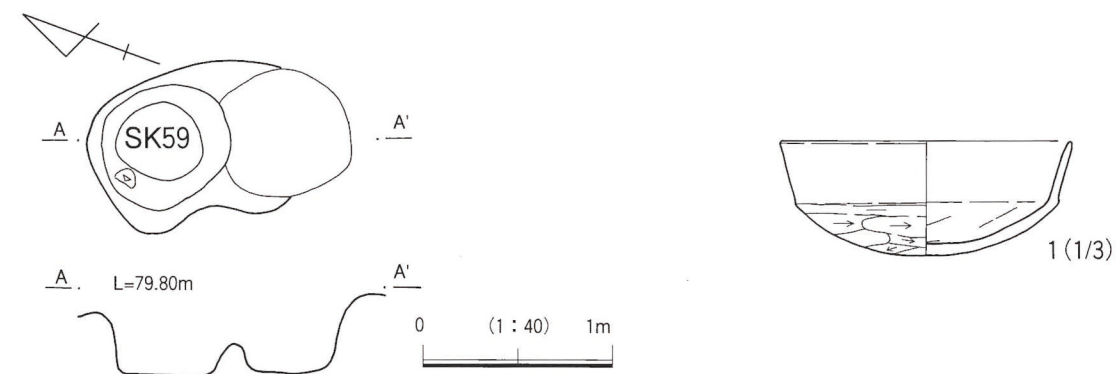


第653図 16区SK58・出土遺物－1



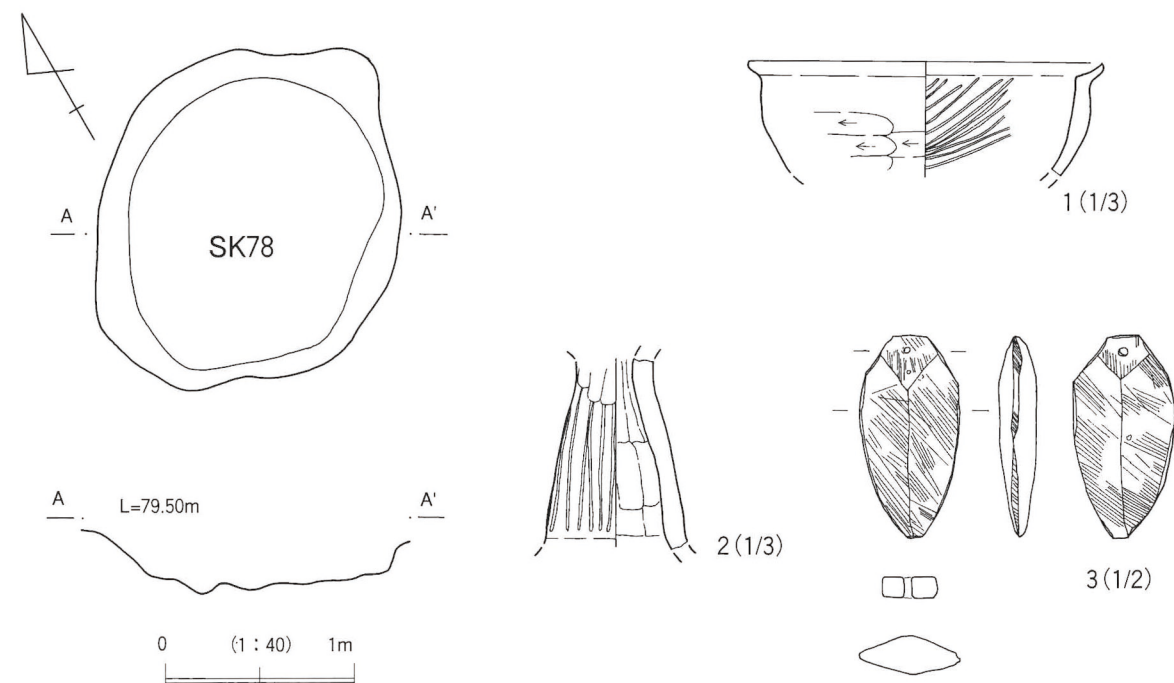
第654図 16区SK58出土遺物ー2

16区SK59 1.20m×0.78mの不整円形プラン。深さ0.36m。6世紀初頭と考えられる。



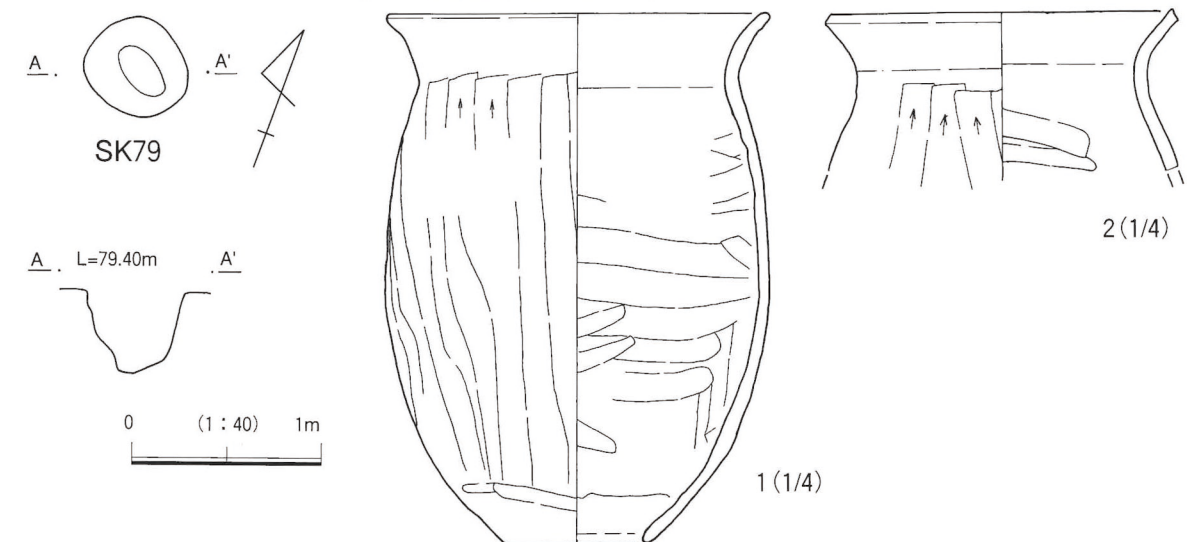
第655図 16区SK59・出土遺物

16区SK78 2.00m×1.68mの不整円形プラン。深さ0.30m。5世紀後半に位置づけられる。



第656図 16区SK78出土遺物

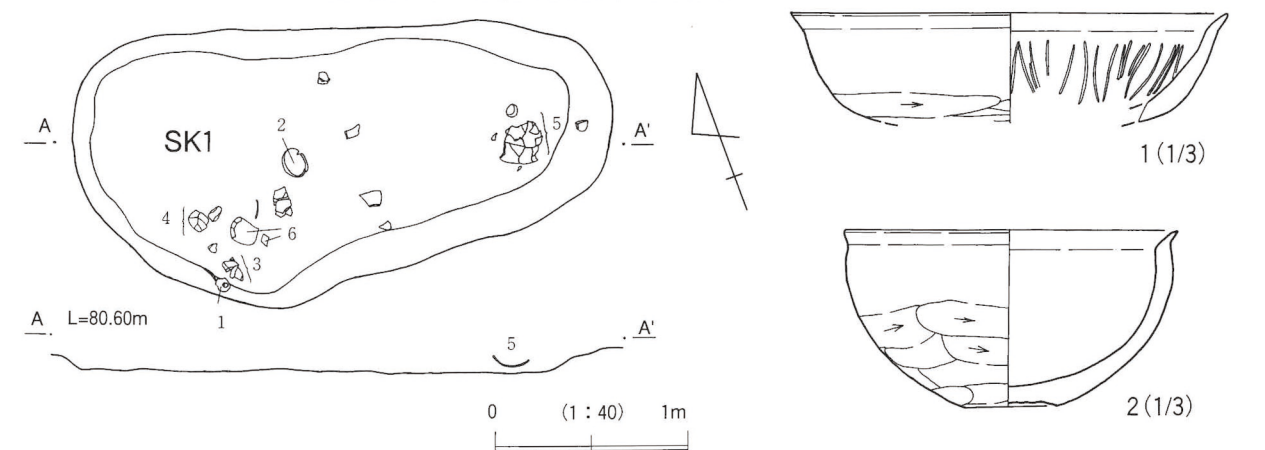
16区SK79 直径0.61mの円形プラン。深さ0.46m。5世紀末に位置づけられる。



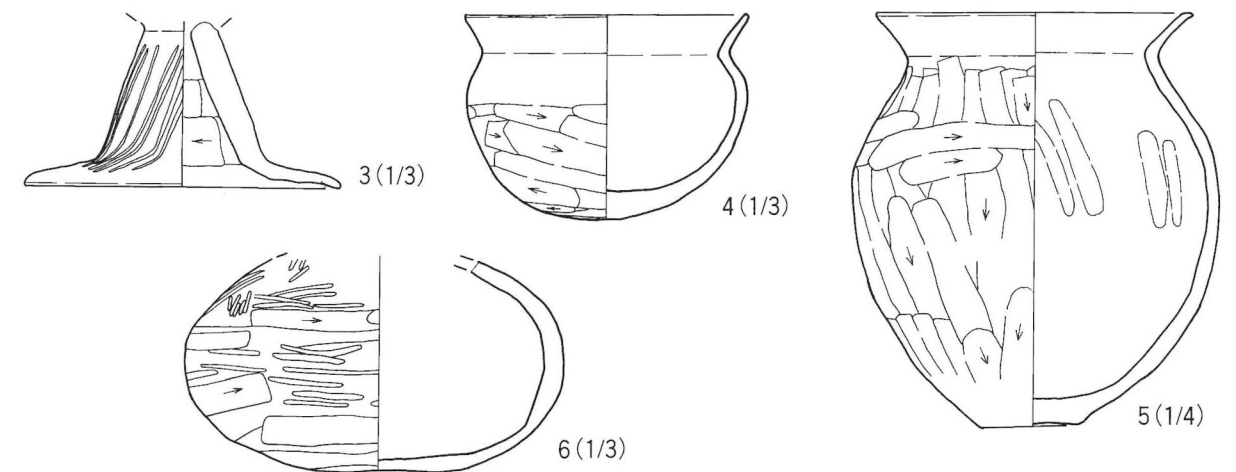
第657図 16区SK79

第658図 16区SK79出土遺物

17区SK1 2.74m×1.35mの楕円形プラン。深さ0.15m。5世紀後半に位置づけられる。

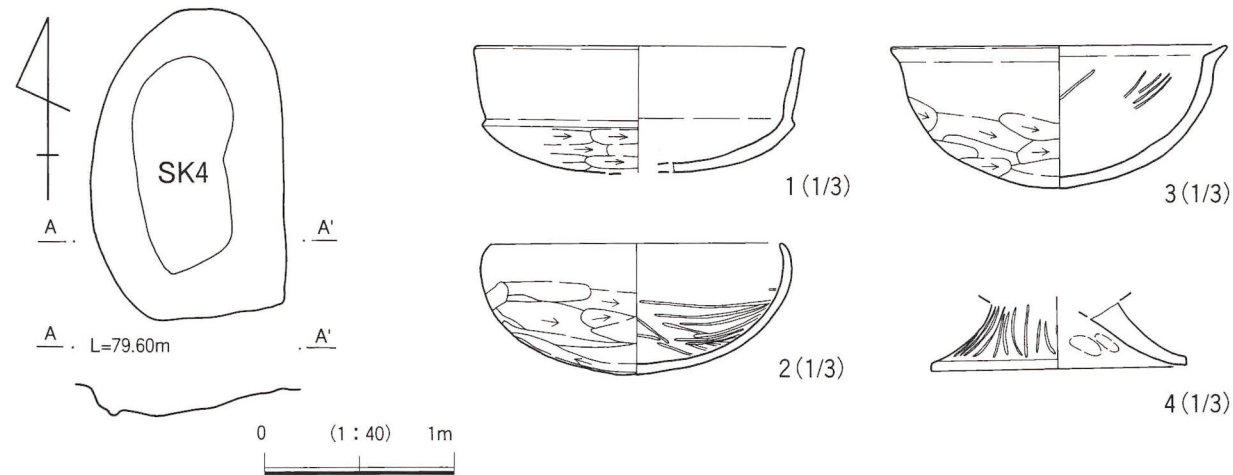


第659図 17区SK1



第660図 17区SK1出土遺物

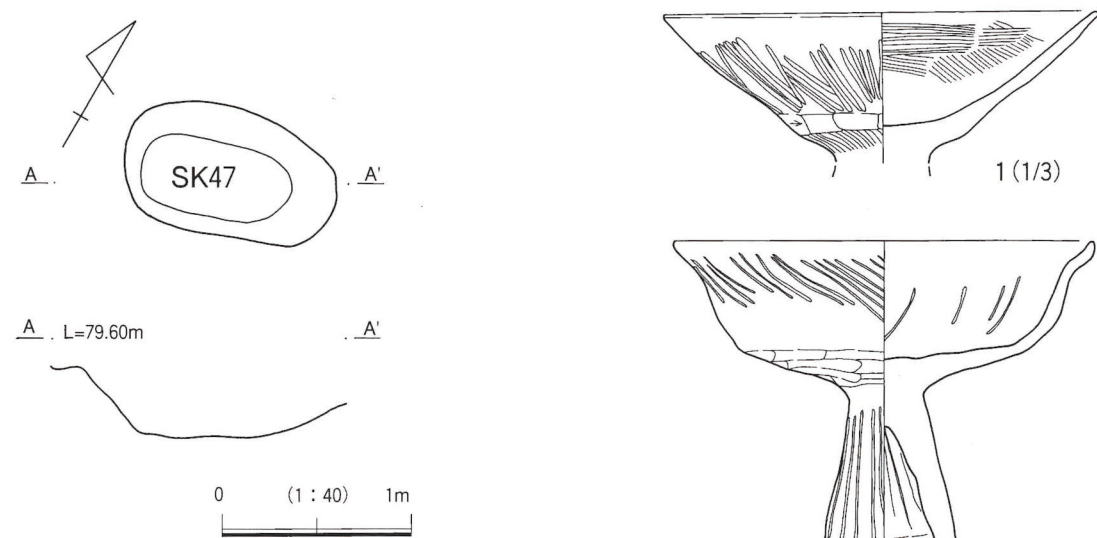
17区SK4 1.63m×1.03mの楕円形プラン。深さ0.17m、6世紀初頭と考えられる。



第661図 17区SK4

第662図 17区SK4出土遺物

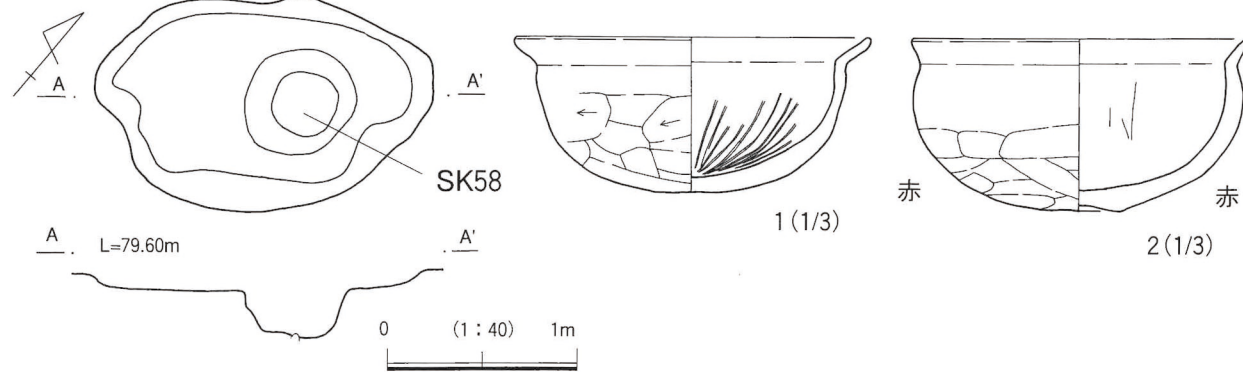
18区SK47 1.15m×0.65mの楕円形プラン。深さ0.34m。5世紀後半に位置づけられる。



第663図 18区SK47

第664図 18区SK47出土遺物

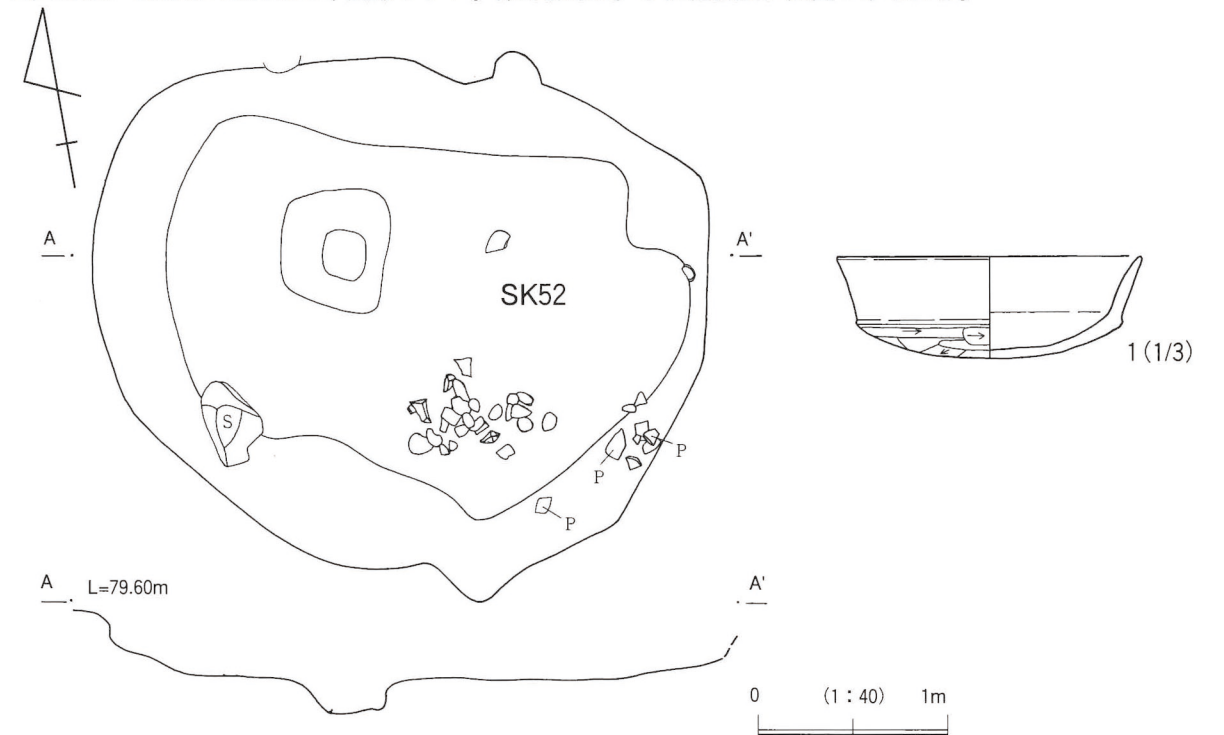
18区SK58 1.80m×1.10mの不整楕円形プラン。深さ0.32m。5世紀後半と考えられる。



第665図 18区SK58

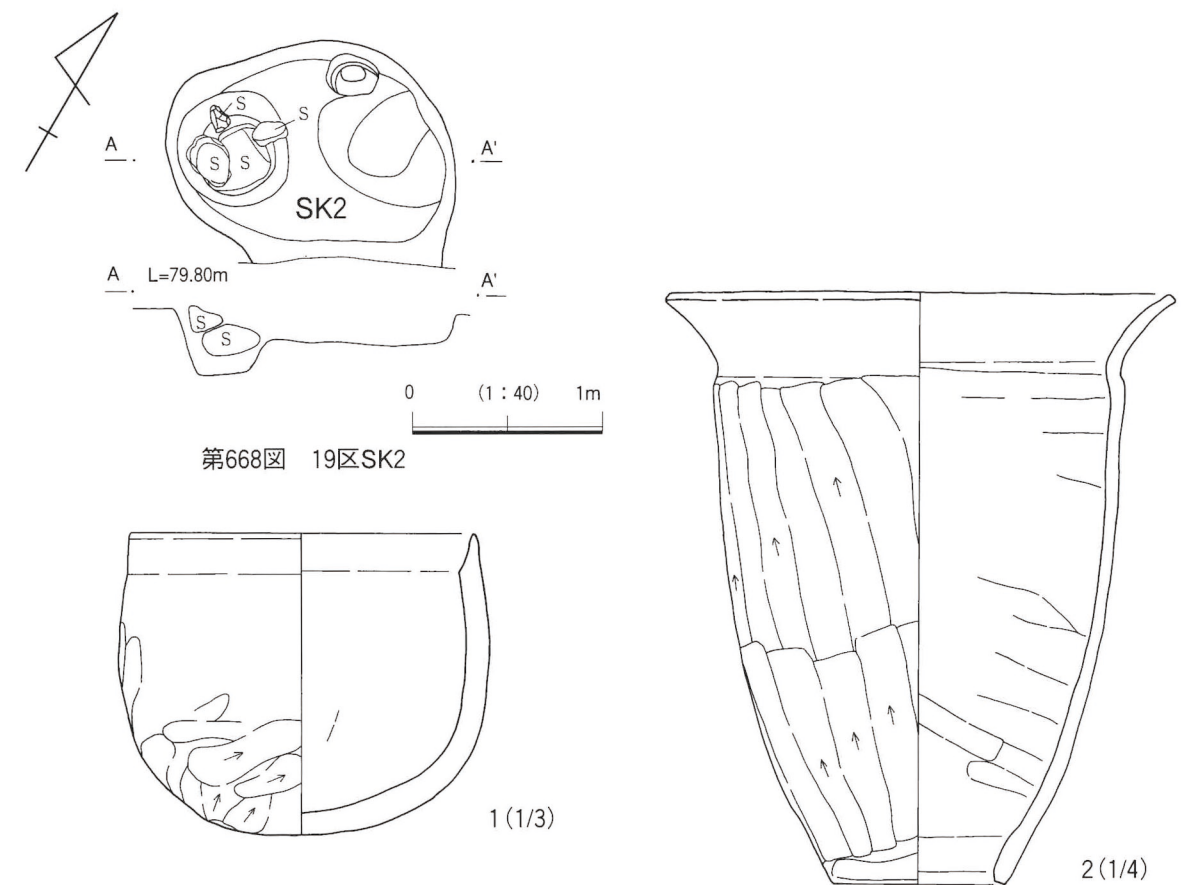
第666図 18区SK58出土遺物

18区SK52 3.25m×2.70mの不整形プラン。深さ0.15m。6世紀初頭に位置づけられる。



第667図 18区SK52出土遺物

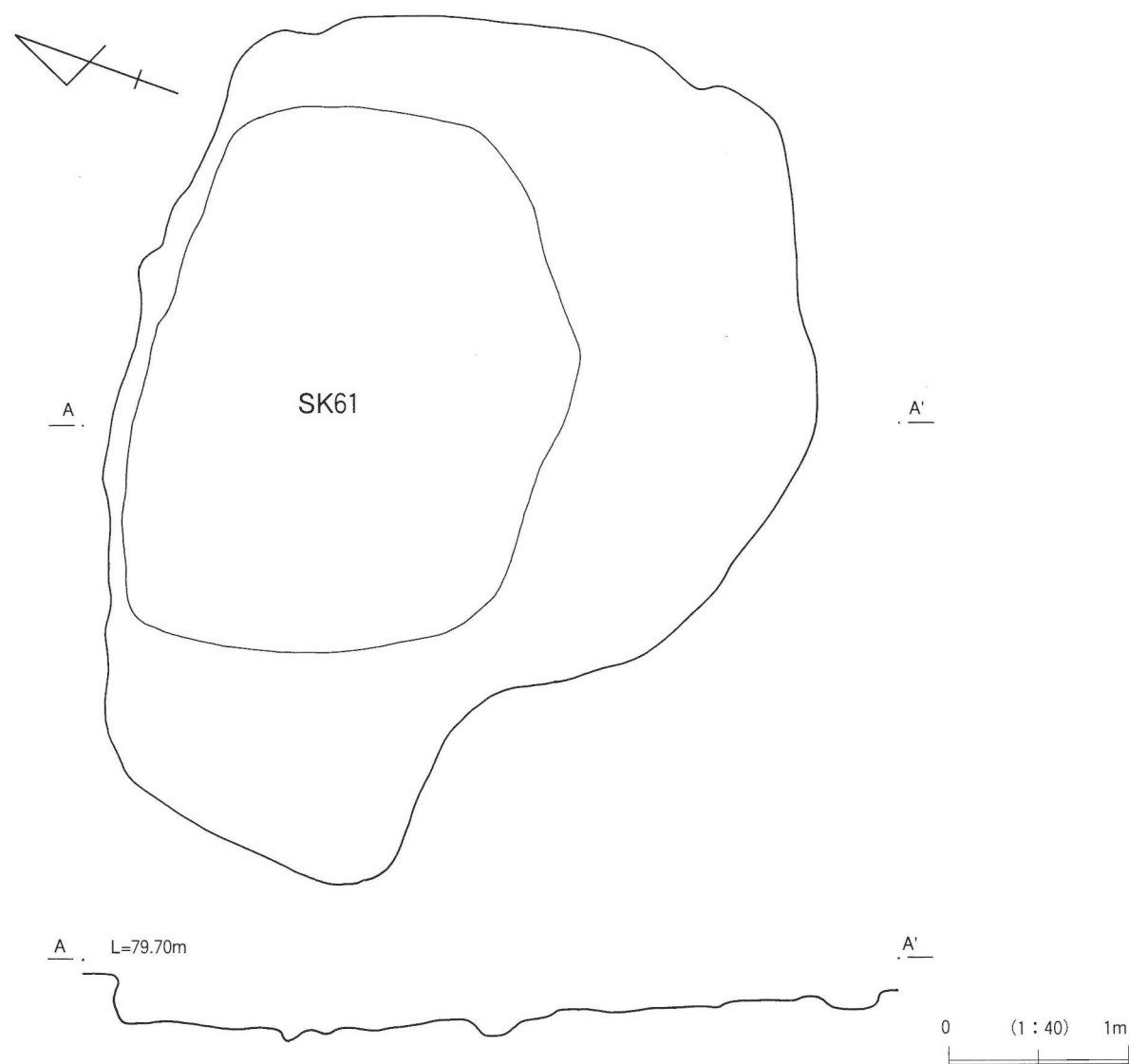
19区SK2 1.60m×1.20mの楕円形プラン。深さ0.18m。6世紀初頭と考えられる。



第668図 19区SK2

第669図 19区SK2出土遺物

18区SK61 5.10m×3.65mの不整形プラン。深さ0.30m。6世紀後半に位置づけられる。

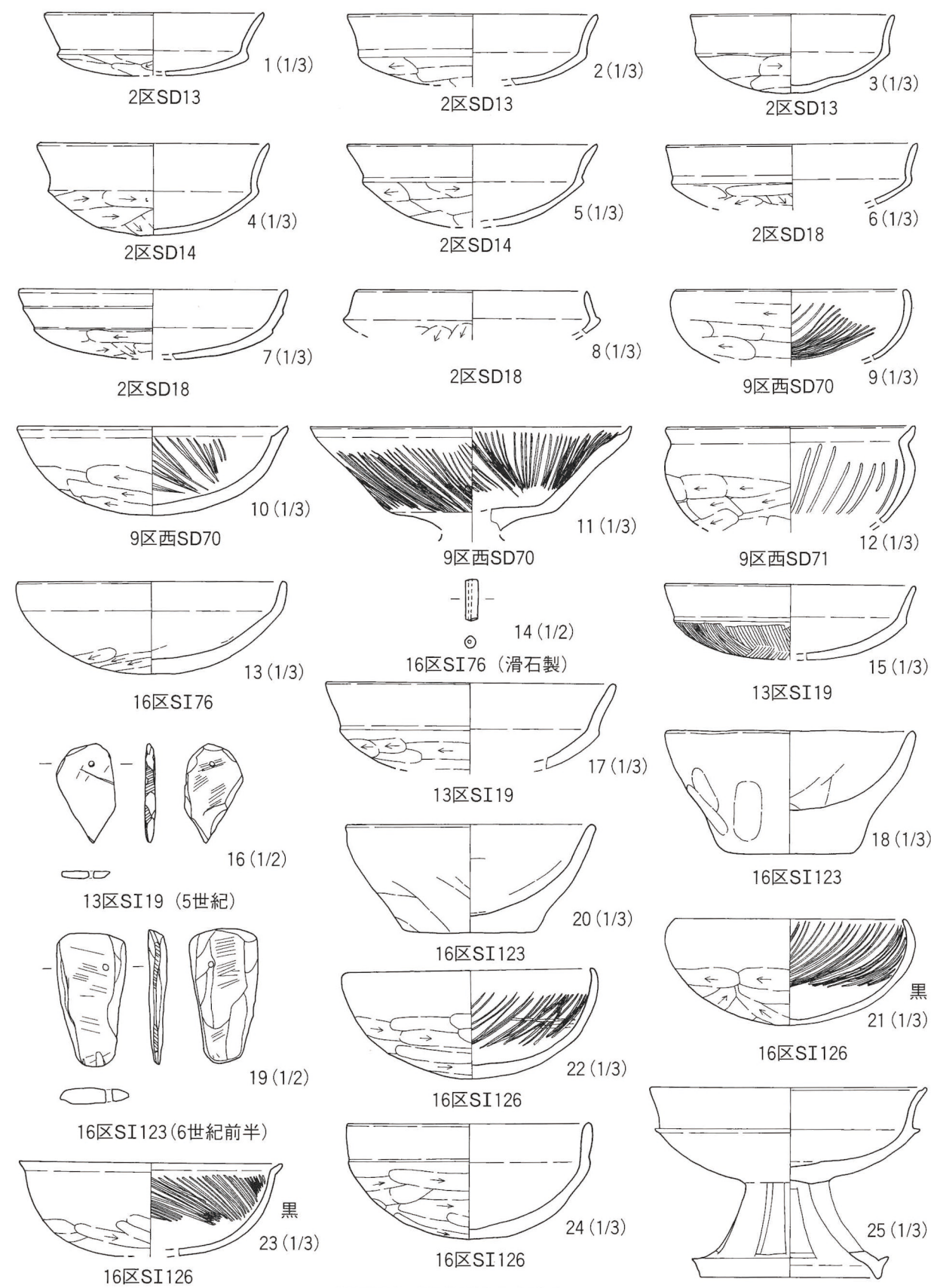


第670図 18区SK61

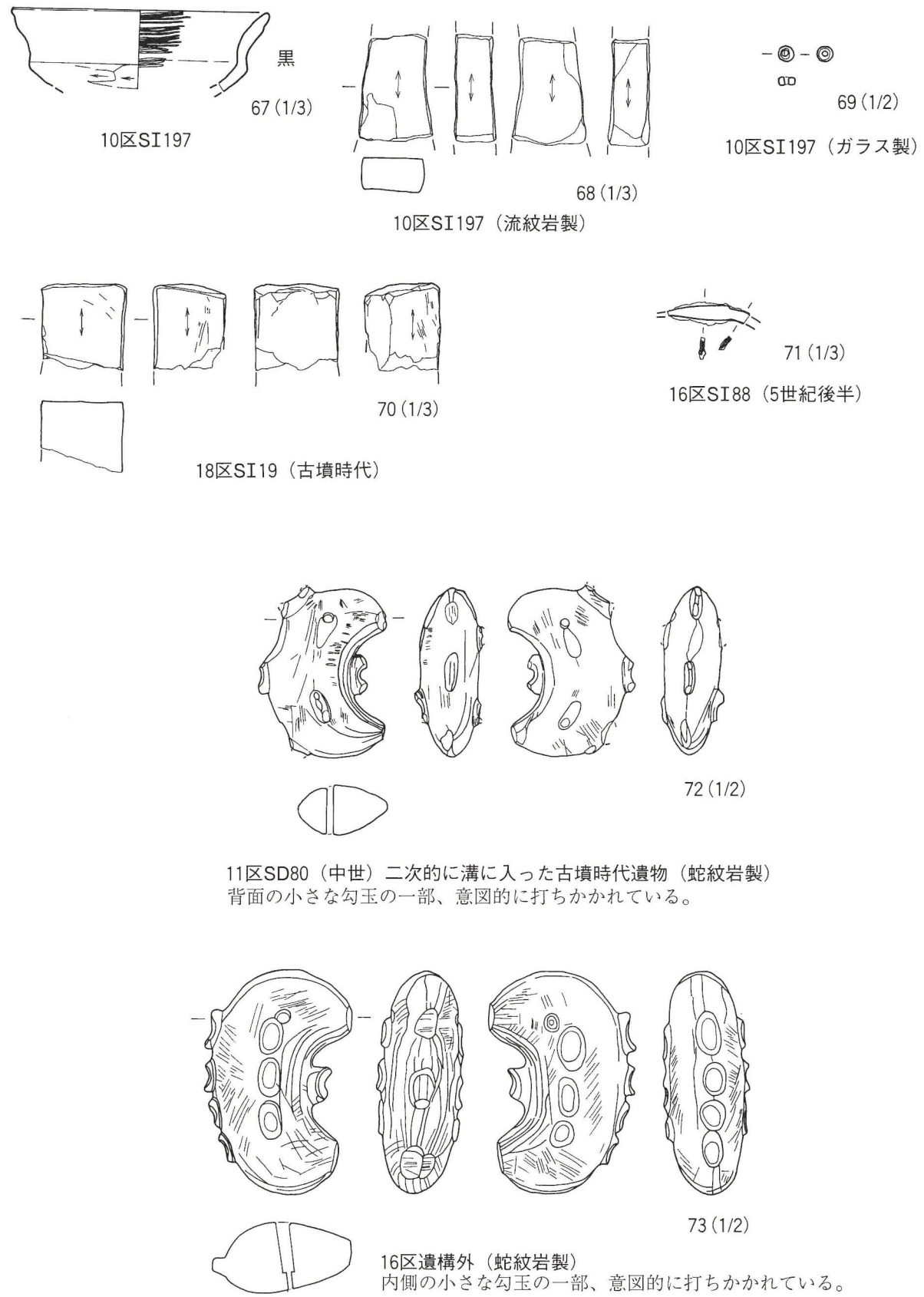


第671図 18区SK61出土遺物

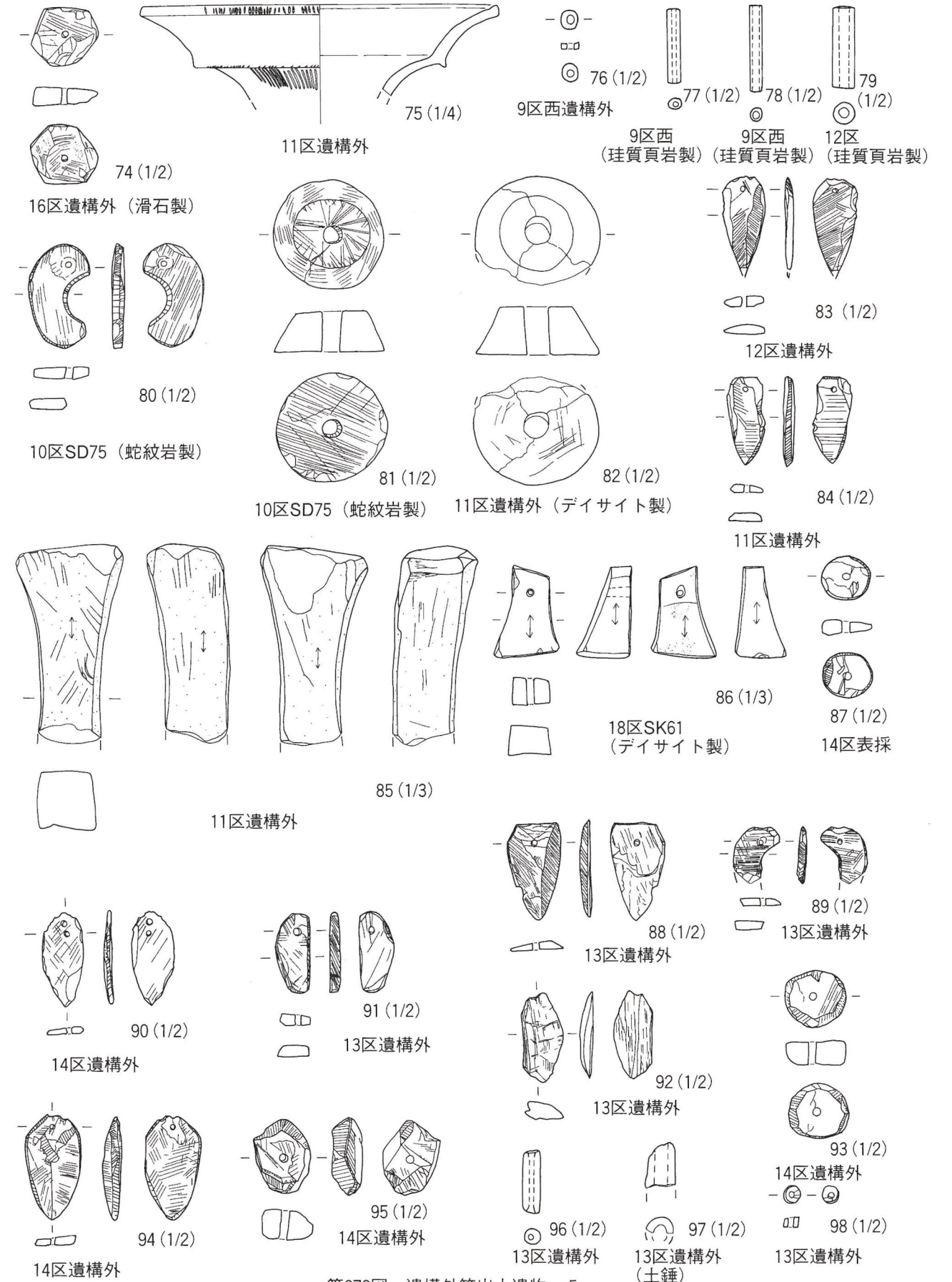
第6節 遺構外・その他の遺構出土遺物



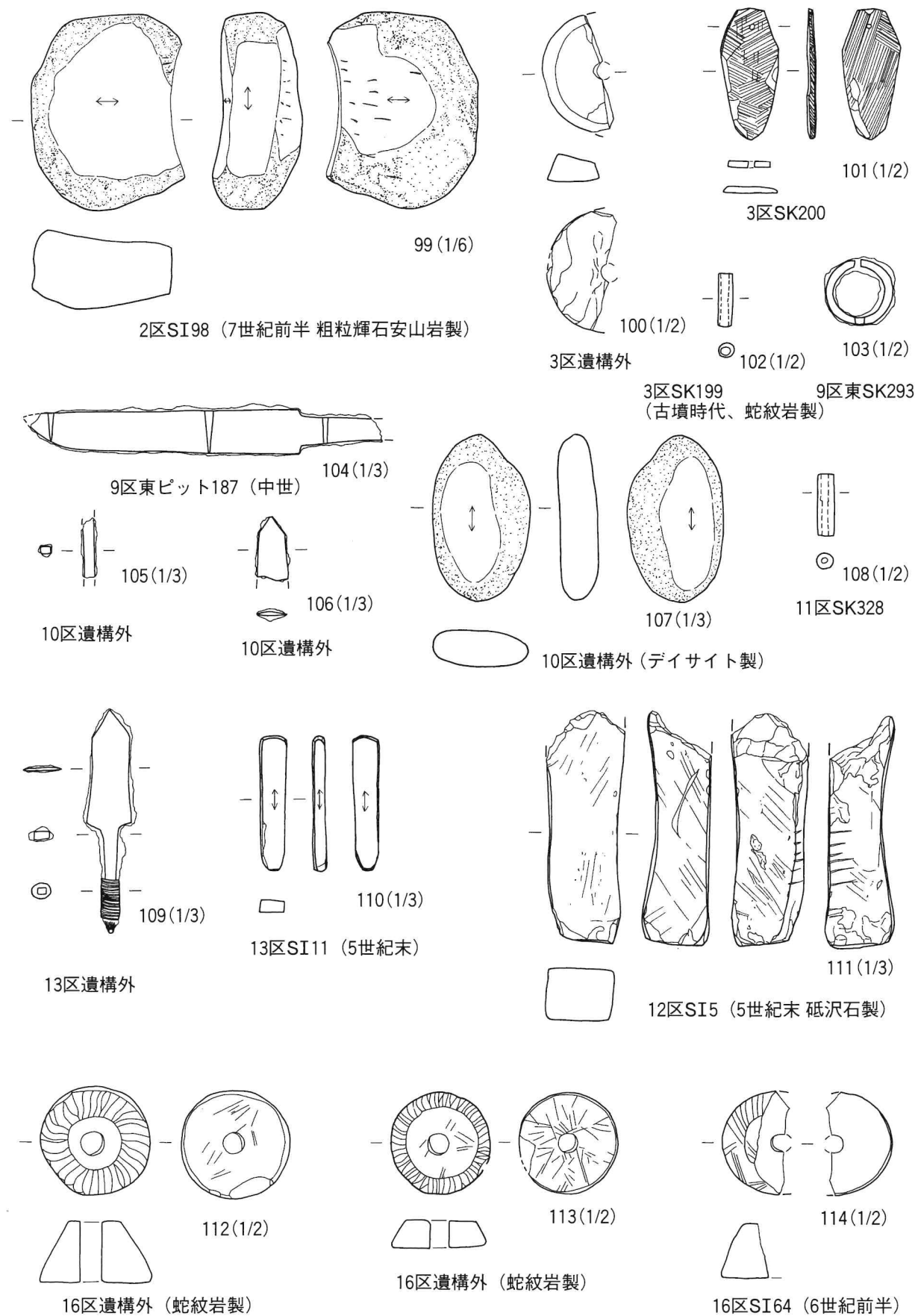
第672図 遺構外等出土遺物—1



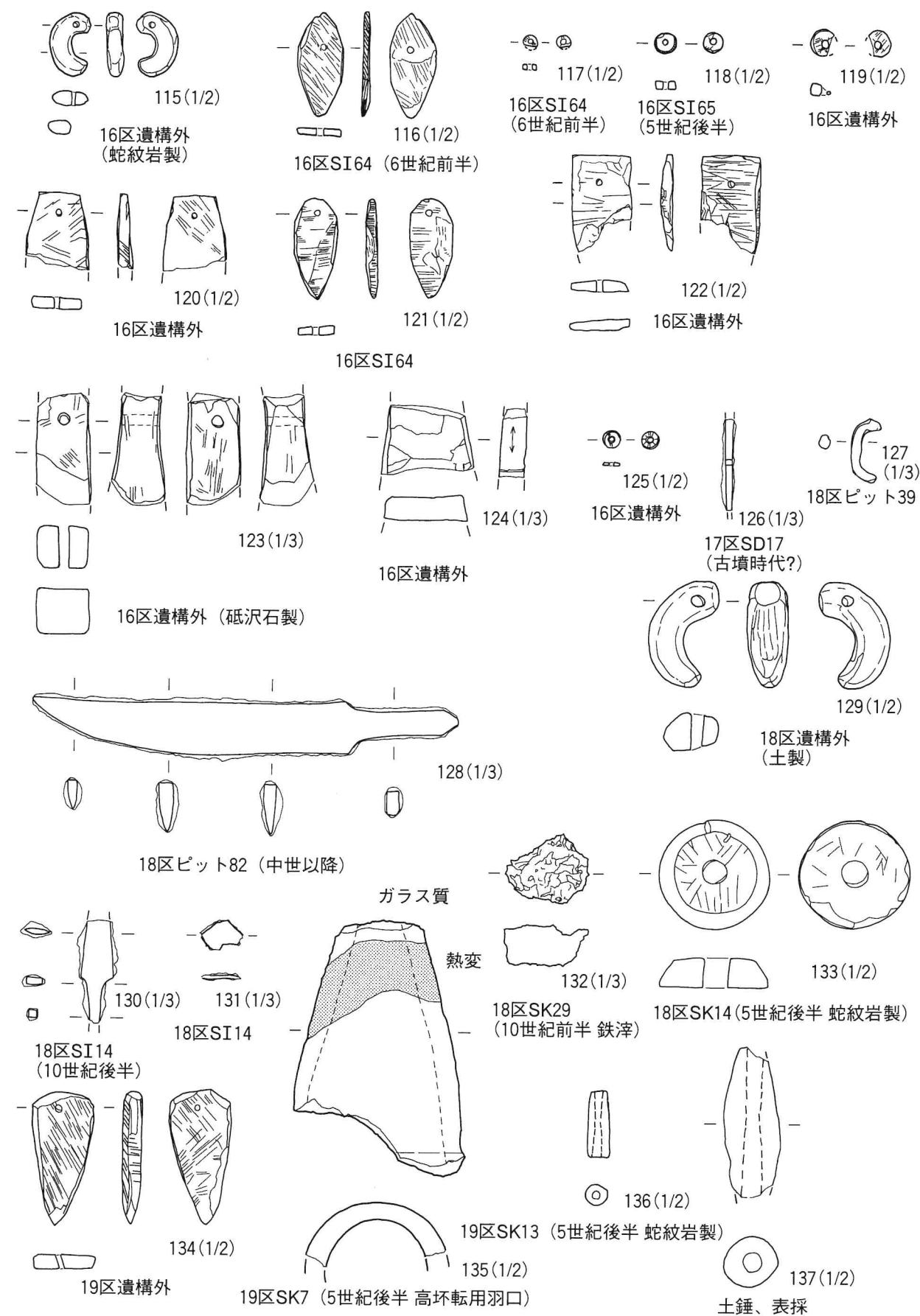
第675図 遺構外等出土遺物－4



第676図 遺構外等出土遺物－5



第677図 遺構外等出土遺物— 6



第678図 遺構外等出土遺物— 7

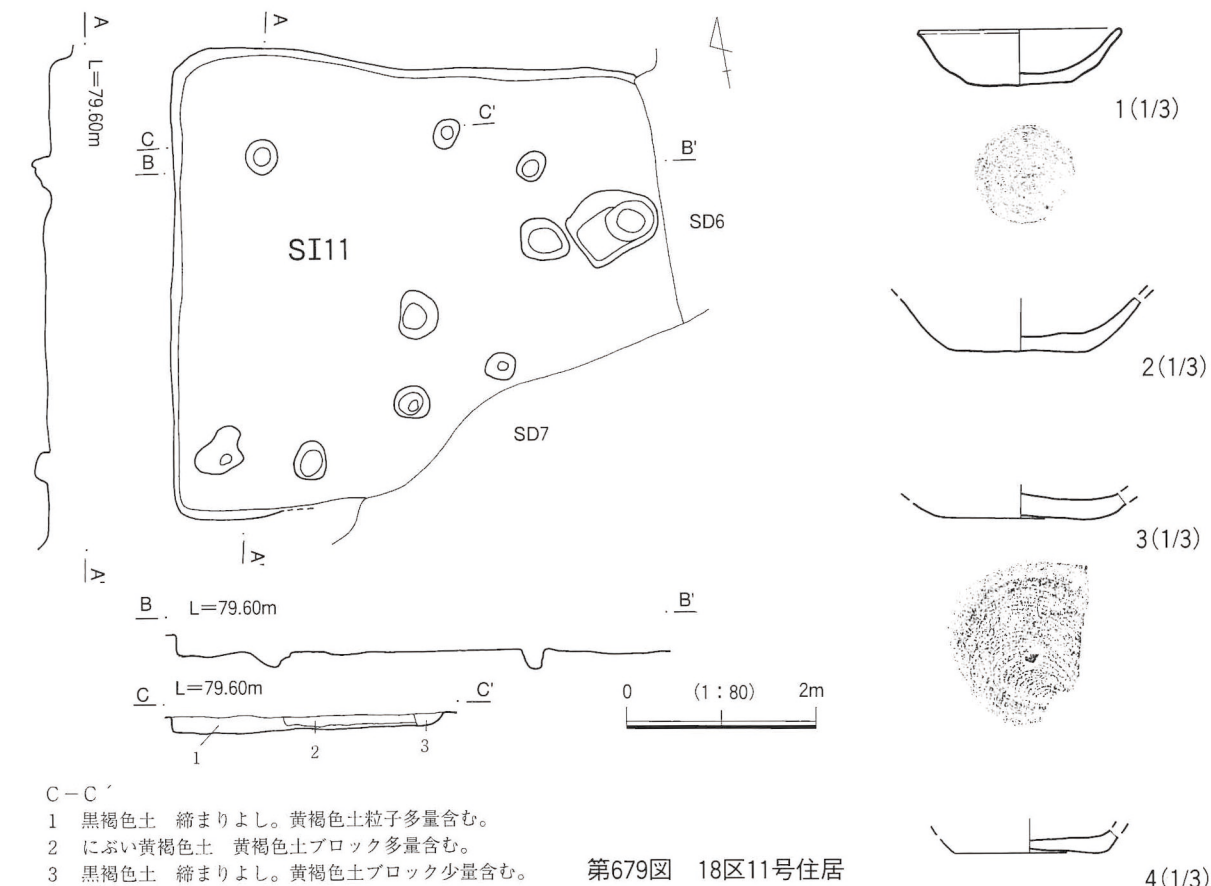
第Ⅴ章 奈良・平安時代の遺構と遺物

第1節 竪穴住居

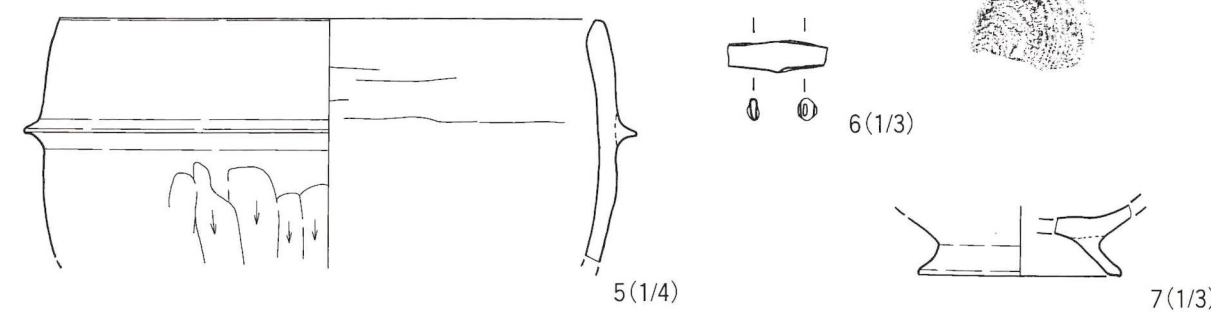
調査区東隅である18区は、土師質土器の皿と、土釜や鐏の形骸化した羽釜を伴う竪穴住居が集中する傾向にある。

18区11号住居

位置 18区 規模形状 長辺4.80m、短辺4.70m+ α 、方形プランと考えられる。残存壁高0.16mを測る。 主軸方位 北-4°-東 重複 18区7号住居を掘り込み、18区6号・7号溝に壊される。 床面 やや起伏がある カマド 不明 柱穴 10基の小ピットがある。 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師質土器皿・坏、須恵器、羽釜、鉄製刀子 所見 10世紀後半～11世紀 備考 羽釜は酸化焰焼成で口縁から胴部にかけて直線的で三角形の鐏がつく。胴部外面は縦方向のヘラケズリである。土師質土器は小型で体部の浅い皿と、やや大型な坏とがある。両者とも高台はつかない。須恵器は坏・碗とも酸化焰焼成である。碗はハの字形の大きな高台がつく。



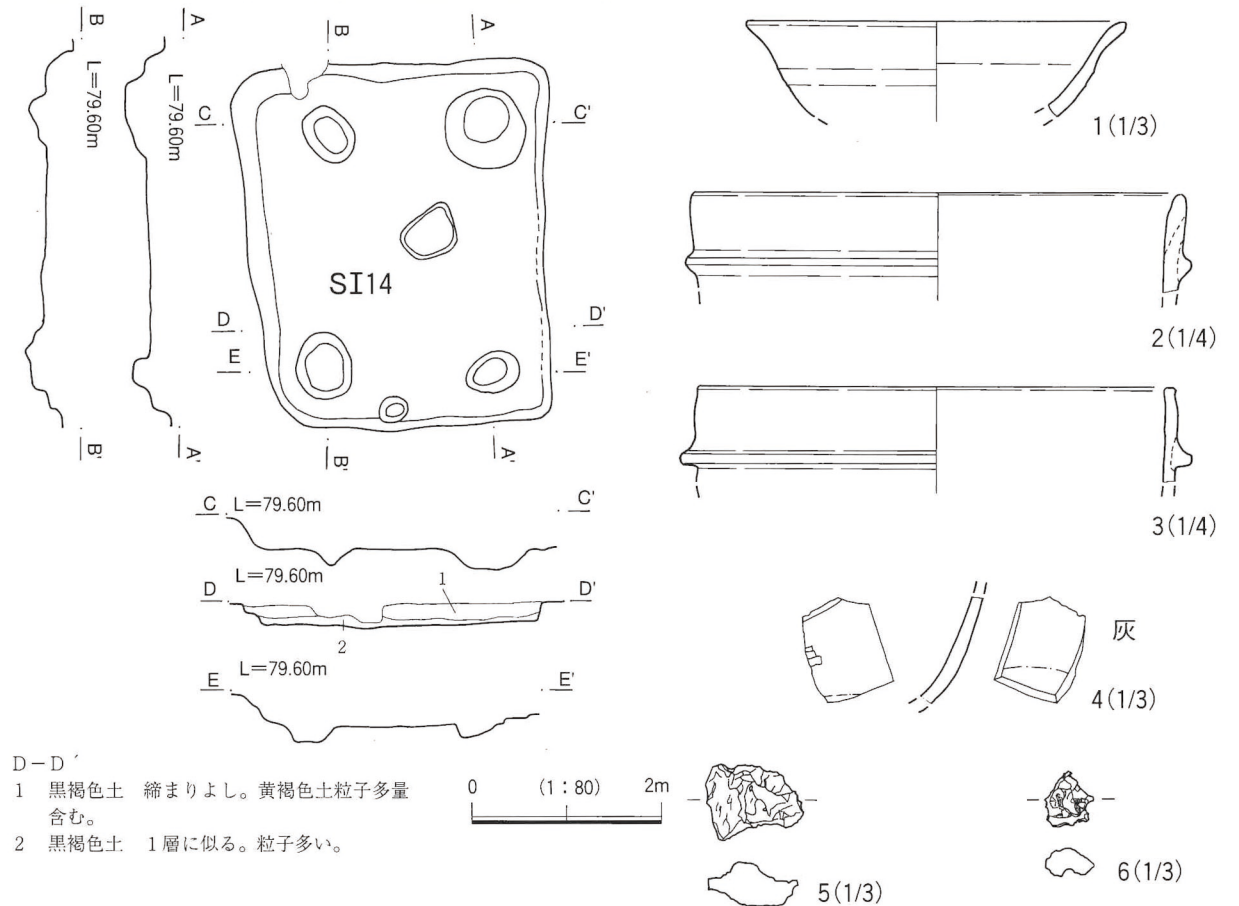
第679図 18区11号住居



第680図 18区11号住居出土遺物

18区14号住居

位置 18区 規模形状 南北3.90m東西3.40mの隅丸長方形プランである。残存壁高0.20mを測る。 主軸方位 北-4°-西 重複 18区5号溝に壊される。 床面 ほほ平坦である。 カマド 不明 柱穴 四隅に支柱穴がある。 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 須恵器碗、灰釉陶器碗、羽釜、鉄滓 所見 10世紀後半～11世紀 備考 須恵器の碗は酸化焰焼成、灰釉陶器の碗は、釉漬け掛けである。羽釜は酸化焰焼成で口縁が直立、鐏は三角形である。鉄滓が2個体出土している。

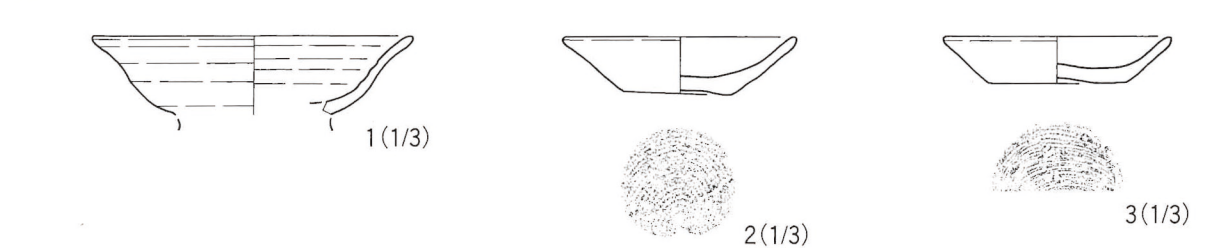


第681図 18区14号住居

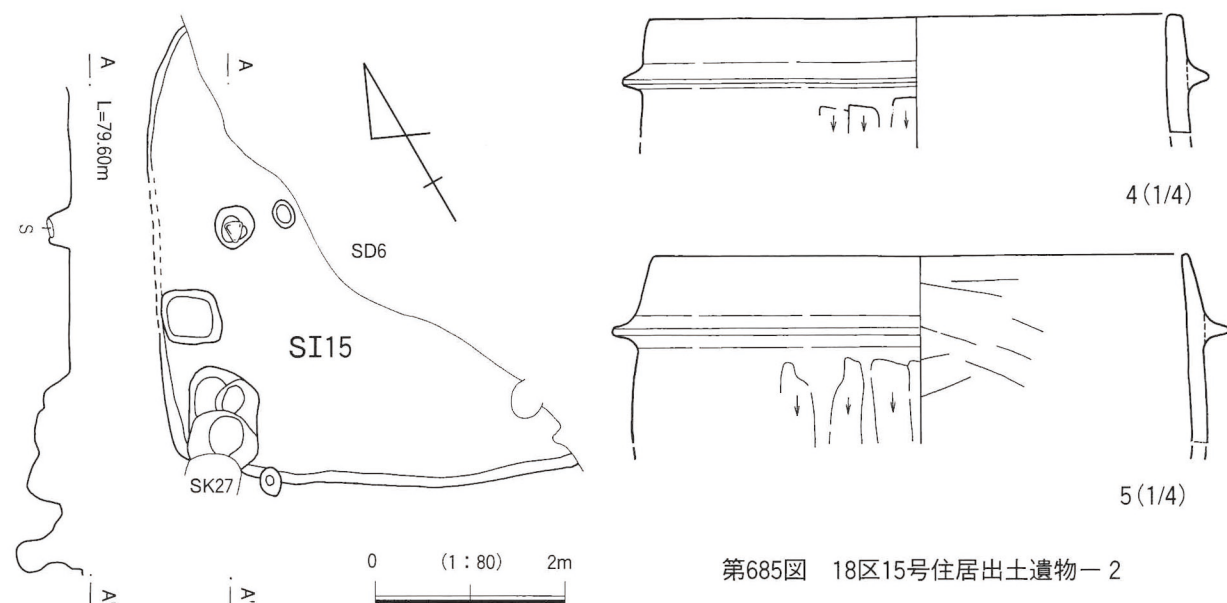
第682図 18区14号住居出土遺物

18区15号住居

位置 18区 規模形状 長辺4.40m+ α 、短辺4.00m+ α 、方形プランと推定される。残存壁高0.08mを測る。 主軸方位 北-25°-東 重複 18区6号溝に壊される。 床面 ほほ平坦である。 カマド 不明 柱穴 柱穴3基が南北に並ぶ。北の柱穴底には、礎板石がある。 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 羽釜、土師質土器皿、須恵器碗 所見 10世紀後半～11世紀 備考 羽釜は酸化焰焼成で、胴部から口縁まで直線的、鐏は三角形である。須恵器は高台付き碗がある。酸化焰焼成である。土師質土器皿は、口径9cm程度と小さく浅い。



第683図 18区15号住居出土遺物-1

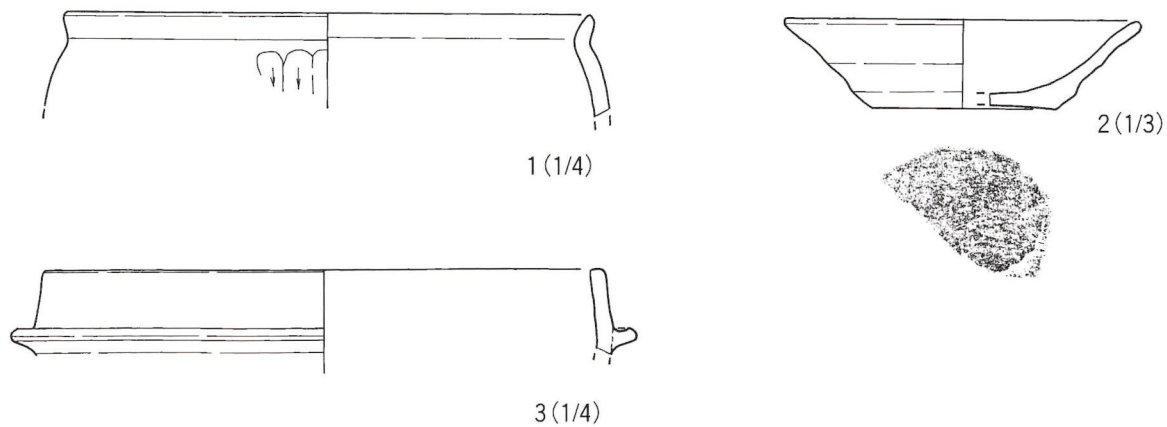


第685図 18区15号住居出土遺物ー2

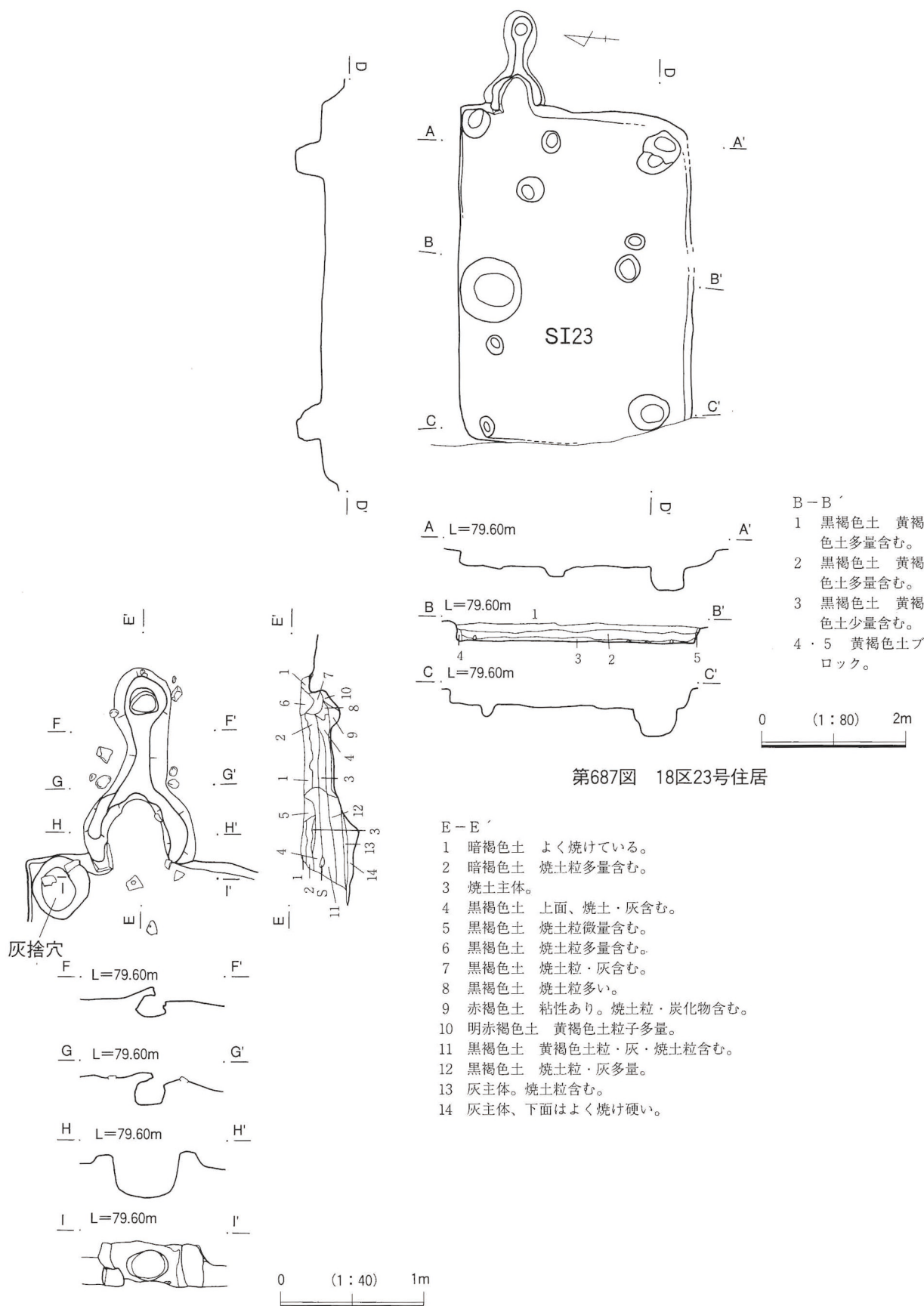
第684図 18区15号住居

18区23号住居

位置 18区 **規模形状** 東西4.70m、南北3.20mの長方形プランを呈する。残存壁高0.28mを測る。 **主軸方位** 東-10° -北 **重複** 18区9号住居を掘り込む。8号溝に壊される。 **床面** 平坦面を形成している。 **カマド** 東壁の北側に位置する。奥行0.52m、焚き口幅0.39m、煙道部0.74mを測る。左袖先端は凝灰岩を袖石とし、カマド本体は粘土で構築される。燃烧部は住居壁の外側に地山を削り出してつくられる。燃烧部中央の小さな窪みは支脚痕と考えられる。煙道は直径13cm天井部も残る。水平に延び奥で急に立ち上がる。 **柱穴** やや不規則に柱穴がある。 **貯蔵穴** 不明 **その他付属施設** カマド北に径40cmほどのピットがある。カマドからかき出された灰が入っている。灰を入れる目的で掘ったピットとも考えられる。 **遺物** 土師質土器坏、羽釜、土釜、鉄鏝（古墳時代の遺物と考えられる。） **所見** 10世紀後半～11世紀 **備考** 土師質土器坏は口径14.0cmとやや大形で、底部が広く体部が直線的である。羽釜は、口縁が直線的で鏝はかなり張っている。土釜は口径28.0cmと大きく、口縁が小さく外傾する。



第686図 18区23号住居出土遺物

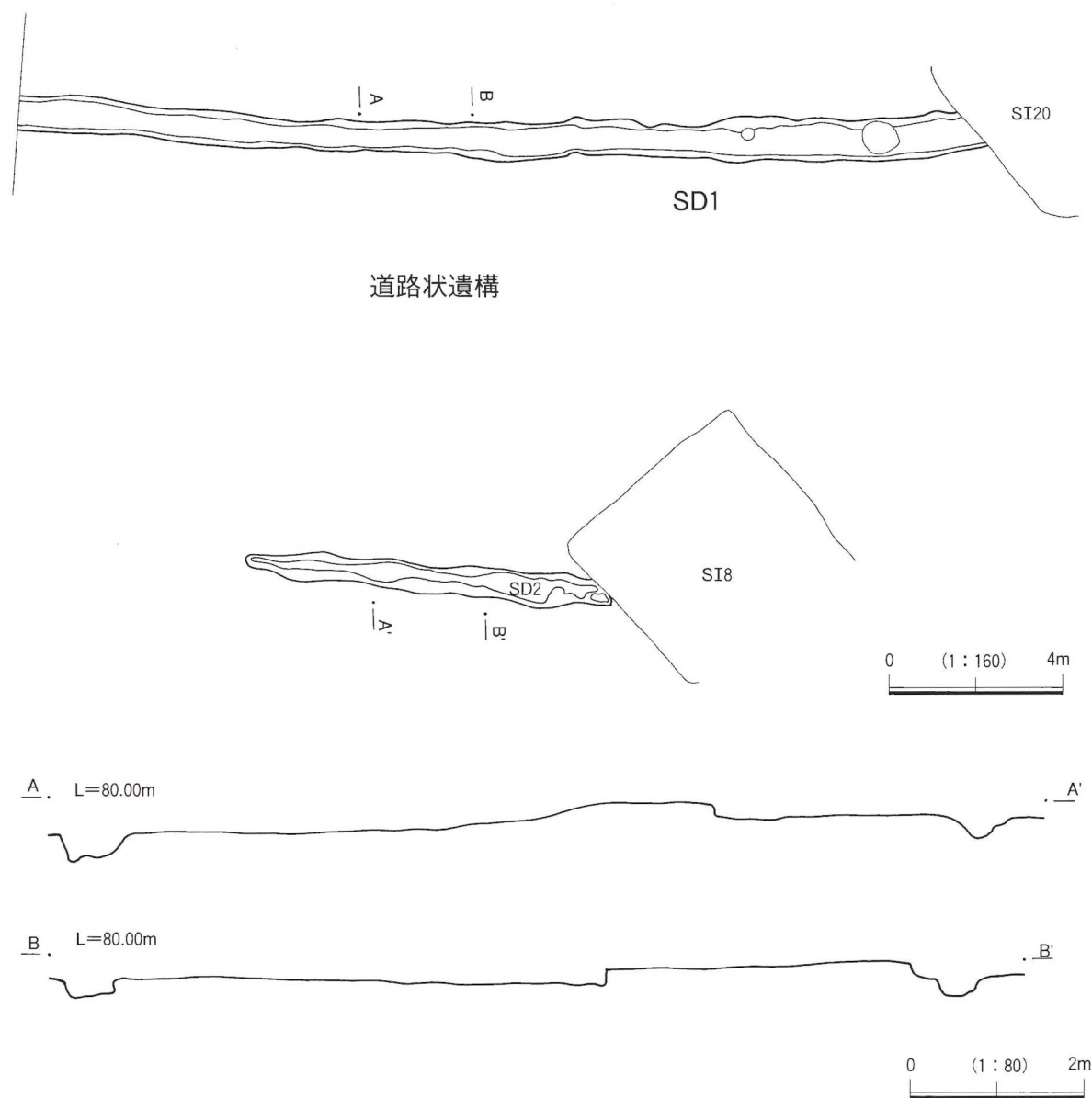


第687図 18区23号住居

第688図 18区23号住居カマド

第2節 道路状遺構

調査北東部、12区で道路状遺構が検出された。2本の溝（12区SD1,SD2）が東西方向に平行してある。12区SD1が北側、SD2が南側である。方位はともに北100° 東、心々距離は9.9～10.2m程度、内側で約9mである。SD1の断面形状は緩やかなV字形ないし逆台形、上幅0.7～0.8m、深さ0.3～0.4m。底面はやや凹凸がある。SD2の断面形状は逆台形、上幅0.65～0.75m、深さ0.25～0.3mである。両溝中の土層を見ると自然埋没と判断される。この2条の溝及び溝にはさまれた部分の状態は、高崎情報団地遺跡の道路遺構と規模がほぼ同じであり形状も似ている。発見された遺構の位置も高崎情報団地の道路遺構を東に直線的に伸ばした位置である。SD1からは、破片ではあるが、須恵器蓋（2）と坏（1）が出土している。あまりにも小さすぎるため時代は特定しにくい、8世紀ないし9世紀の範疇である。高崎情報団地遺跡の機能時期は7世紀後半から8世紀後半と推定されている。この土器は若干新しいとも思えるが、溝の埋没にやや時間差があったとも考えられる。SD1とSD2は道路遺構の側溝であり、溝にはさまれた部分は道路面とし、高崎情報団地遺跡で「東山道駅路」と推定された道路状遺構の延長部と考えられる。なお、A-A'、B-B'のエレベーションからは、路面がかなり削平されていると考えられる。



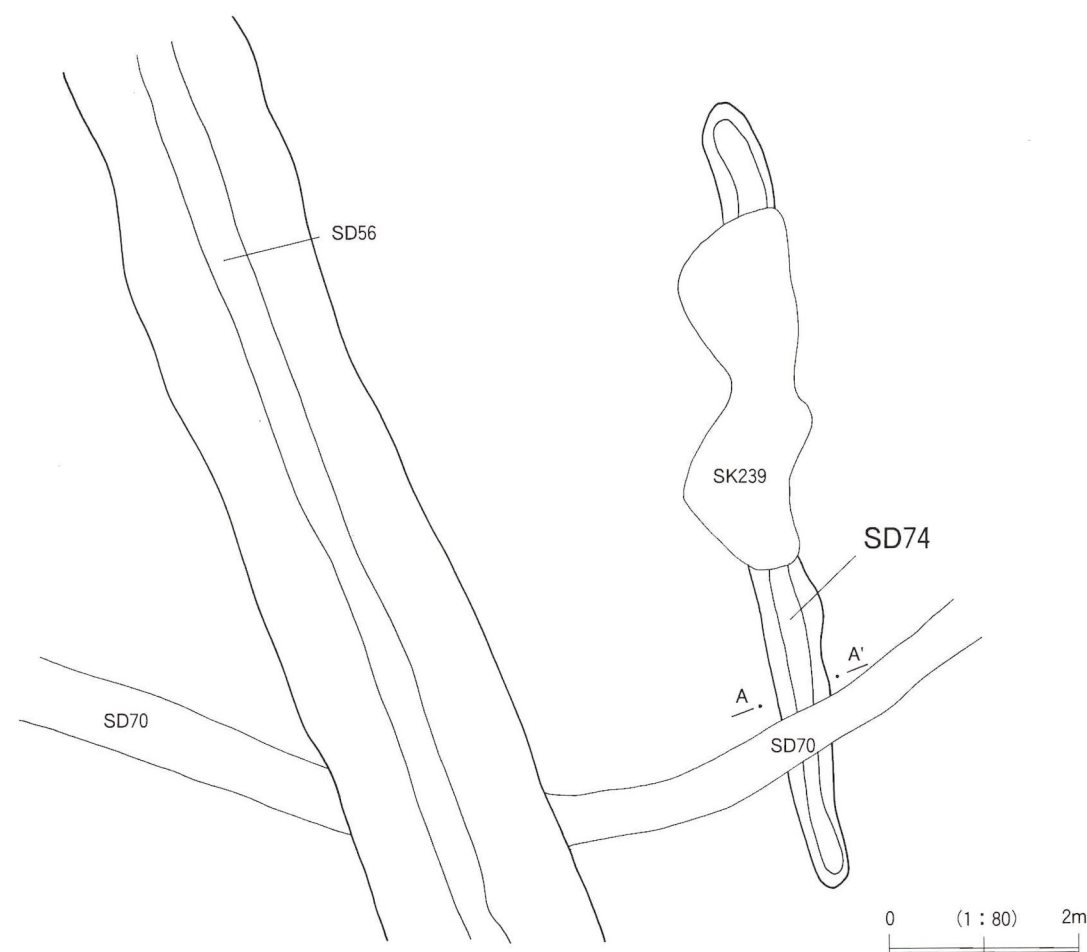
第689図 12区道路状遺構



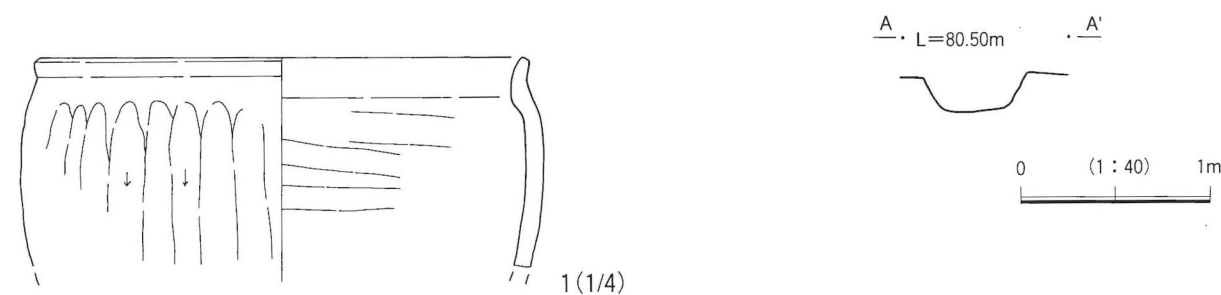
第690図 12区SD1出土遺物

第3節 溝

9区西SD74 SD74付近の溝群である。SD56は中世、SD74は平安時代末（10世紀後半～11世紀）である。SD74からは、土釜の破片が出土している。

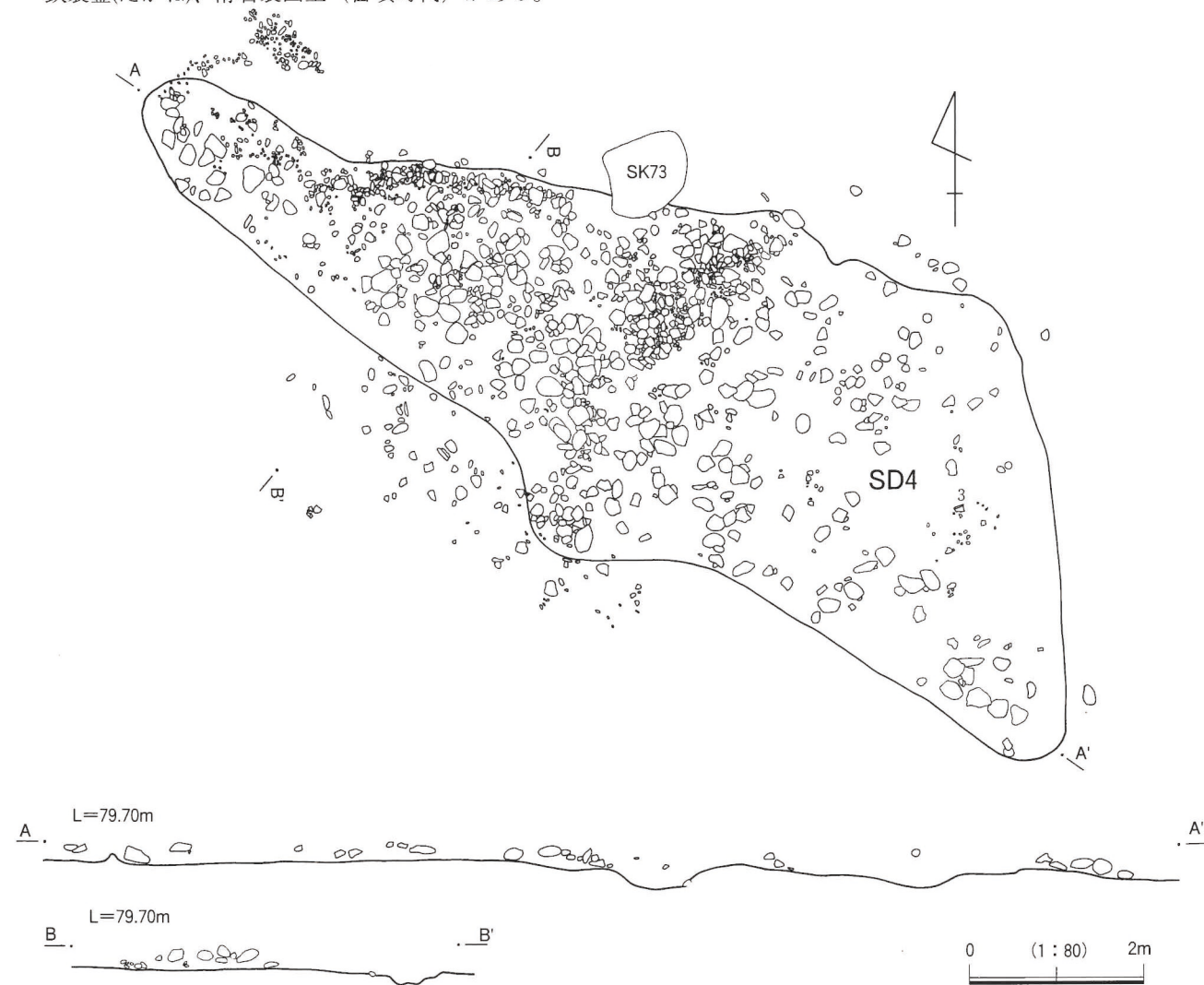


第691図 9区西SD74

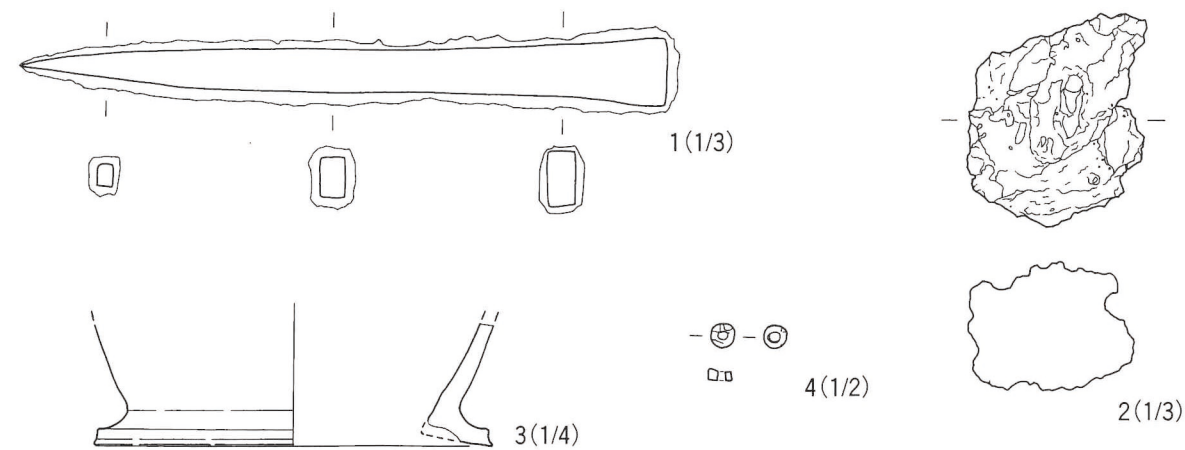


第692図 9区西SD74出土遺物

17区SD4 円礫が集中した土坑のような溝である。礫は自然石であるが、意図的にまとめられた可能性もある。井野川にはない、結晶片岩の礫も含まれていた。出土遺物としては、須恵器甕（10世紀後半～11世紀）、鉄滓、鉄製鏝（たがね）、滑石製白玉（古墳時代）がある。



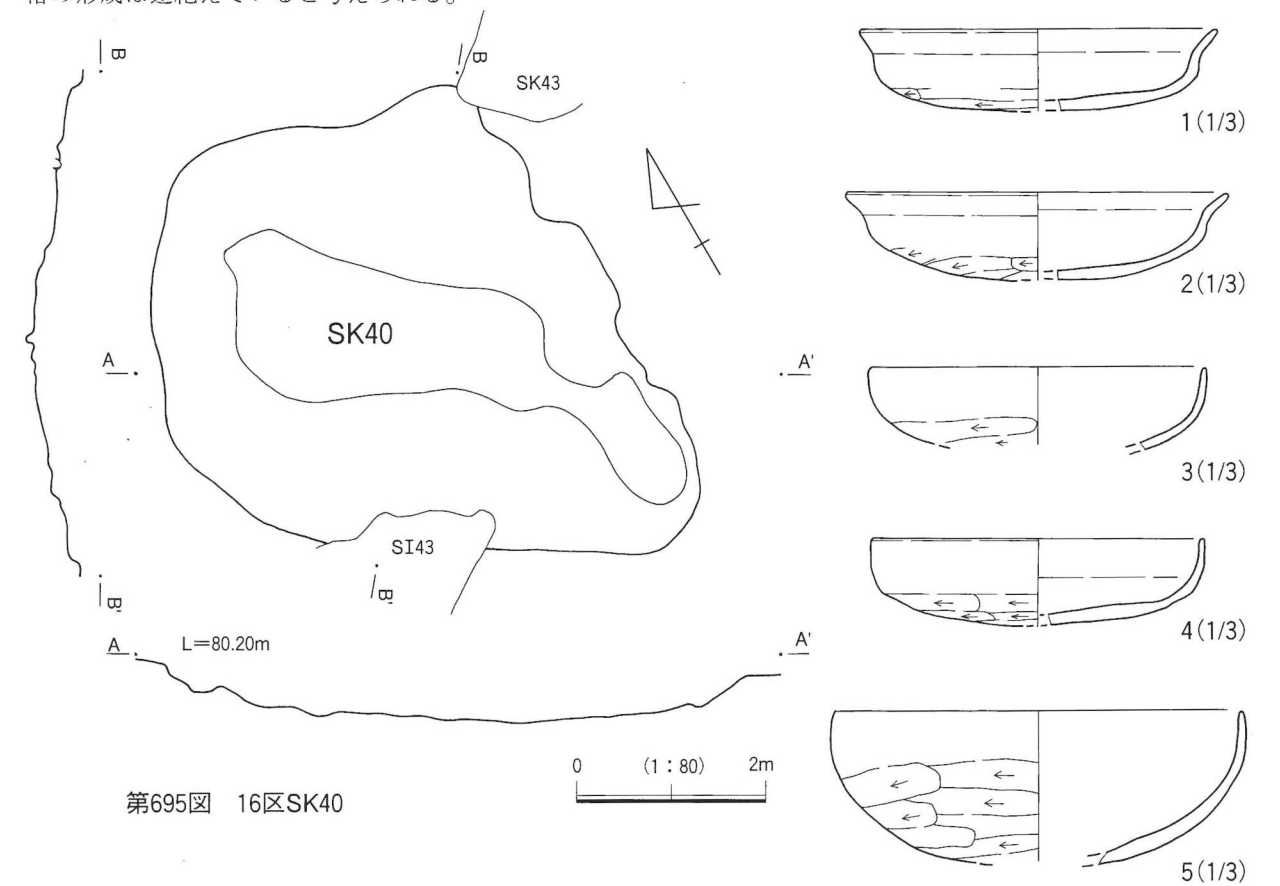
第693図 17区SD4



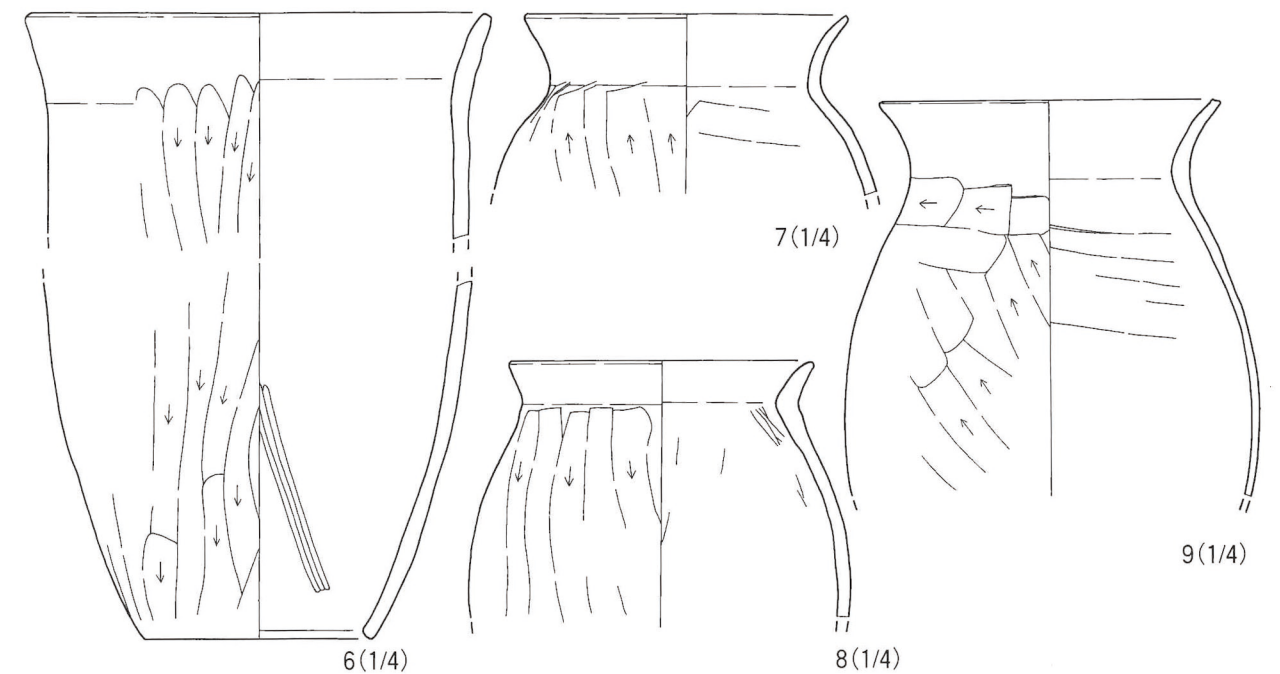
第694図 17区SD4出土遺物

第4節 土 坑

16区SK40 16区で検出した。6.40m×4.80mの不整楕円形プランを呈する。堆積は自然埋没である。大量の礫とともに、8世紀後半代の土師器坏・甕が出土した。周辺には、8世紀の遺構は東山道駅路などがあるだけで、集落の形成は途絶えていると考えられる。



第695図 16区SK40



第696図 16区SK40出土遺物

第5節 水 田

水田は、調査1・4・6区および7区で検出された。1・4～6区の範囲は、井野川と一貫堀川間のやや低い带状地帯である。また、7区は井野川の堤防に隣接する旧河川敷である。

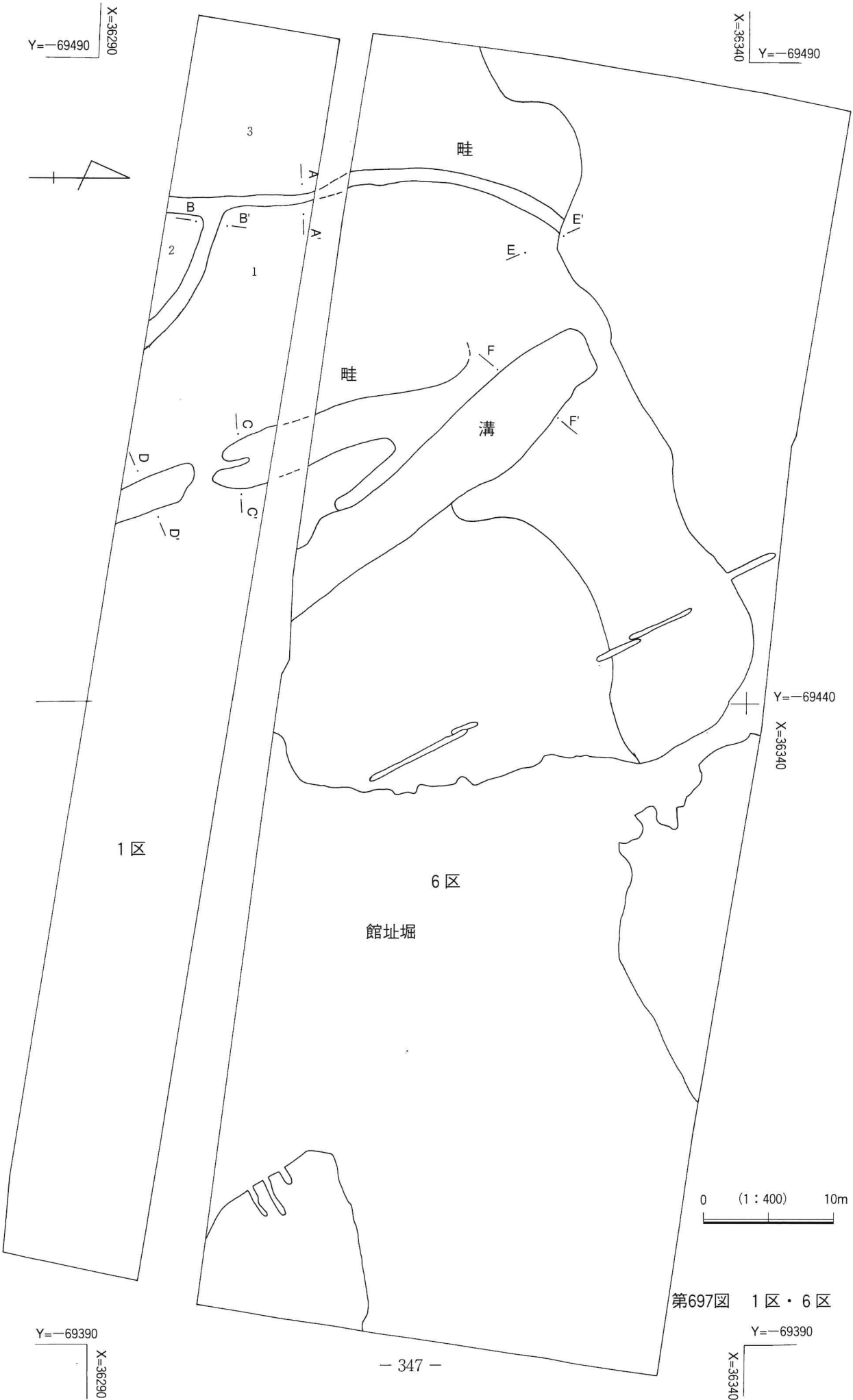
古代末（浅間B軽石下）水田

水田の調査は部分的であった。全体勾配は南に向かって南北方向の下り勾配になる。最も高い6区で79.70～80.30m、4区南端で80.80m、5区南端で79.50m、7区で75.30～75.40mである。現表土から水田面まで0.45～0.55m、厚さ5～10cm程の浅間B軽石（As-B）が存在する。軽石の下面には、鉄分・有機質に富む黒褐色の耕土が見られる。

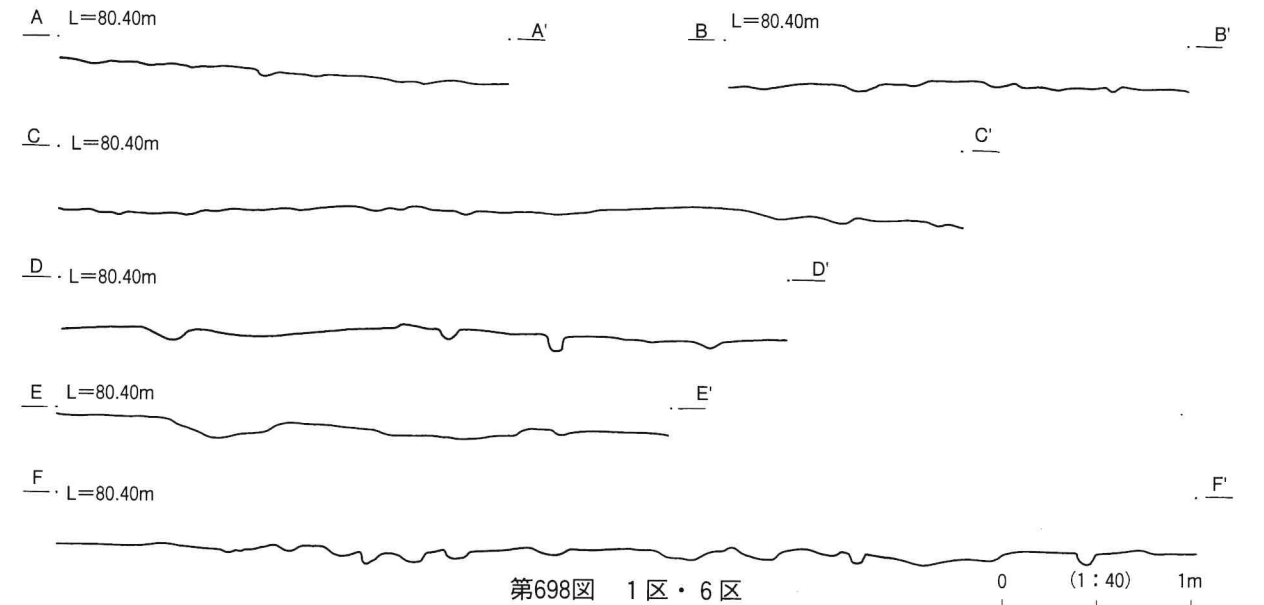
畦畔の断面形状は緩やかな台形、ないし逆U字形で扁平なものが多い。大畦や直線的に長く貫くものはなく、L字形・T字形の交点をもって寸断されている。7区は、井野川河川敷部分である。北西から南東にかけて長方形を呈する水田が検出された。検出された範囲はかなりせまく、川の流れて削平された部分が多いと考えられる。

6区・1区の水田の下層から2号墳・3号墳が検出された。2号・3号古墳の墳丘及び周堀が埋没し、かなりの時間が経過した後に水田造成が行われたと考えられる。

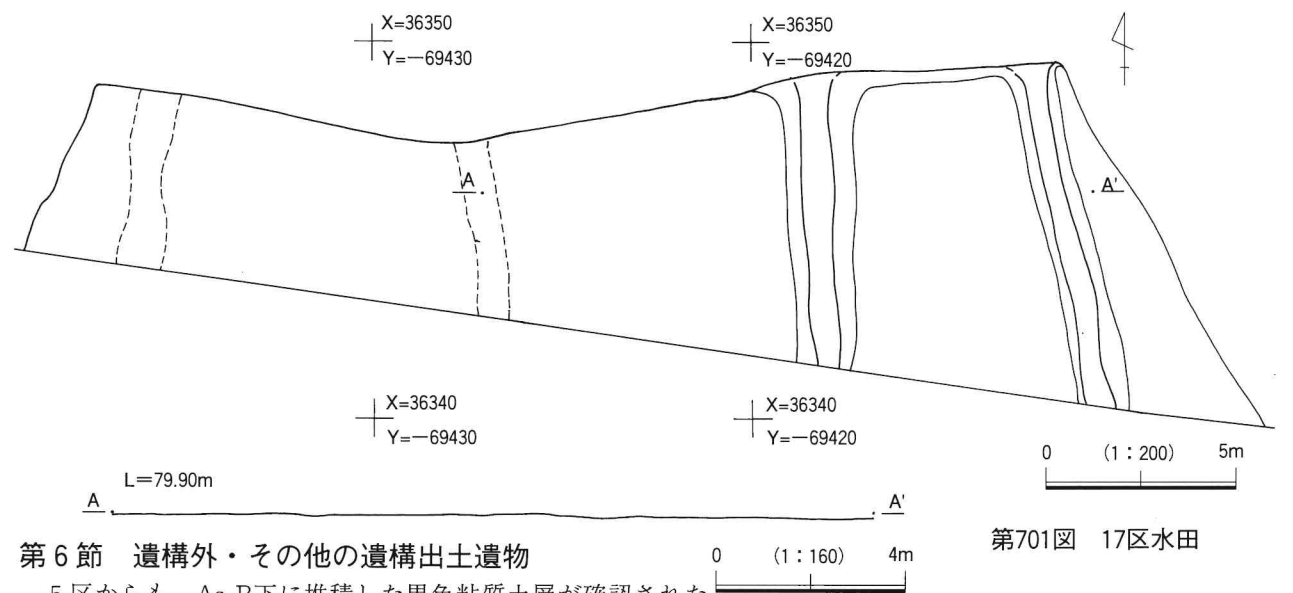
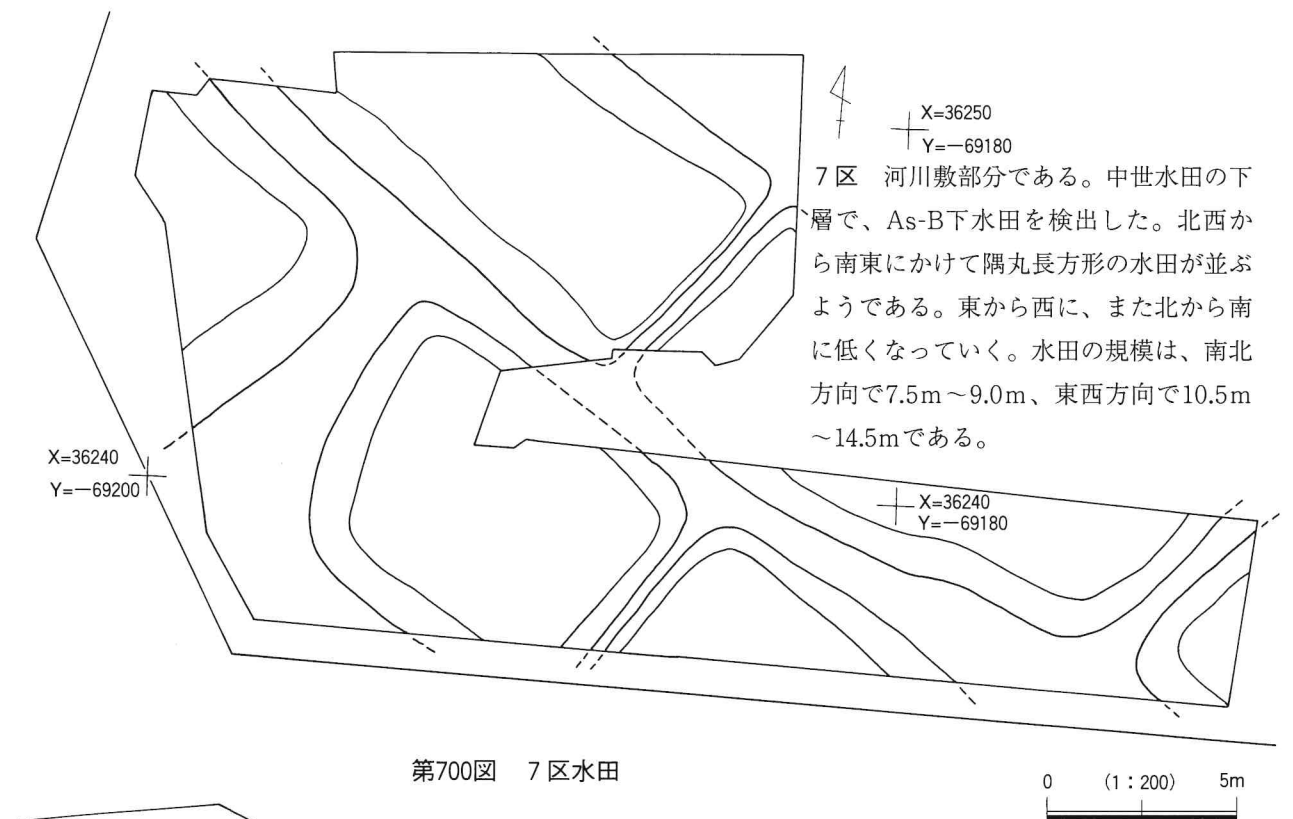
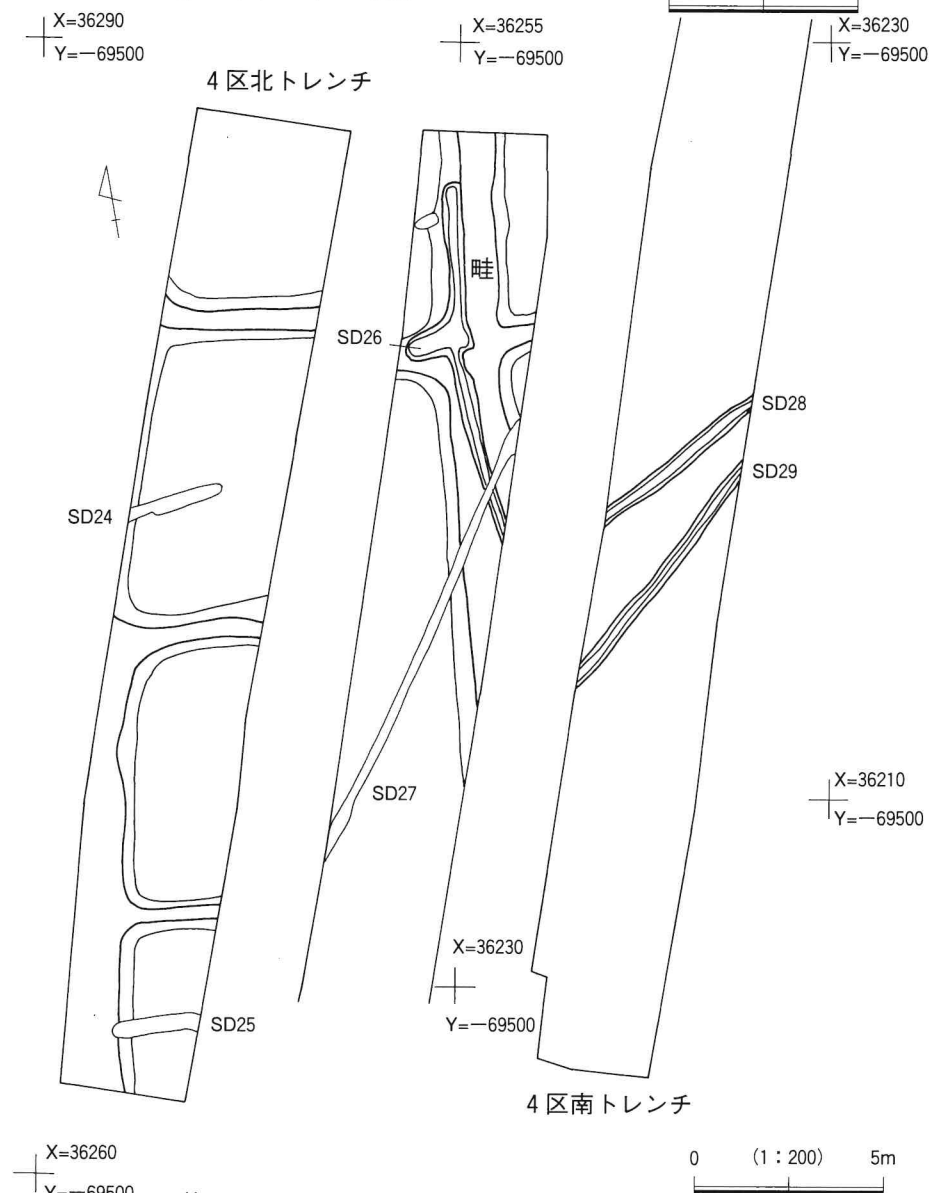
次の頁は6区・1区の水田の全体図である。水田の区画は、中央部と西部分に残っている。調査区の東は、中世の館址の堀によって壊されている。北西にやや広い1番水田がある。水田東の畦畔は、北 -18° －西の傾きをもって直線的に伸びている。畦幅は2.5～4.0m、高さ5cm程度と規模が大きい。1区部分に水口がある。標高は西が高いため、東への水の流れが考えられる。2番・3番水田は、これにほぼ直交ないし平行してつくられ長方形を基本とした区画である。



第697図 1区・6区



4区 4区は、調査区の中で南西隅となる。南北に細長いトレンチ2本で、As-B下の水田と溝跡を検出した。4区北トレンチは長さ25.5m、幅4mである。ほぼ北を向いて直線的な畦と、この畦を基準とした東西走行の畦を検出した。標高は西の水田が高く、また南から北にかけて低くなる。4区南トレンチは長さ約50m、幅3.8mから4mである。南トレンチの北端に畦の交点がある。南北畦は幅2.0m、東西畦は幅1.0mの規模である。また畦の交点南の水田は、南西から北東への傾斜がある。南部は、水田より新しい溝が走っている。

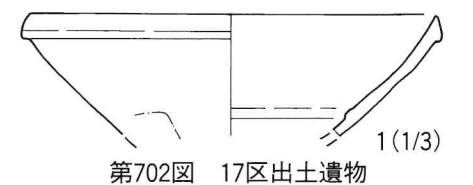


第6節 遺構外・その他の遺構出土遺物

5区からも、As-B下に堆積した黒色粘質土層が確認されたが、畦畔や溝などの遺構が不明瞭であり、水田であるとは断定できない。

また、17区1号住居（古墳時代）の柱穴そばの、ピットから中国製白磁が出土した。邢窯・定窯系でⅣ-1b類⁽¹⁾、11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

註(1)「大宰府条跡XV」 2000 大宰府市教育委員会



第Ⅵ章 中世前半の遺構と遺物

第1節 館址、堀と溝

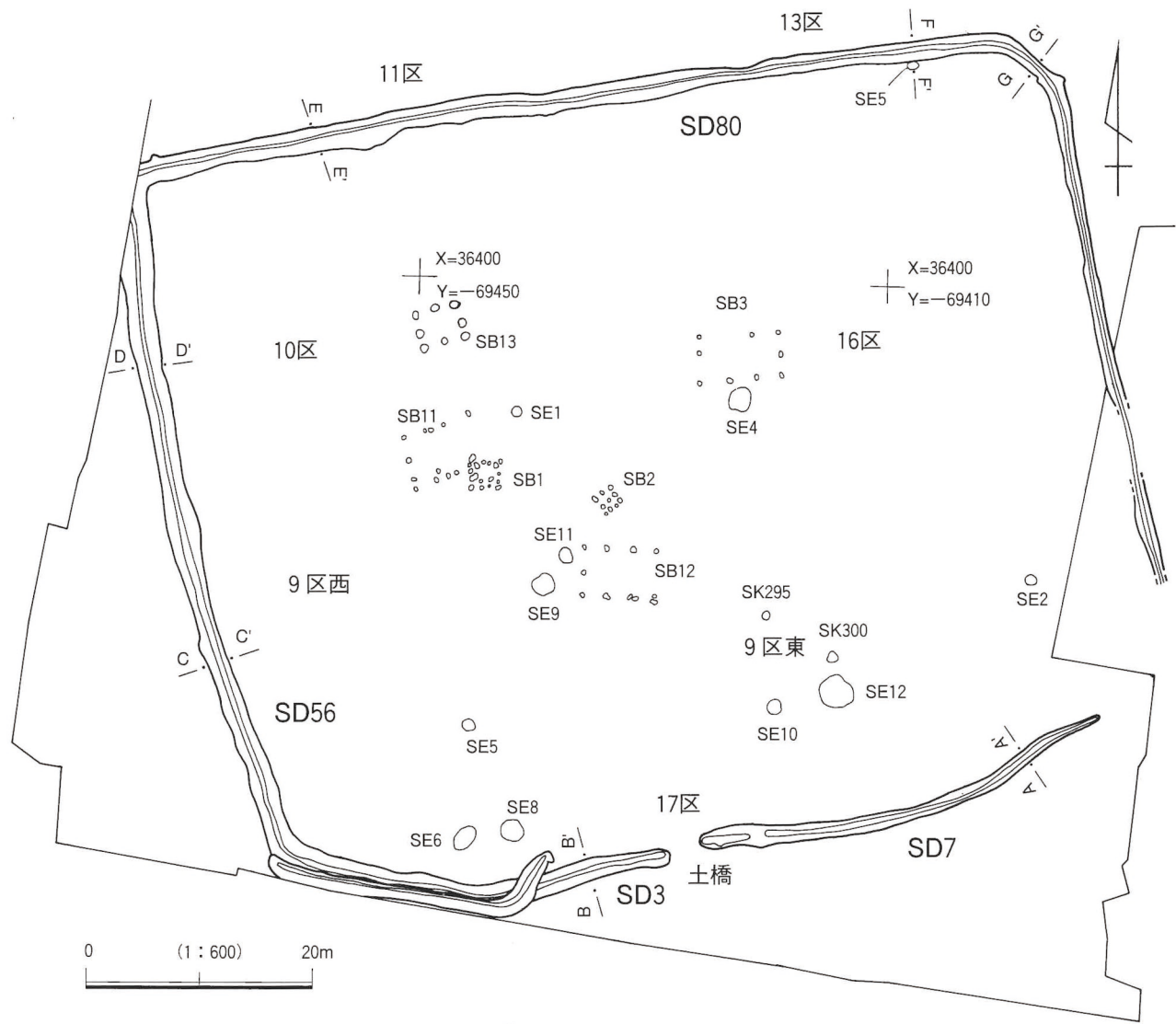
SD80（9区西・10区SD56、11区・13区・16区SD80、17区SD3・7）

SD80は、9・10・11・16区の微高地を方形に囲む溝である。上幅1.2～2.5m、下幅0.2～0.35m、深さ0.35～0.8mの規模で、断面は台形である。溝中には浅間B軽石が二次的に含まれる。土塁の土が流れ込んだ痕跡はない。

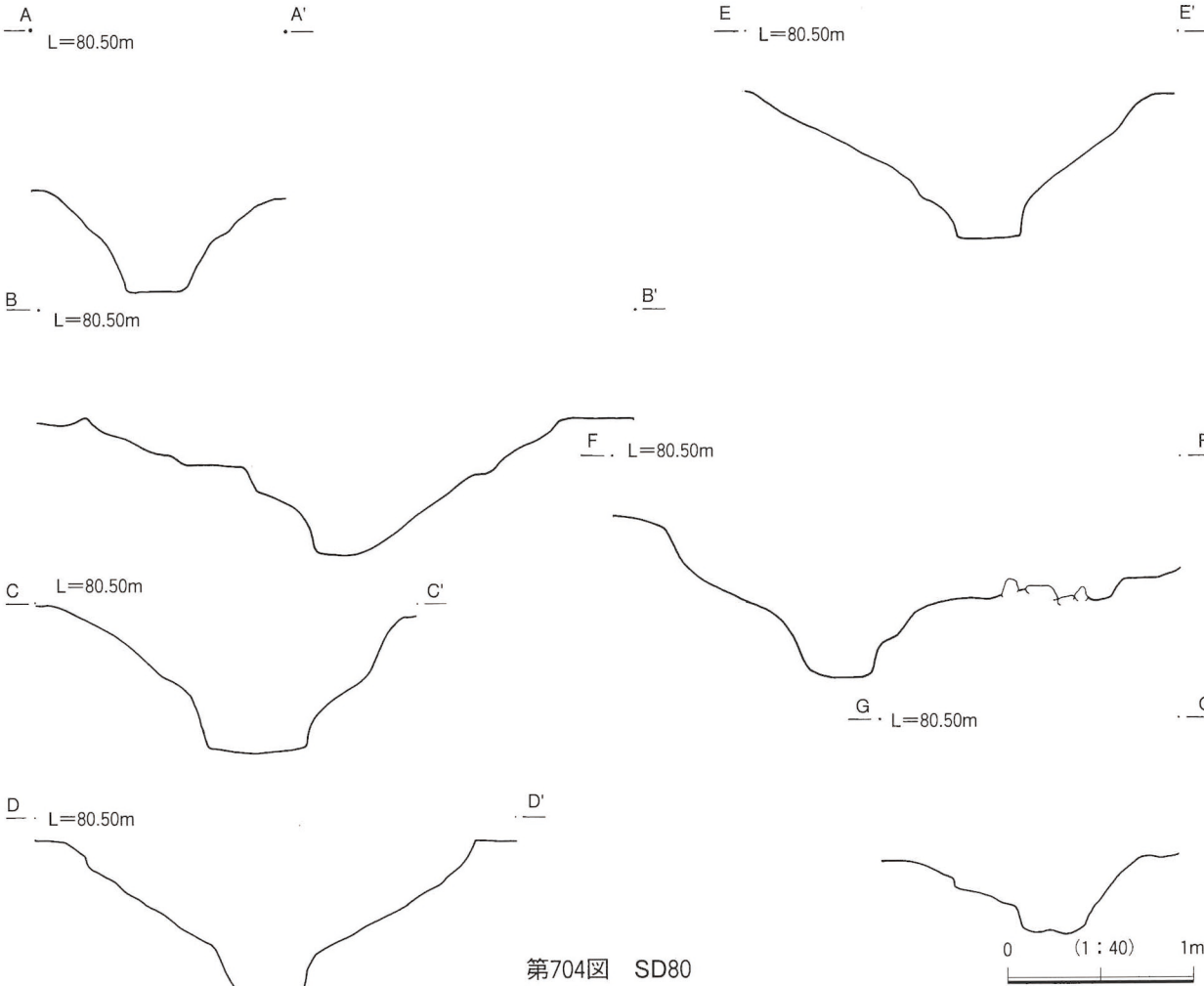
SD80は方形に巡り、館址の堀と考えられる。堀に囲まれた内部に建物、井戸、土坑、ピットが配される。館址に伴うものと考えられる。館址の規模は、東西81.0m南北66.0m、隅丸の長方形を呈す。館址の南辺中央では、2.8mほど堀が途切れ、土橋となっている。

SD80からは、13区で軟質陶器鍋（3・4）・鉢（2）、焼締陶器甕（1）、土師質土器皿（5）。17区では、焼締陶器甕（6～9）・砥石（16）などが出土している。

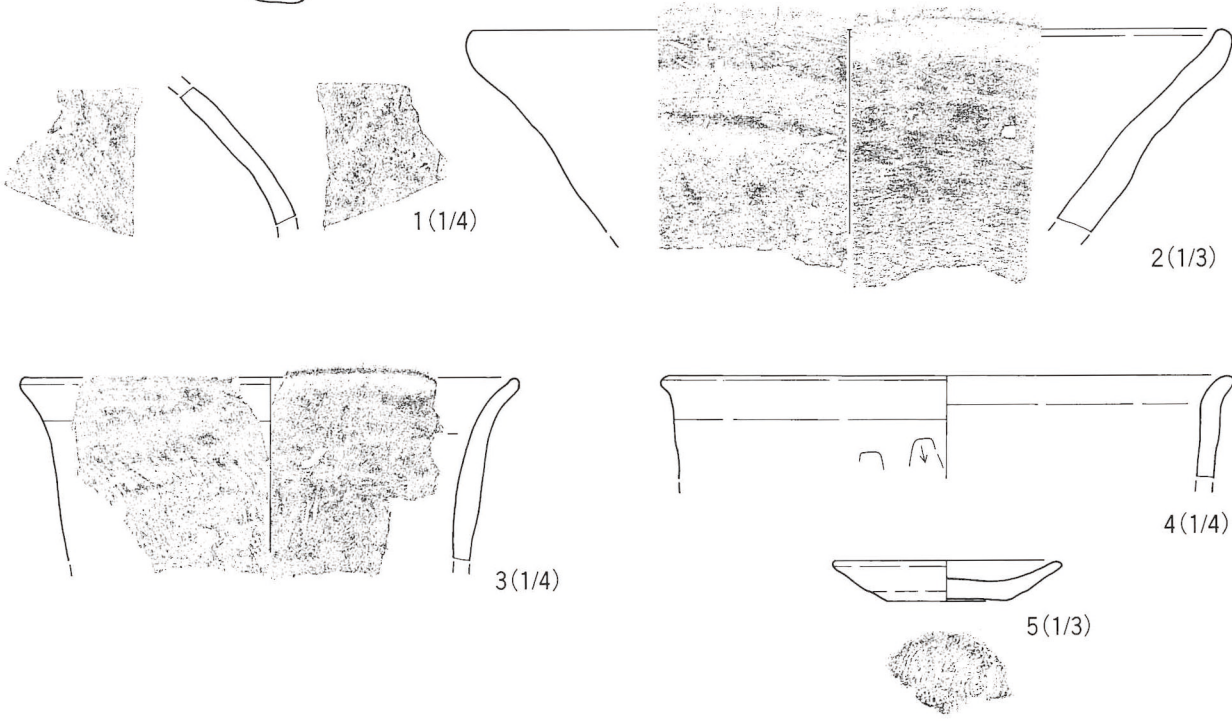
館址の堀以外の、関連する溝、9区東SD92から焼締陶器甕（10～12）、9区東SD104から焼締陶器甕（13・14）、9区東SD105から焼締陶器甕（15）、12区SD82から青磁（18）が出土している。遺構外ではあるが、青磁（17）も出土している。いずれも13～14世紀に位置づけられる。なお、館址範囲内部からは、中世後半以降の遺物の出土はなく、中世前半の築造と考えられる。



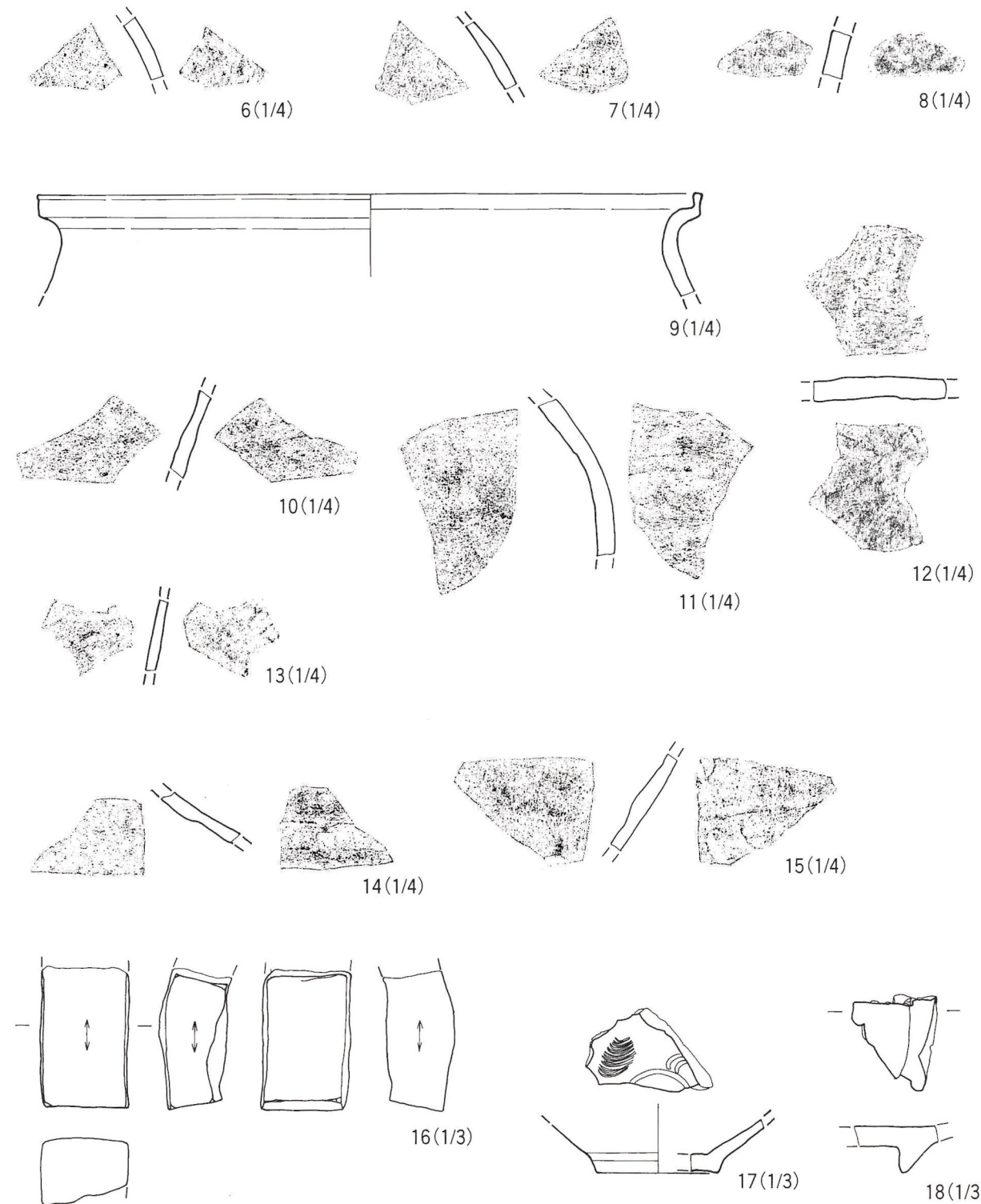
第703図 館址全体図



第704図 SD80



第705図 SD80出土遺物－1



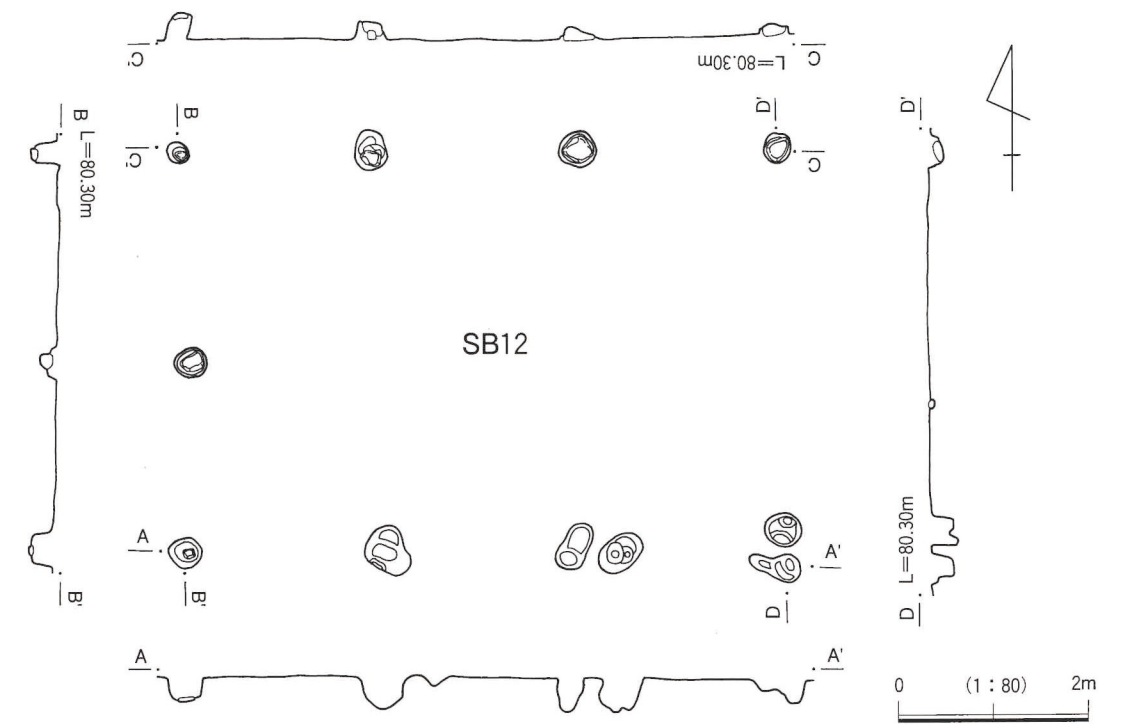
第706図 SD80出土及び関連遺物－2

第2節 掘立柱建物

9区東SB12

6.30m×4.20m、2間3間の東西棟である。東に梁行方向の中央には柱穴がない。北の4柱穴、西の3柱穴の柱穴底に礎板石あり。礎板石は25～30cm、厚さ10～13cm程度である。2石を重ねた部分もあった。

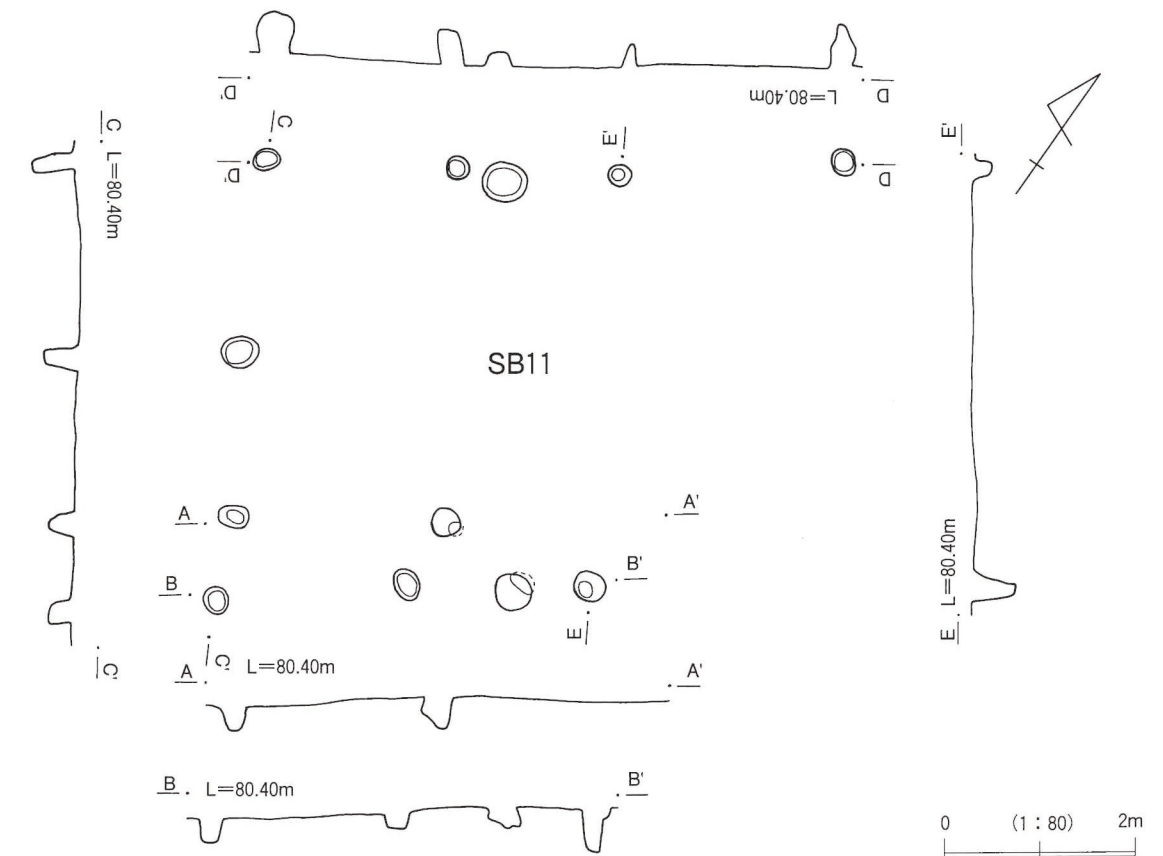
柱穴は、0.5m～0.3mの円形ないし楕円形プランで、深さ0.45～0.25cm程度である。



第707図 9区東SB12

10区SB11

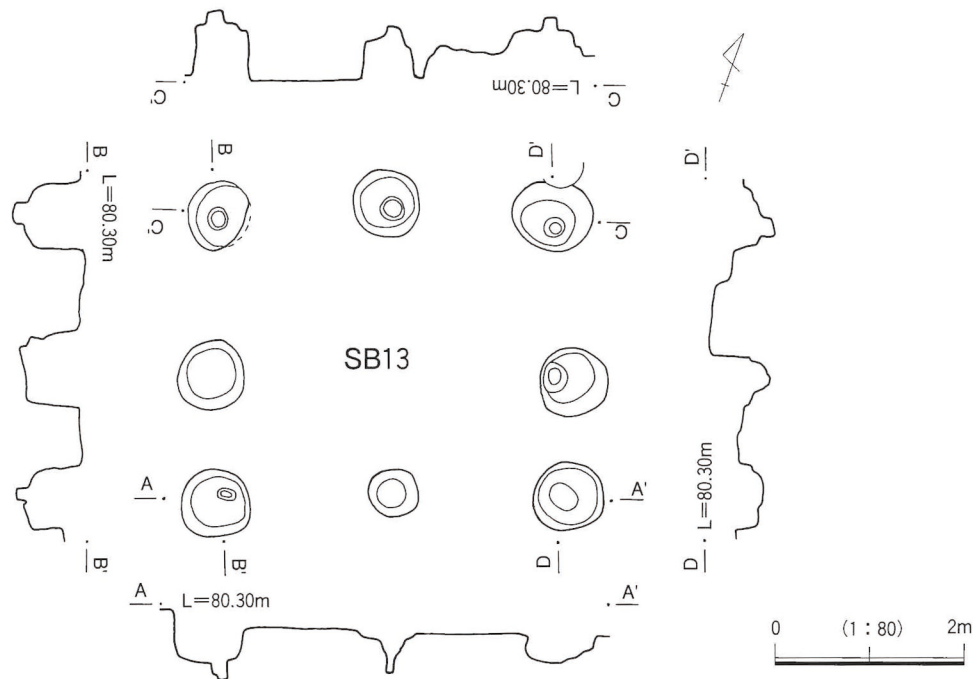
東西6.1m+α、南北4.3mの東西棟である。建物軸は、北-15°-西、南に0.75mの廂がつく。柱穴は0.3m程度の円形で、深さ0.25～0.45mである。なお、柱が等間隔に並ばない特徴がある。



第708図 10区SB11

10区SB13

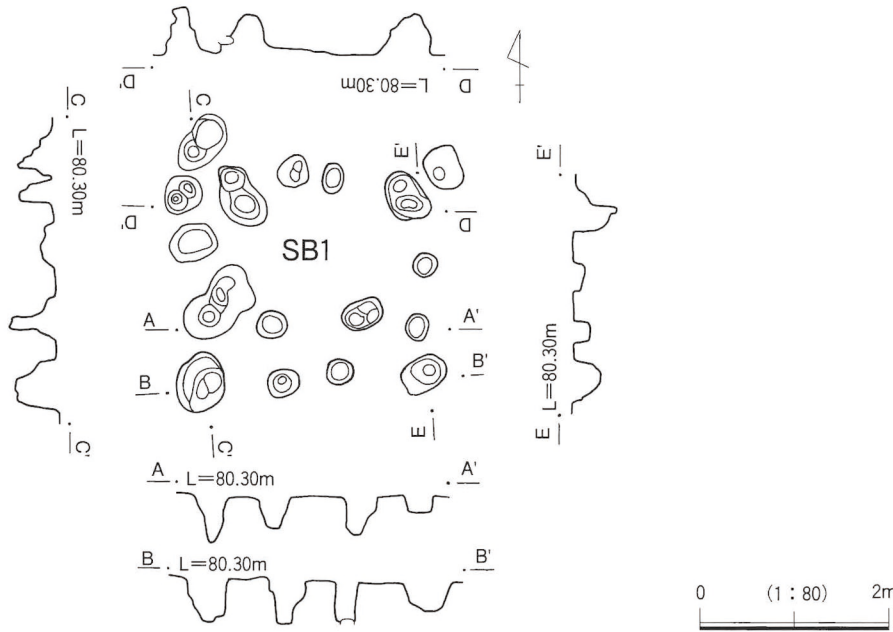
東西3.6m南北3.0m、2間2間の建物跡である。建物軸は北 -18° －西、柱穴は径0.6～0.7m、深さ0.3～0.7m程度でがっちりした建物である。柱穴には、柱を埋める部分だけ細くして、二段に掘ってあるものもある。



第709図 10区SB13

16区SB1

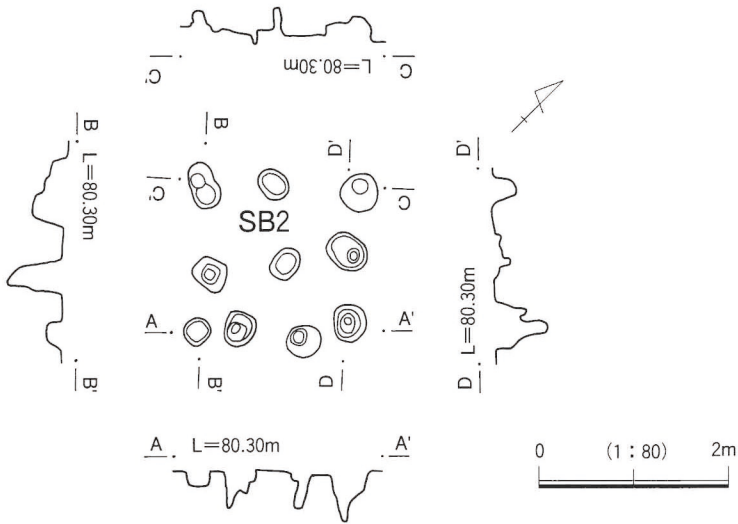
東西2間×3間、南に廂もしくは下屋がつく。身舎は、東西2.2m、南北1.3mの規模で、建物軸は北 -1° －西である。廂ないし下屋の幅は0.5～0.6mである。身舎の柱穴は径25cm～60cm、深さ30cm～60cmと大小のばらつきがある。廂ないし下屋の柱穴も径25cm～60cm、深さ35cm～50cmと比較的深くしっかりしている。なお、全体を通じて建物の柱筋は通らない。



第710図 16区SB1

16区SB2

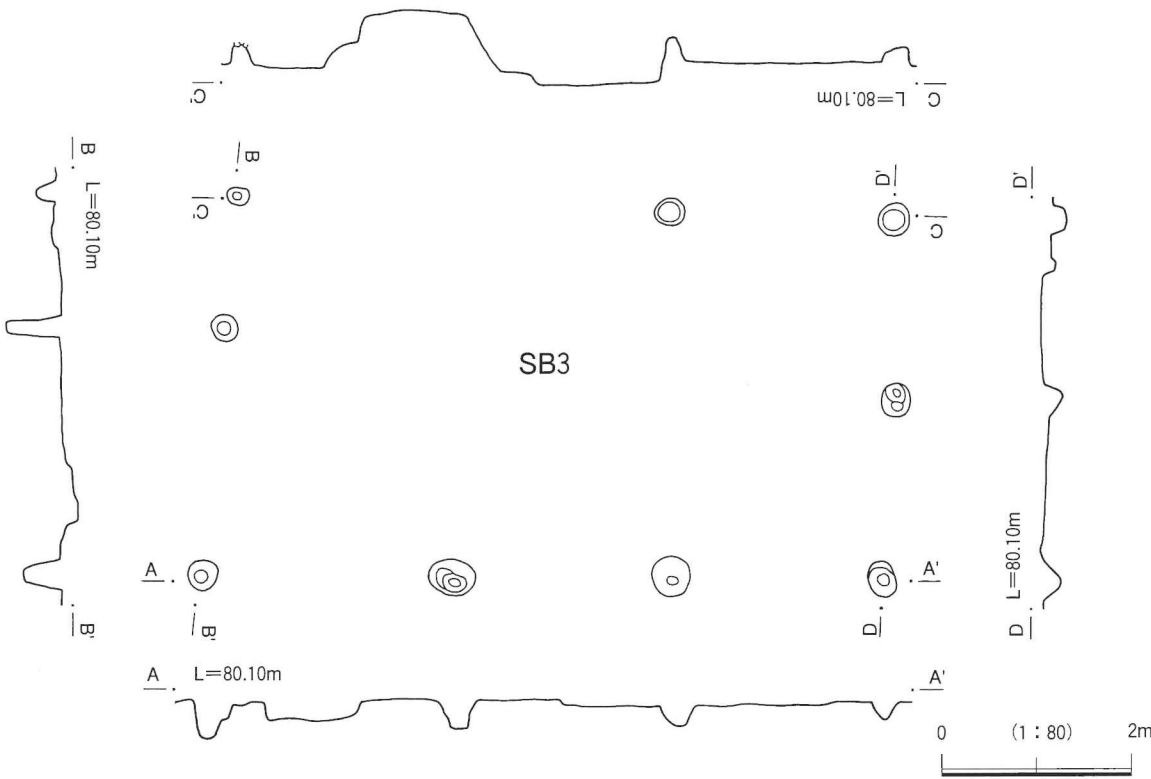
2間×2間の規模の小さな総柱の建物である。東西1.8m、南北1.5m、南の柱筋は4本で構成される。建物軸は、北 -40° －西とかなり傾いている。柱穴は、径30～50cm、深さ15～50cmである。中央の柱穴が小さく浅く、端の柱穴が大きく深い傾向がある。



第711図 16区SB2

16区SB3

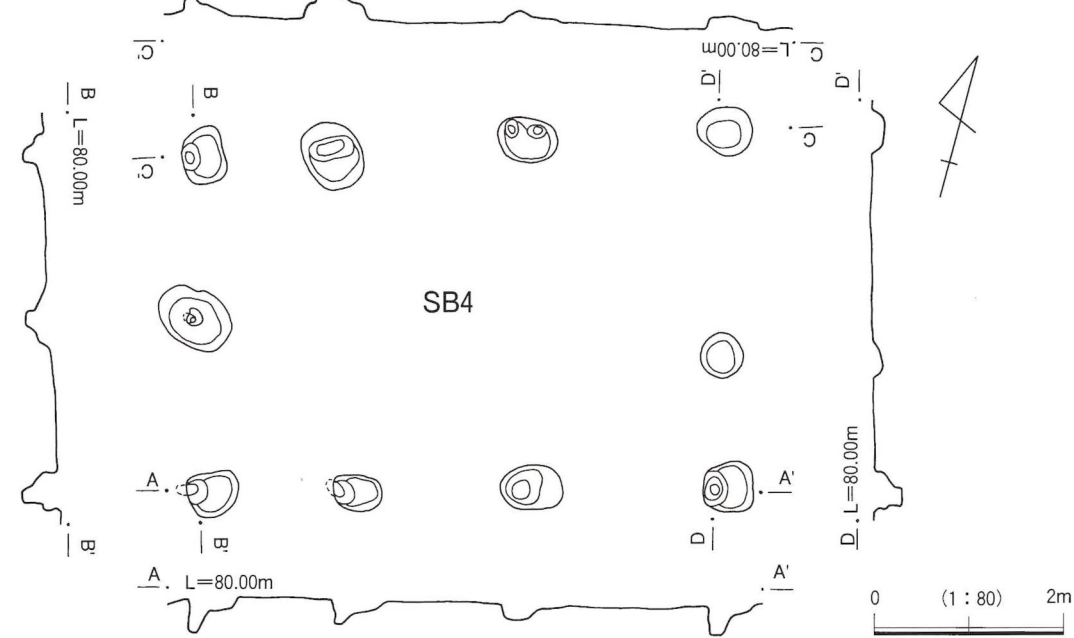
東西に長い、2間×3間の建物である。東西6.9～7.1m、南北3.9mと柱間が1.8mを超え、また柱筋が通る建物である。建物軸は、北 -7° －西、北西の西から2番目の柱穴は未検出である。柱穴は、径30～50cm、深さ20cmから40cm、としっかりした上屋とは思われない。なお、梁行の中央柱は真ん中からややずれた位置である。



第712図 16区SB3

16区SB4

館址の堀の外、北側で検出された。東西に長い、2間×3間の建物である。東西5.6m、南北3.4mの規模で柱筋がしっかり通る。建物軸は、北16°－西である。柱穴は径40～80cm、深さ25～35cmとやや浅い傾向にある。

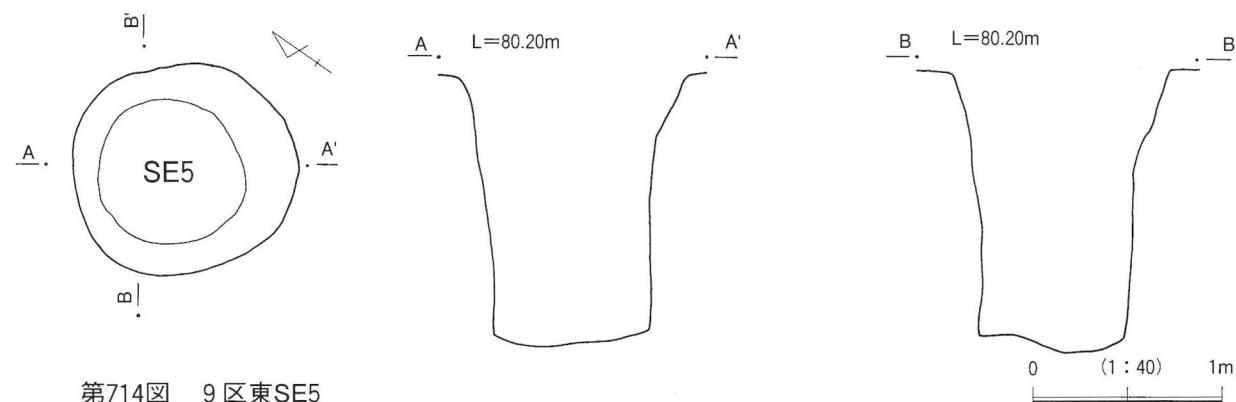


第713図 16区SB4

第3節 井戸

9区東SE5

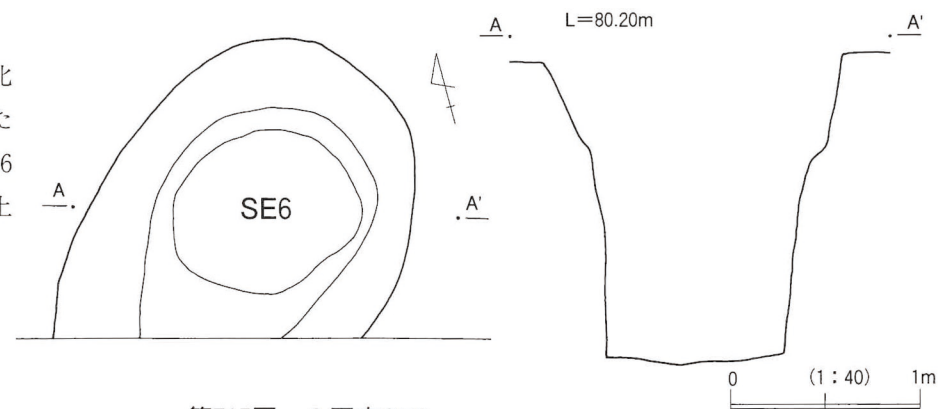
平面形はやや西に傾いた1.2m×1.1mの楕円形で、断面は深さ1.4mの筒形の井戸である。



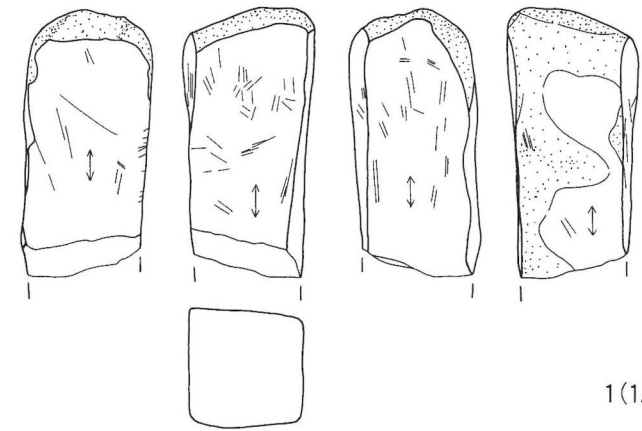
第714図 9区東SE5

9区東SE6

平面形は、東西1.6m、南北2.0m+αとやや東に傾いた楕円形である。深さは、1.6mで筒形である。砥石が出土している。



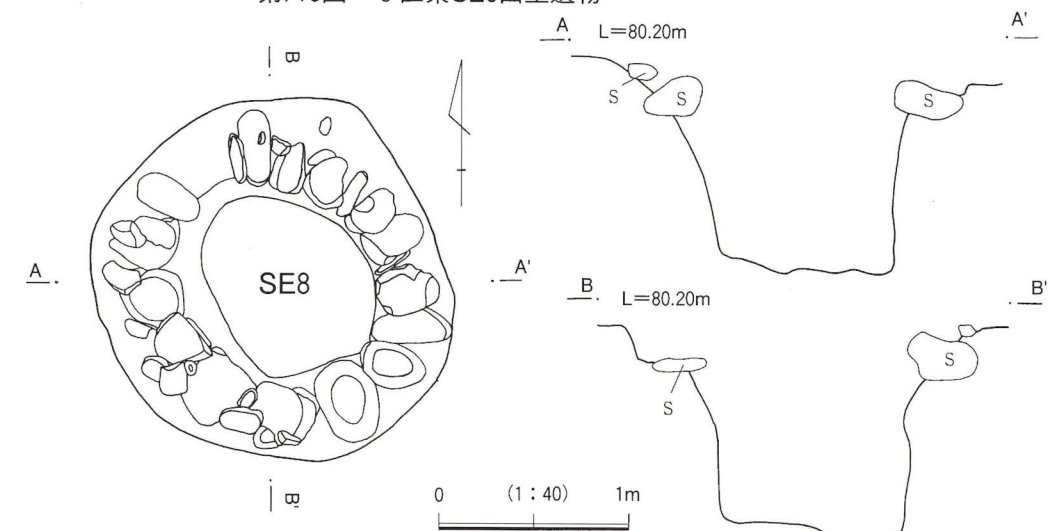
第715図 9区東SE6



第716図 9区東SE6出土遺物

9区東SE8

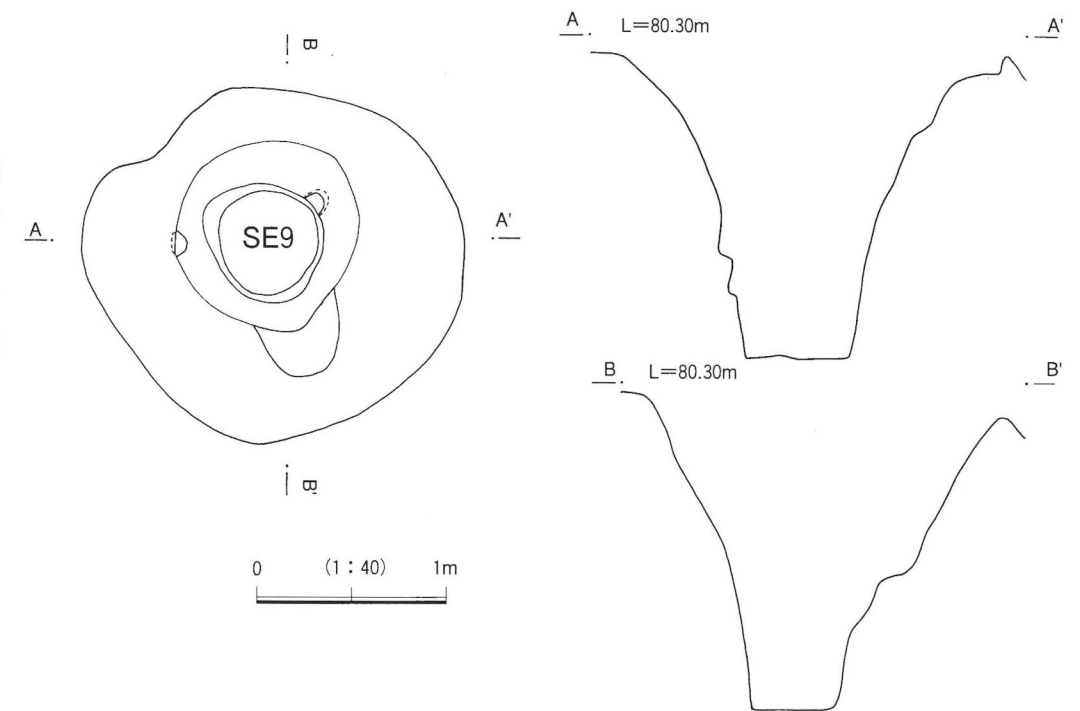
平面形は、東西2.0m、南北1.9mのほぼ円形である。断面は、中央付近からすぼまった台形で、深さ1.1mである。なお、井戸の最上部は、石組みがある。



第717図 9区東SE8

9区東SE9

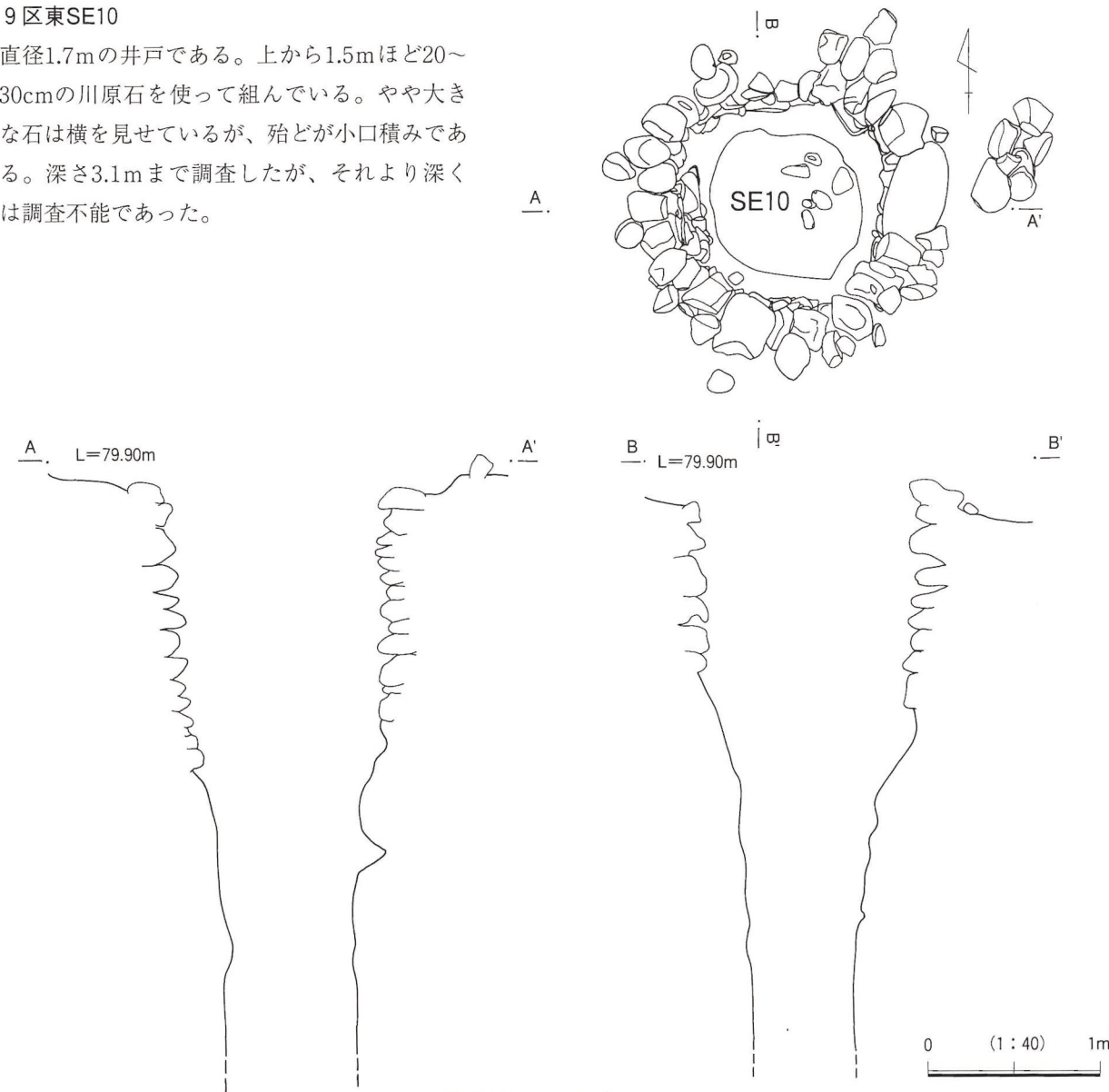
平面形は、直径2.0mあまりのやや凹凸のある円形である。ロート形の断面で、深さ1.6mある。



第718図 9区東SE9

9区東SE10

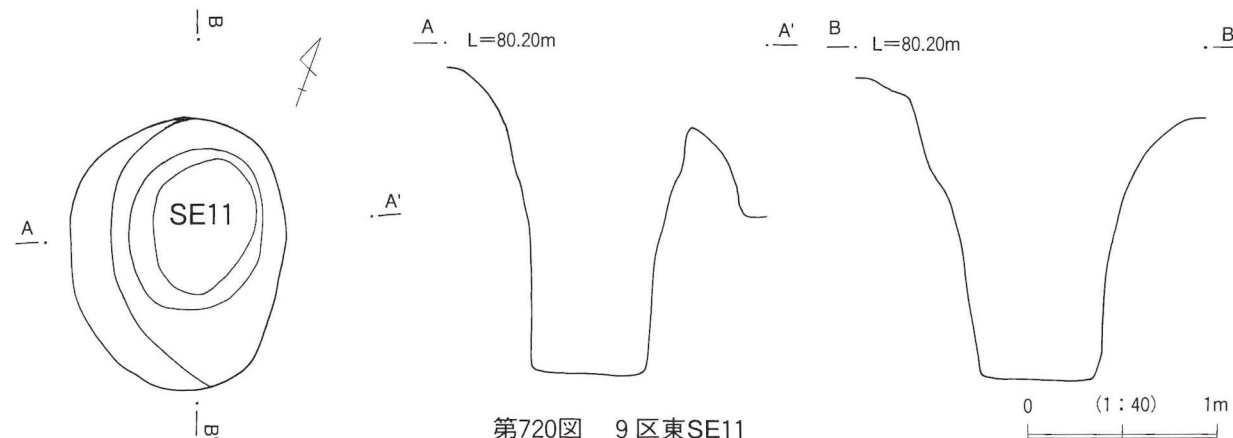
直径1.7mの井戸である。上から1.5mほど20～30cmの川原石を使って組んでいる。やや大きな石は横を見せているが、殆どが小口積みである。深さ3.1mまで調査したが、それより深くは調査不能であった。



第719図 9区東SE10

9区東SE11

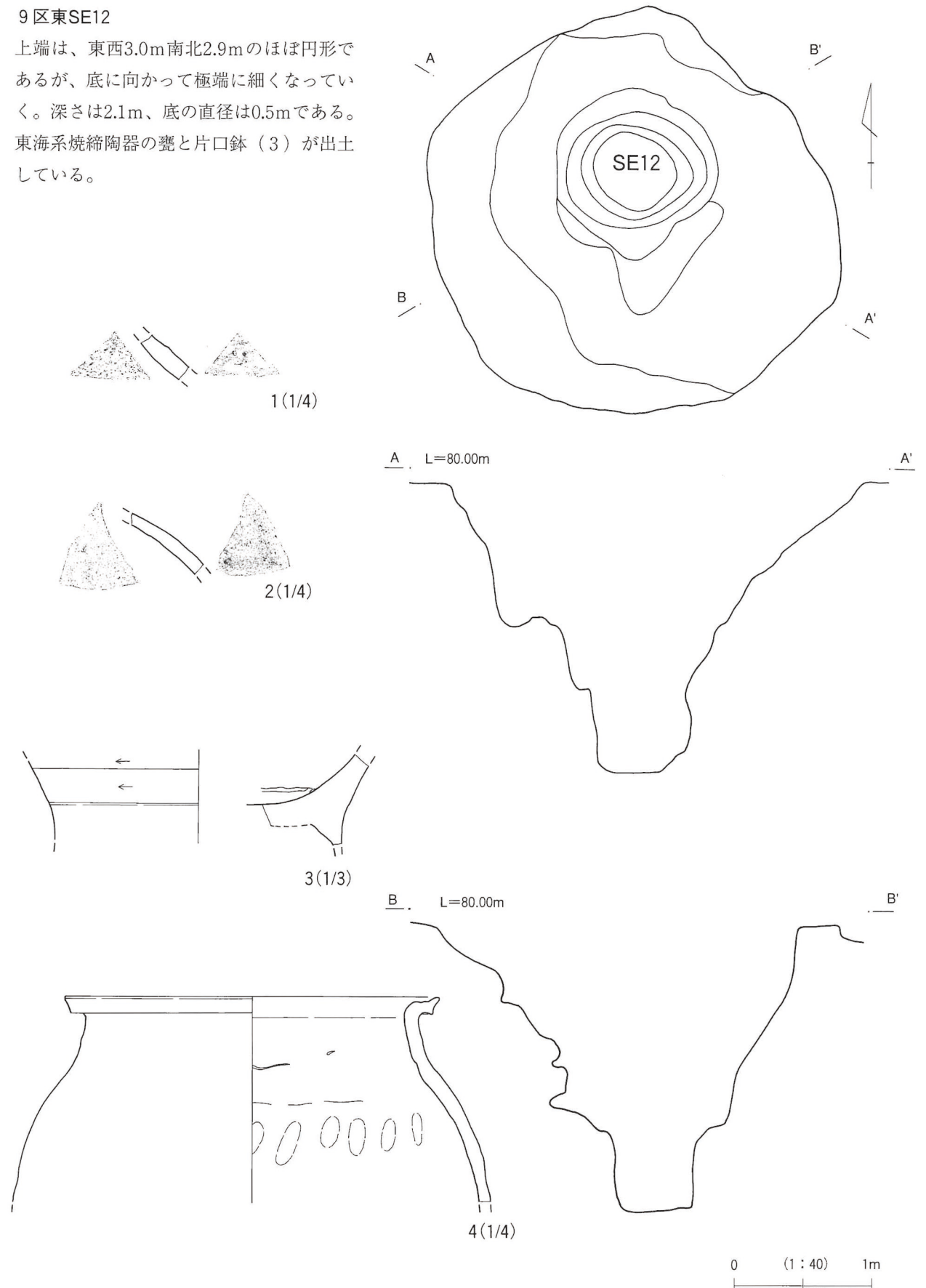
東西1.1m南北1.5mの楕円形の井戸である。断面は筒形で底に向かってすぼまっていく。深さは、1.55mある。



第720図 9区東SE11

9区東SE12

上端は、東西3.0m南北2.9mのほぼ円形であるが、底に向かって極端に細くなっていく。深さは2.1m、底の直径は0.5mである。東海系焼締陶器の甕と片口鉢（3）が出土している。

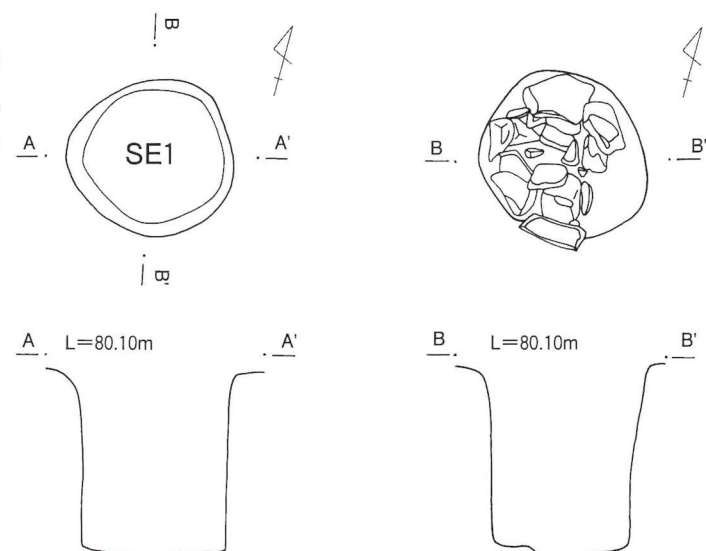


第721図 9区東SE12出土遺物

第722図 9区東SE12

16区SE1

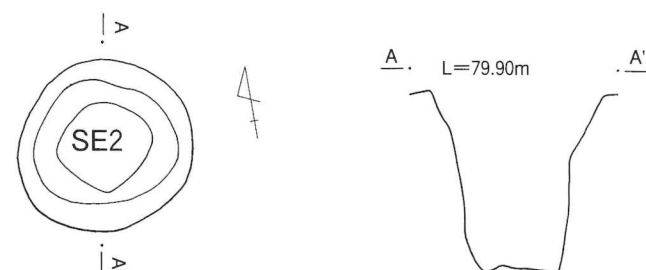
竪穴住居SI1と重複しこれを壊す形で検出された。0.9mの円形で深さ0.95mである。断面の形は筒形で底が平らである。埋土中には二次堆積のAs-Bが散見できる。



第723図 16区SE1

16区SE2

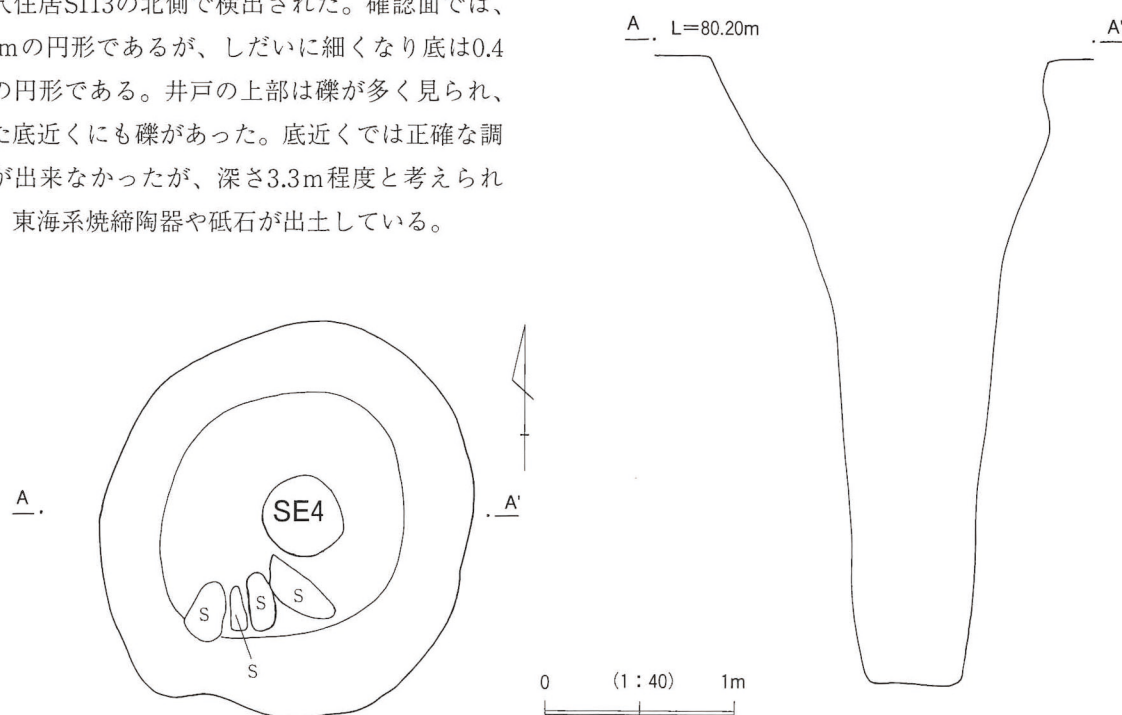
SD3の東で検出された。直径0.9mで断面はやや台形に近い筒形である。深さは0.9mで底は平らである。



第724図 16区SE2

16区SE4

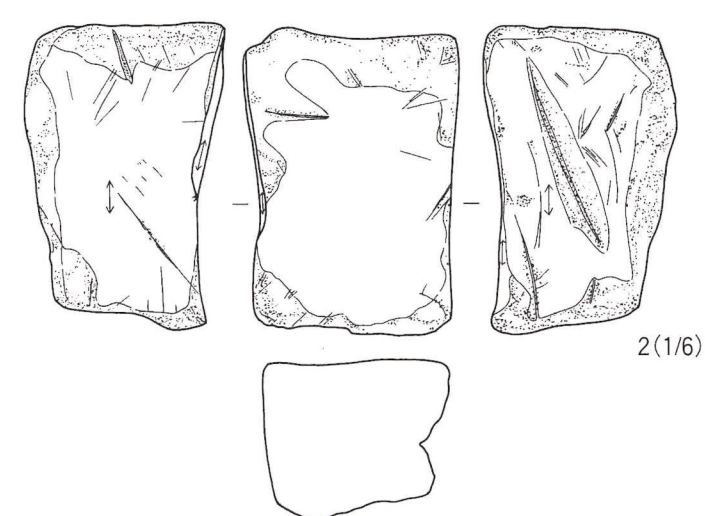
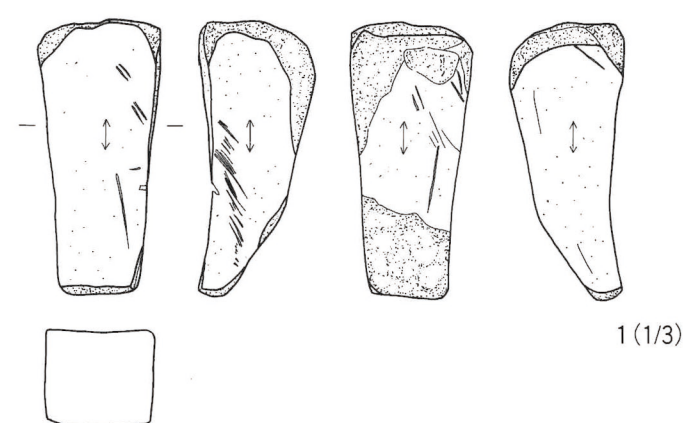
竪穴住居SI13の北側で検出された。確認面では、1.9mの円形であるが、しだいに細くなり底は0.4mの円形である。井戸の上部は礫が多く見られ、また底近くにも礫があった。底近くでは正確な調査が出来なかったが、深さ3.3m程度と考えられる。東海系焼締陶器や砥石が出土している。



第725図 16区東SE4

16区SE5

1.0m×0.8mの楕円形プランで、断面は筒形、深さ3.8mある。埋土中には大きめ石と小さい石が確認される。埋め戻しの可能性が高い。As-Bの二次堆積層が見られる。ただし館址の堀であるSD80を切るため時代が下ると考えられる。砥石No 1は砥沢石製、No 2は砂岩製である。



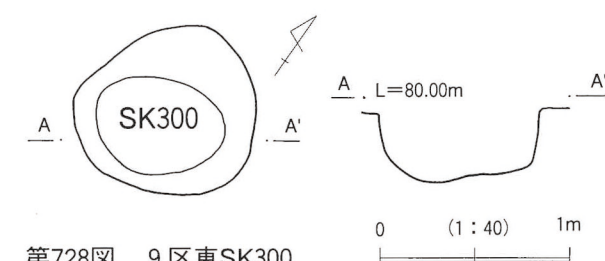
第726図 16区東SE5出土遺物

第4節 土坑・ピット

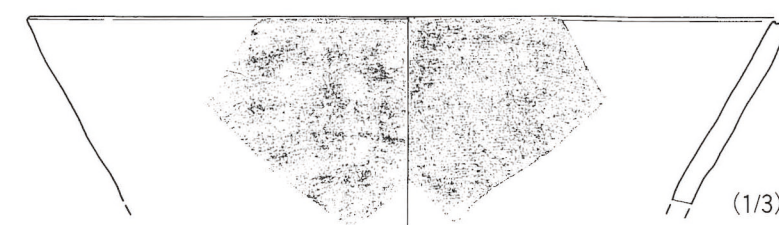
9区東SK300

径0.75m深さ0.4mの土坑である。

内面のロクロ目がはっきりした、産地は不詳であるが搬入品とみられる鉢が出土している。



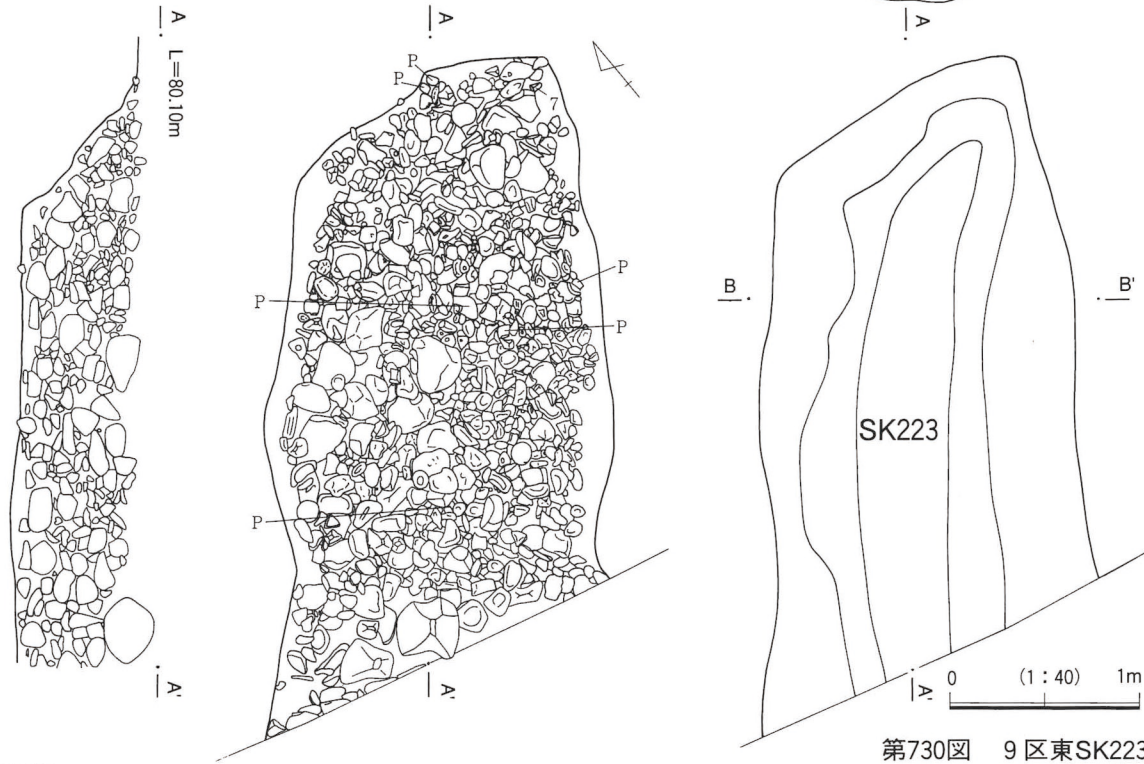
第728図 9区東SK300



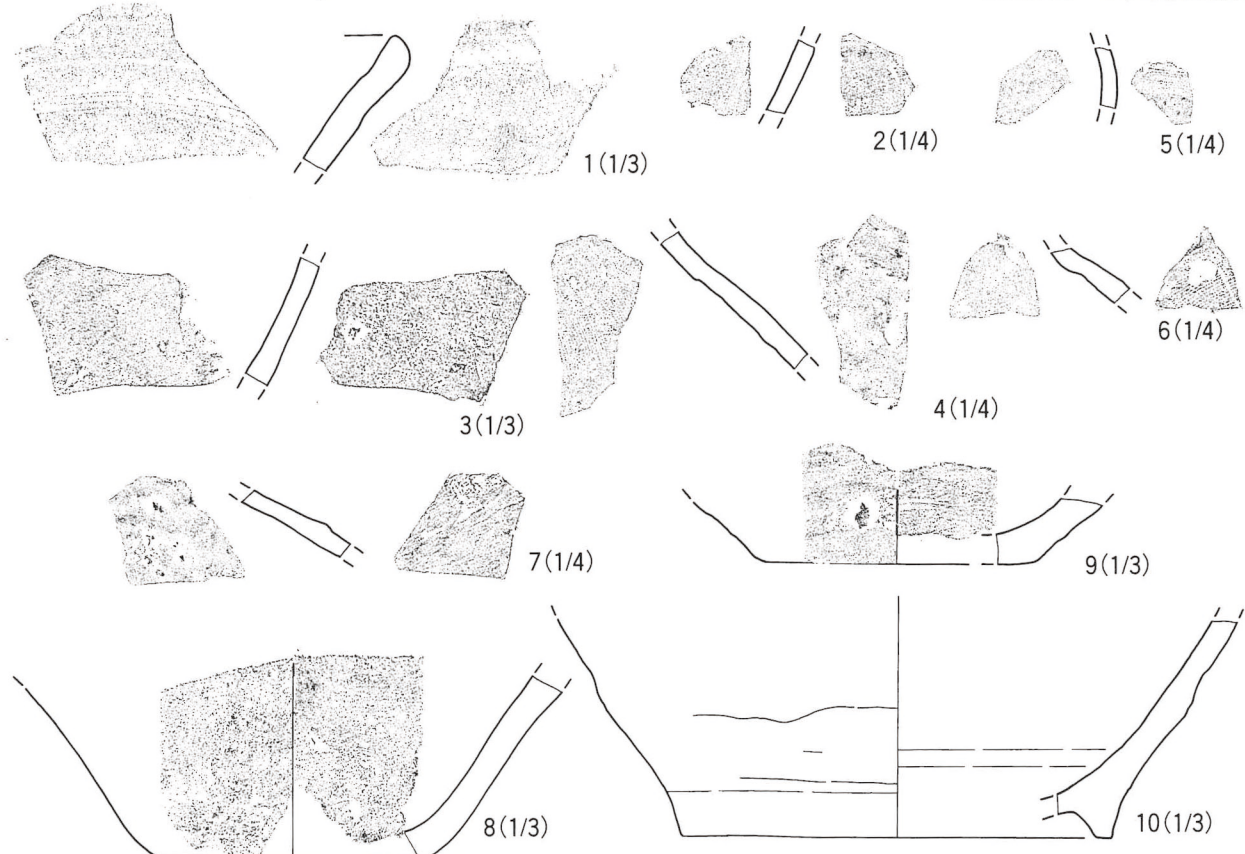
第729図 9区東SK300出土遺物

9区東SK223

幅1.7m、長さ3.1m+ α 、深さ0.55m、断面はゆるやかなVの字形の土坑である。内部にはやや大きめの礫が充填していた。遺物は、焼骨・焼締陶器甕・東海系片口鉢（10）・軟質陶器の鉢が出土している。



第730図 9区東SK223

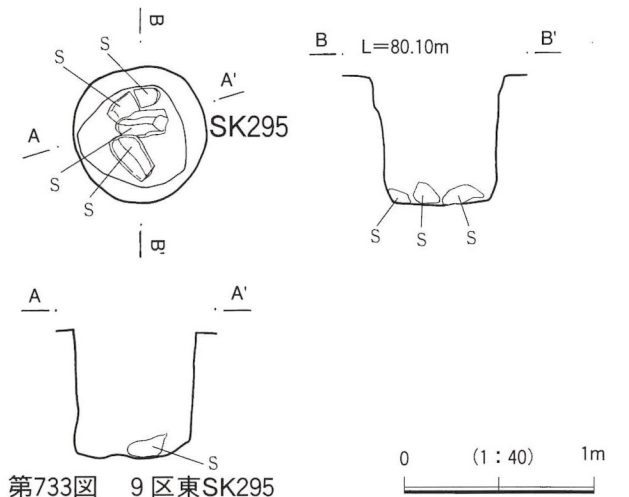


第731図 9区東SK223出土遺物

9区東SK295 径0.7mの円形土坑。深さ0.7mある。底に30cmほどの川原石が3点みえる。東海系焼締陶器の破片が出土している。

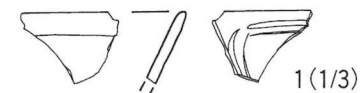


第732図 9区東SK295出土遺物



第733図 9区東SK295

その他、16区27号住居を切るピットから13～14世紀の中国龍泉窯系の青磁碗の破片が出土している。



第734図 16区ピット中出土遺物

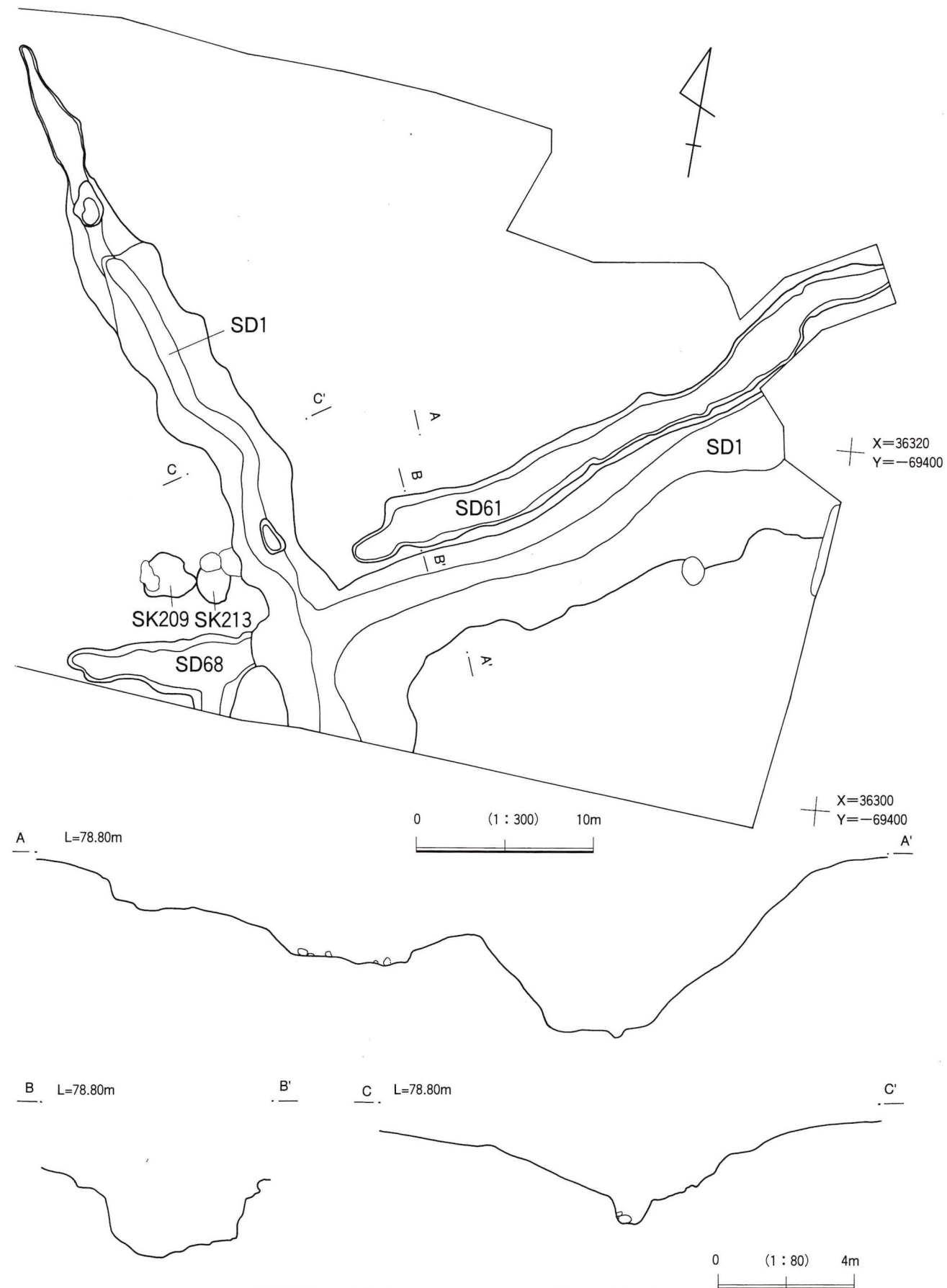
第Ⅶ章 中世後半の遺構と遺物

第1節 溝

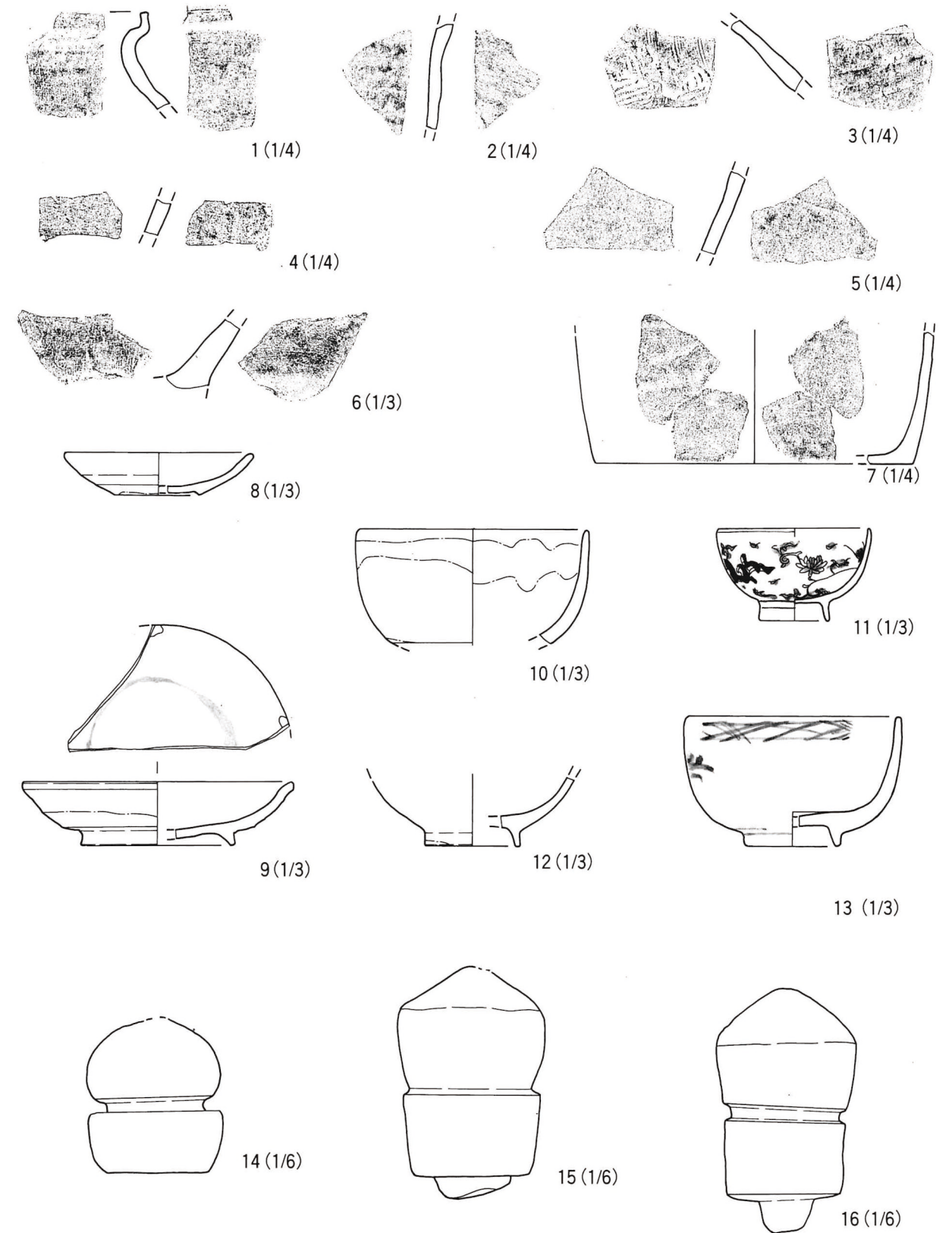
6区SD1・SD61・SD68

6区の堀は、幅11.0～12.0m、深さ2.2～2.6mと大規模である。図ではSD1・SD61・SD68・SK209・SK213とあるが、これらは一体の遺構と考えられる。覆土は浅間B軽石（As-B：1108年噴出と推定）混じりの砂層で、部分的に大きめの礫もある。堀の中位にAs-A（1783年噴出）の堆積が確認でき、その上部は黄色の埋め戻したとみられる土層である。最下層の出土遺物は、中世の軟質陶器鉢・鍋・常滑甕片、板碑片、五輪等、石臼がある。軟質陶器鉢・鍋は、15世紀後半と考えられる。焼締陶器の甕は、13世紀後半頃に位置づけられる。板碑は14世紀及びそれ以前に盛期がある遺物であり、また出土した板碑で暦応三年（No21、1340年、北朝）があるが、それが破片となっていることから15世紀以降の廃棄が考えられる。

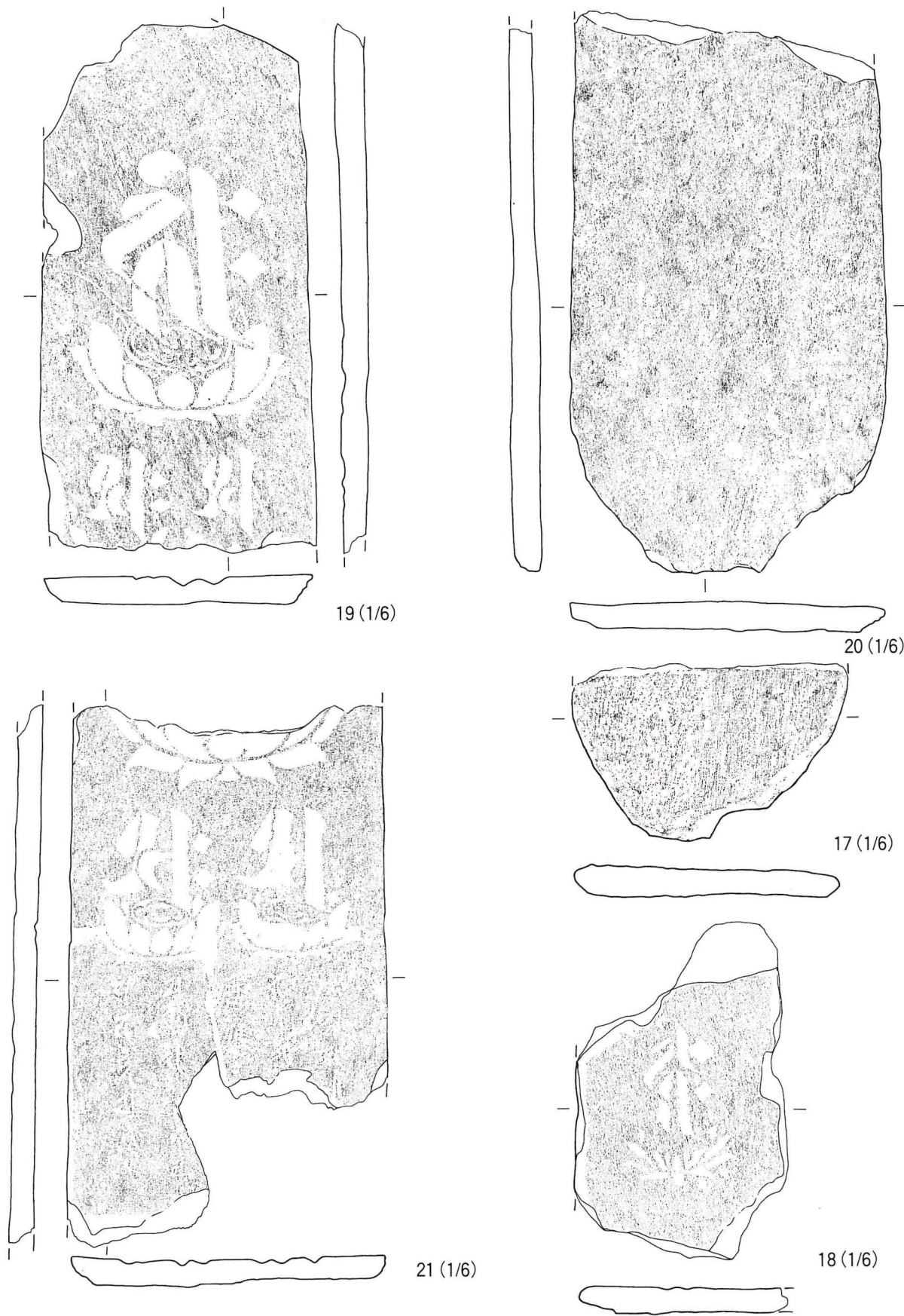
堀の中上層からは、近世・近現代の遺物が出土している。そのうちの一部を図化した。17世紀の陶器丸皿、18世紀の尾呂碗、近代の磁器などである。この堀は、中世に掘削され、昭和40年代に行われた圃場整備前までその形を留めていたと見られる。連続して2区SD1・3区SD1及び18区SD7が同規模の堀がある。全体で館址を囲むものと考えられる。



第735図 6区SD1・SD61・SD68・SK209・SK213



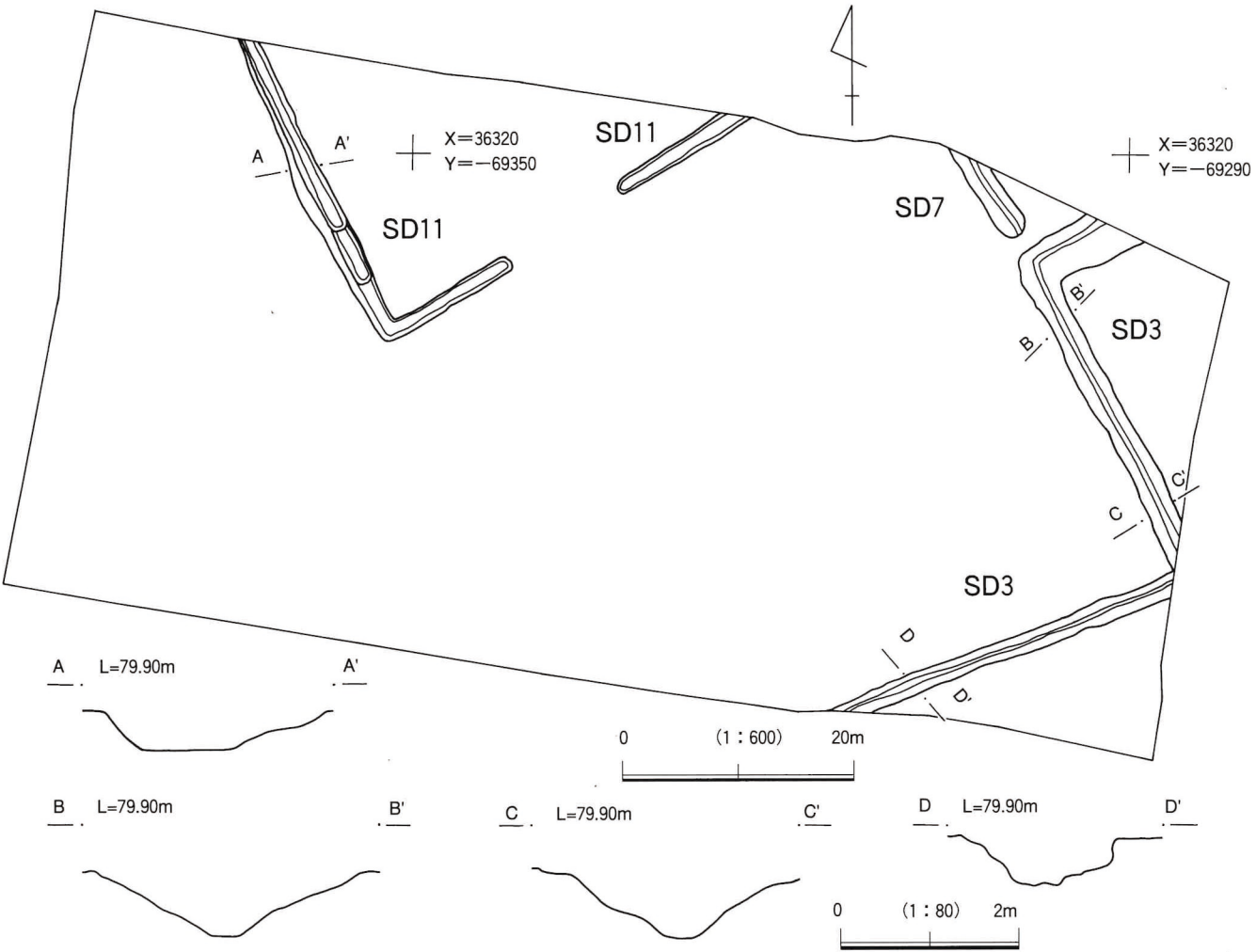
第736図 6区SD1出土遺物



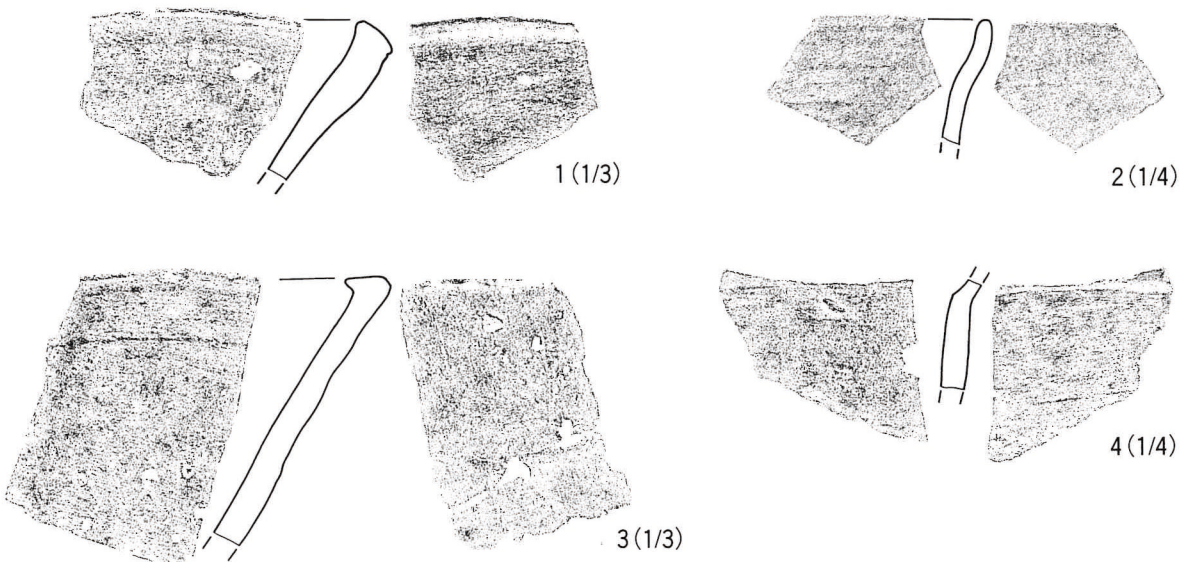
第737図 6区SK209・SK213出土遺物

2区SD3・SD7・SD11

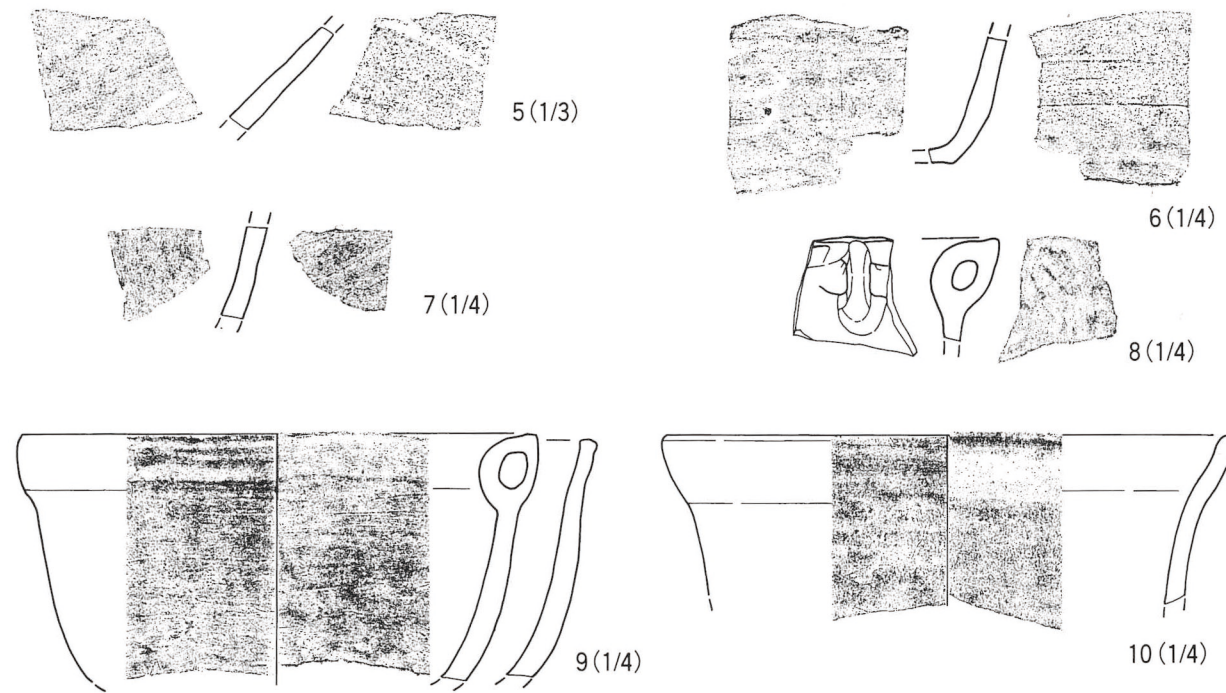
2区の東端で検出された。幅3.0m、深さ0.7m程度で、断面はゆるやかなV字形である。軟質陶器鍋・鉢が出土している。SD1で囲まれる館址内部の区画するための溝とも考えられる。



第738図 2区SD3・SD7・SD11



第739図 2区SD3出土遺物

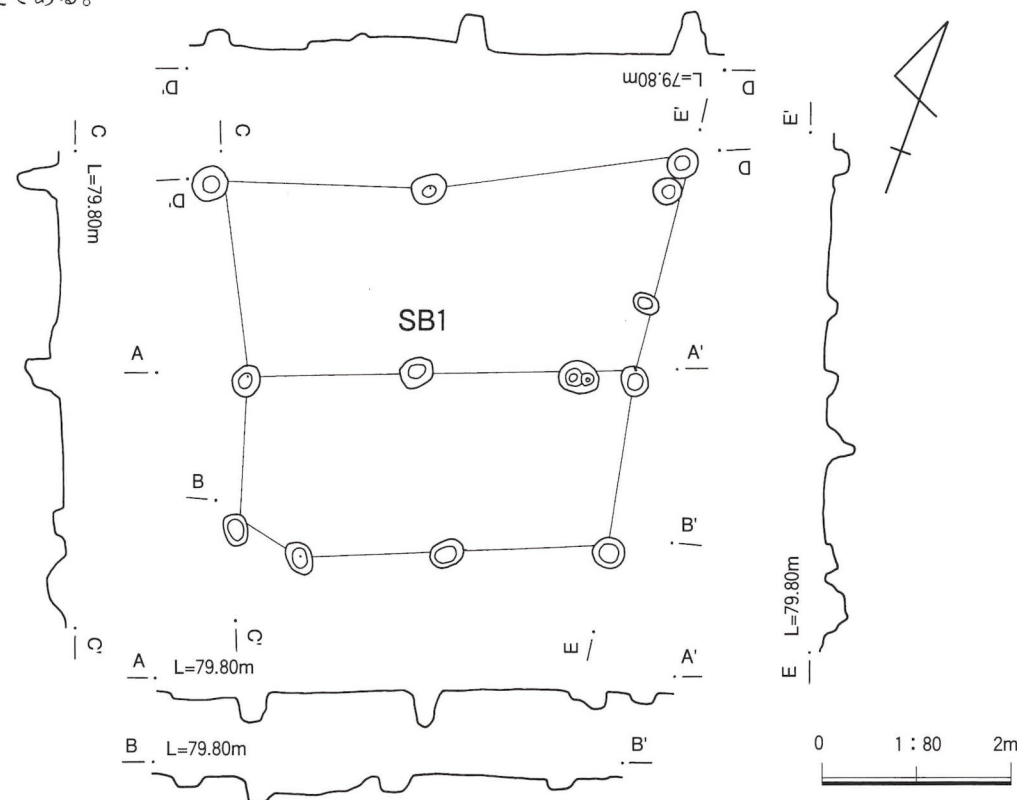


第740図 2区SD3出土遺物

第2節 掘立柱建物

2区SB1

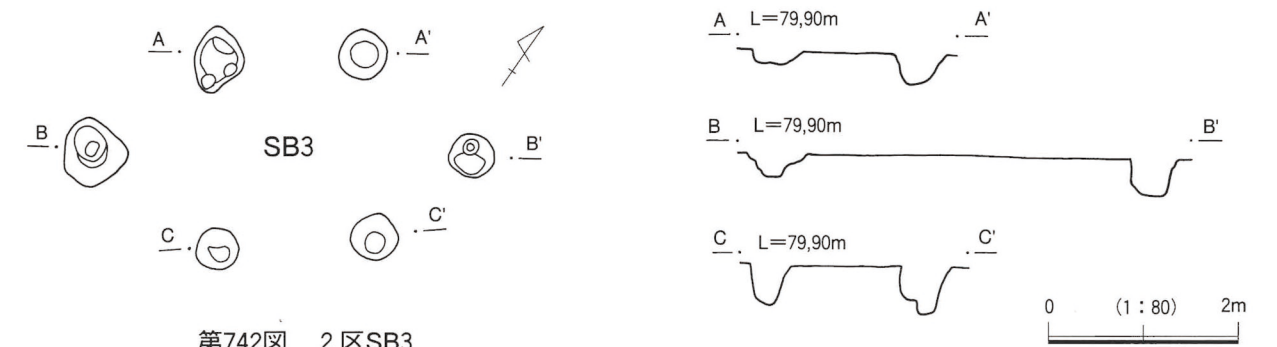
SD7（古墳時代）を掘り込み、SD6（中世以降）に壊される。東西に長いやや形のゆがんだ2間×2間の総柱の建物である。建物軸は、北 -23° ー西、東西幅は北が長く5.0mで柱は3本、次いで中央は4.1mで柱は5本、南は3.9mで4本構成である。南北の幅は西で3.6mの3本柱、東は4.1mで5本構成である。柱穴は径30～40cm、深さ20～40cm程度である。



第741図 2区SB1

2区SB3

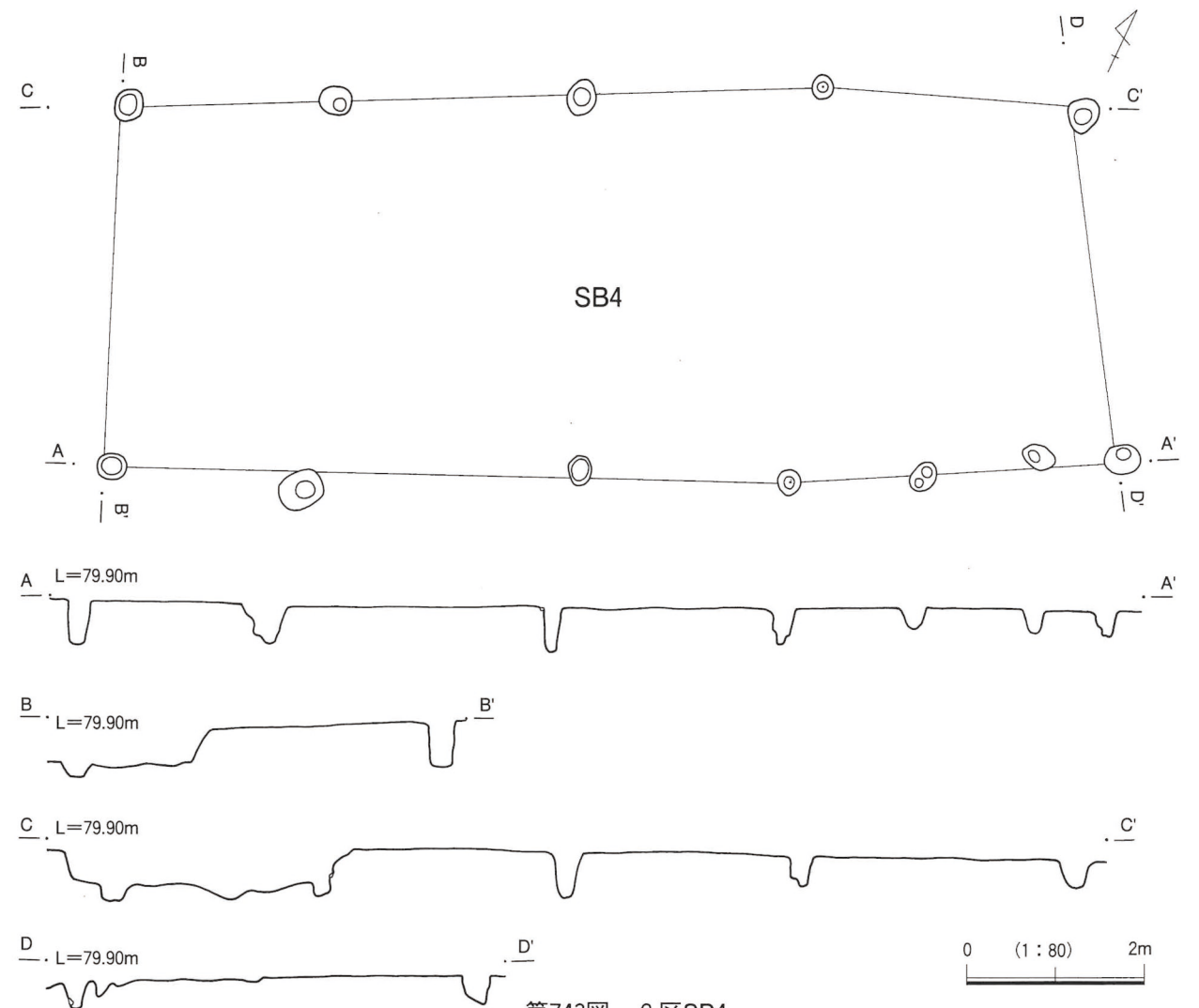
東西に長い変形の建物である。東西幅は、棟持柱の長さをとれば4.0m。南北幅は、2.0～2.1mである。建物軸は北 -65° ー東にとる。柱穴は、直径50cm程度、深さは、20～50cm程度である。



第742図 2区SB3

2区SB4

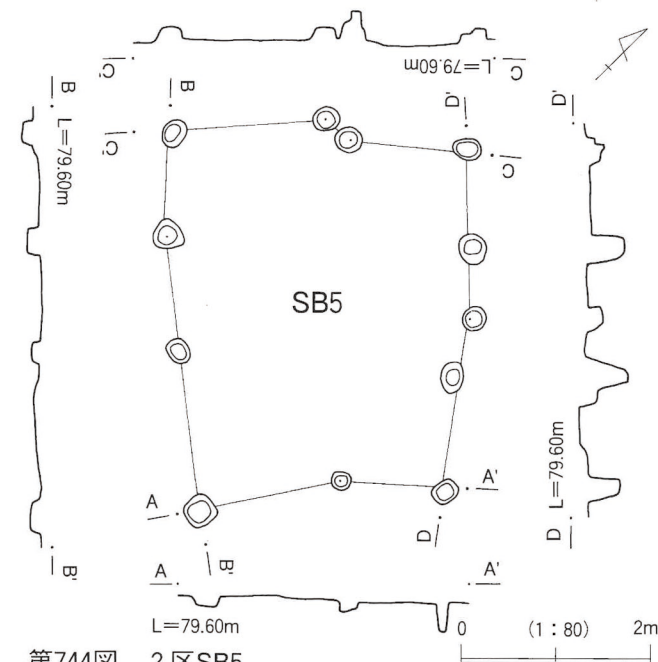
東西に長い1間×4間の建物である。東西長は、北で10.6m、南で11.3mある。南北は1間ではあるが、西で4.0m、東で3.8mと長い。建物軸は北 -18° ー西の傾きである。柱穴は30～60cm、深さ40～60cm程度である。



第743図 2区SB4

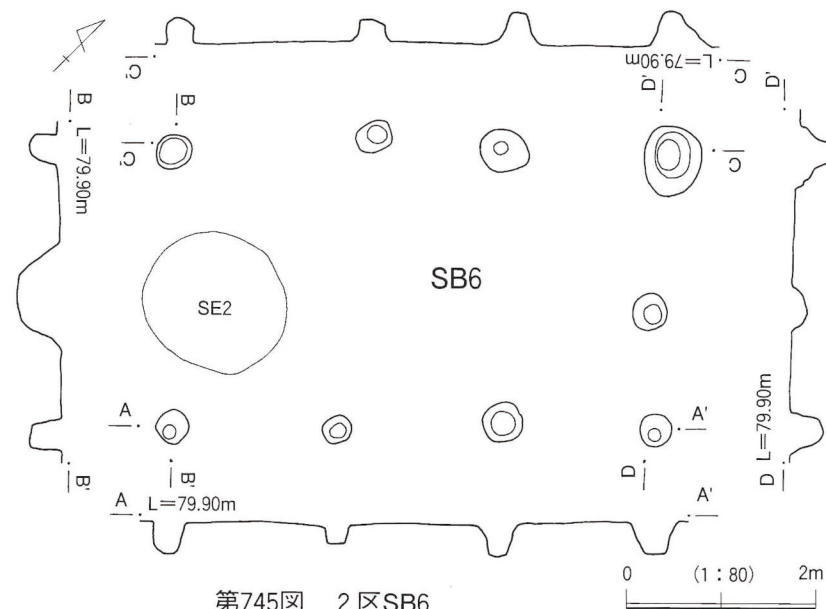
2区SB5

2間×3間の北西に棟をとる建物である。東西長は北で3.6m、南で4.1m、南北幅は、西で3.1m、東で2.6mである。柱は西が4本構成、北が5本構成、南が4本、東が3本構成である。柱筋は通らず、特に東では柱が建物内に入り、北では中央柱が2本で1本分の役目をしている。柱穴は直径25～30cm、深さ20～40cm程度である。



2区SB6

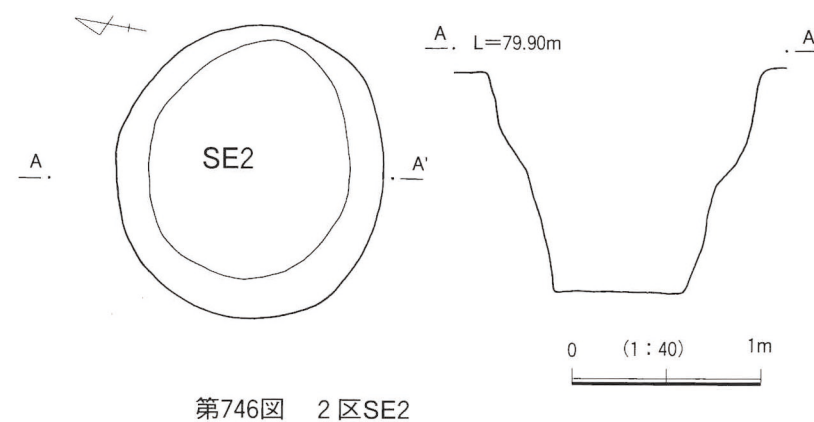
北-55° - 東に建物軸をもつ2間×3間の建物である。東西長は北で5.4m、南で5.1m。南北幅は、西で2.8m、東で2.9mである。やや台形の平面プランである。柱は北が4本、南が4本、東は3本であるが、中央柱がやや南に寄っている。西の中央柱は、2号井戸に壊されている。北の柱筋は通りが悪い。柱穴は直径0.5～0.7m、深さ0.35～0.45mの規模である。



第3節 井戸

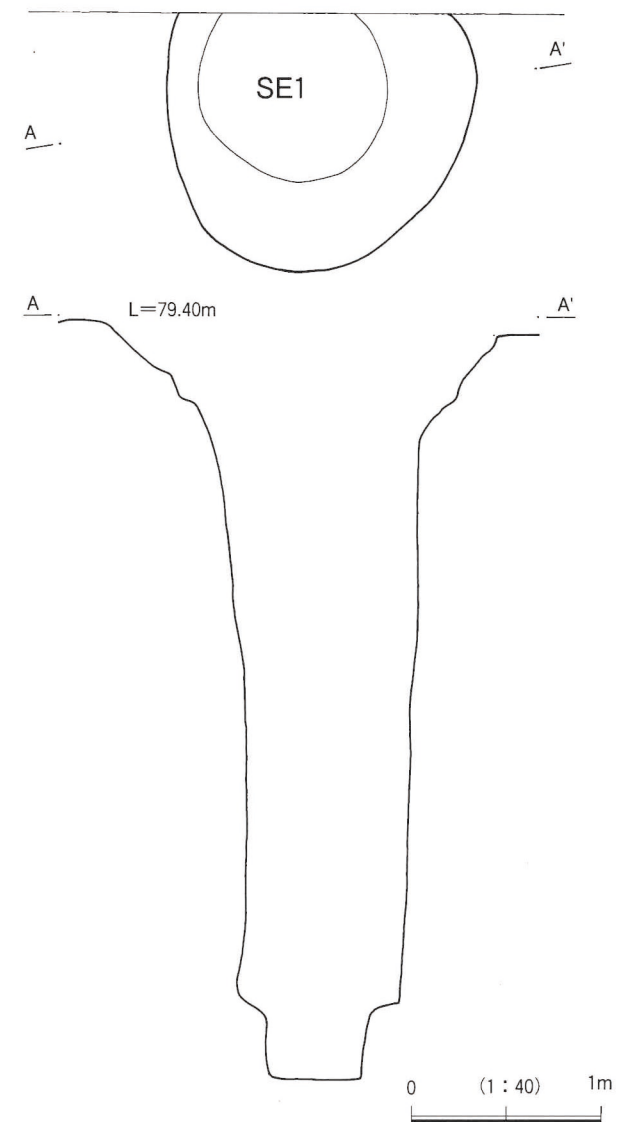
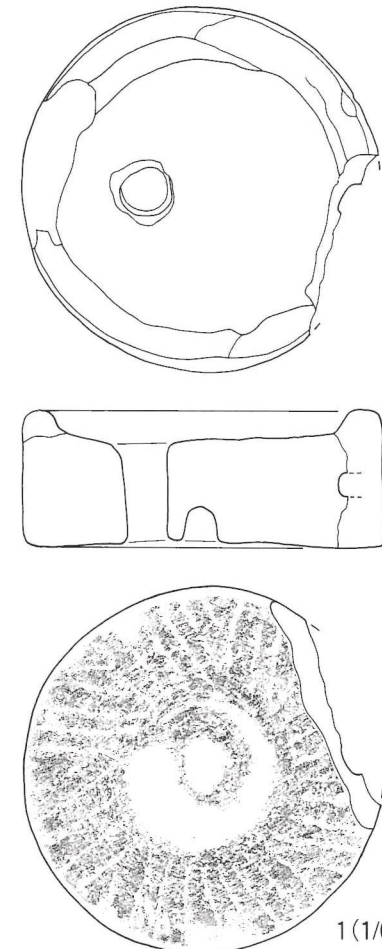
2区SE2

2区で検出。平面は不整形円で、上幅1.55m×1.4m、側面形は台形、深さ1.2mである。



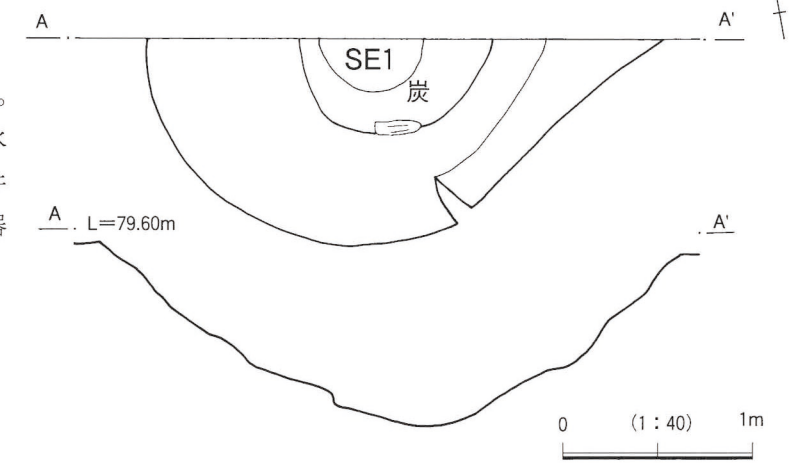
2区SE1

2区で検出した。平面は楕円形で、上幅約1.6m、中途では約0.9m、底では約0.5m。北側は調査区外である。確認面から約4mで底が検出された。エレベーション図で見ると、井戸の側面は、下から40cmのところですばまり、漏斗状となっている。石臼が出土している。粗粒輝石安山岩製である。



14区SE1

14区で検出した。北半分は調査区外となる。上幅直径1.8m。筒形をしているが、湧水のため底までの調査を断念した。よって井戸は、図より深いと考えられる。焼締陶器甕の破片が出土している。



14区SE2

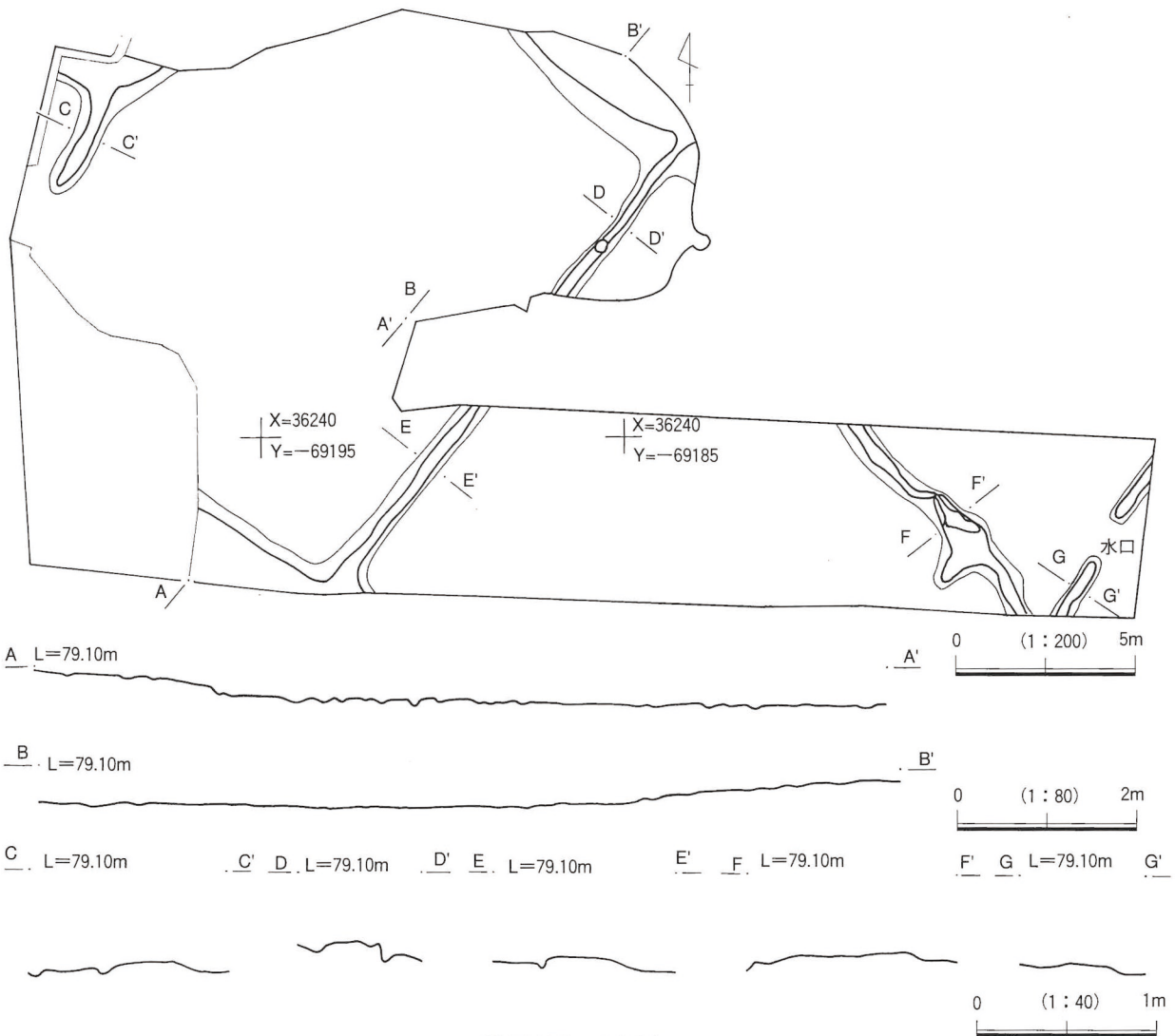
14区で検出した。北半分は調査区外となるが、上幅直径は2.6mある。断面形は漏斗形となると思われるが、湧水のため底までの調査を断念した。

第4節 水田

7区洪水下水田

7区の、井野川旧河川敷の位置には、部分的にAs-Bが残っており、直下から水田が検出された。この水田を覆うAs-B層の上には、2層の間層を挟んで厚さ10cmほどの水田土壌が確認できる。そして、この上部を60cm程度の厚さで、洪水堆積層とみられる川砂層が覆っている。この層の直下で水田遺構が検出された。

水田の形態は、北東から南西にかけての長方形、あるいは方形である。水田の規模は東西13～17mほど、南北16mほどである。水田の畦畔は、下幅0.7～1.0mで直線的である。水田全体の傾斜は、おおむね南から北方向への傾斜を示す。水口も設置されている。出土遺物はないが、遺構の下層に間層を挟んでAs-Bの純層があることから、水田が埋没したのは中世以降であると考えられる。



第751図 7区水田

第Ⅷ章 ま と め

はじめに

本文中及び観察表中において、土器を実年代で表記した部分が多い。5世紀代は、坂口論文^(1・2)を参考とし、実年代については酒井論文⁽³⁾及び白石論文⁽⁴⁾によった。初期須恵器焼成開始及びTK73は5世紀前半、TK47は5世紀第4四半期に位置づける。MT15からTK209までは、田辺氏の編年及び年代観に準じた⁽⁵⁾。なお、7世紀前半と考えられていたTK217が後半に下る可能性が高く、7世紀全体の編年が大幅に見直されている^(6・7)。ここではおよそ内屈口縁土器出現をもって7世紀後半とした。8世紀から11世紀までの編年及び年代観は、坂口・三浦論文⁽⁸⁾によった。

第1節 遺跡の概要

(縄文時代) 縄文時代は、2区で34軒の住居・128基の土坑などが検出されている。

(弥生時代) 弥生時代は、中期終末ないし後期初頭の住居が1軒されている。後期の住居は3軒、合計で4軒である。

(古墳時代) 古墳時代の住居は飛鳥時代を含めて総計460軒である。古墳前期の住居は13軒、5世紀前半は2軒、5世紀後半は185軒。また、6世紀前半は93軒、後半は77軒である。7世紀前半は8軒、後半は2軒確認されている。

古墳は4基検出した。4号墳については断定できないが、ほかは円墳である。1号墳は6世紀後半、2号墳はHr-FA以前に築造されているため5世紀末、3号墳はHr-FA降下後であり、6世紀初頭の築造と考えられる。4号墳は、周堀の一部の検出で全体は知られないが、埴輪の何個体か外面に赤色塗彩があり、須恵器甕の内面に半スリケシ技法があることから5世紀末と考える。

(古代) 8世紀代の遺構・遺物は少ない。16区SK40など土坑の検出はあるが、住居は確認されていない。

12区で検出された東西走行の道路状遺構は、高崎情報団地遺跡⁽⁹⁾で発見された遺構に酷似し、走行方向や検出位置から考えその延長部と考えられる。高崎情報団地と玉村町の砂町遺跡⁽¹⁰⁾の中間の位置である。「牛堀・矢ノ原ルート」⁽¹¹⁾と呼称される東山道駅路と考えられる。側溝から出土した土器は8世紀から9世紀であり、8世紀代に機能していたとみられる。なお、調査区南東隅の18区で、9世紀代の住居が1軒、10世紀後半～11世紀の住居が4軒検出されている。

(中世) 居館址が2地点で検出されている。調査北西部9区～16区にかけて検出した館址は、長方形の堀を巡らし内部に掘立柱建物や井戸などを配する。出土遺物のうち、常滑製甕は13～14世紀、常滑製の片口鉢は13世紀、中国青磁も13～14世紀に位置づけられる。在地窯製品は、軟質陶器鍋・鉢、土師質土器があるが、14世紀段階と考えられる⁽¹²⁾。居館址内部に、これらより新しい段階の遺物は出土していないので、居館址の築造は14世紀頃と推定される。

6・2・18区で検出した居館址は、6区部分では、堀幅11.0～12.0m、深さ2.2m～2.6mの規模をもち、大類地区で最大規模の大類城⁽¹³⁾の堀に匹敵する。居館址の堀の出土遺物から、15世紀後半以降に造られたと考えられる。

7区で、浅間B軽石上層で水田を検出している。井野川の河川敷部分であり、洪水で埋没したのと考えられる。出土遺物がなく時期限定は難しいが、中世以降の水田と考えられる。

第2節 古墳時代集落の特徴

1. 集落出土土器（5世紀以降）

5世紀前半代は、13区17号土坑がある。土師器高坏・甗・甕・埴などが出土している。高坏は、脚柱部の膨らみ、粗い暗文が施される。甕は、口縁が屈曲、胴部外面にナデ調整される。坂口編年⁽²⁾2期の特徴を有し、5世

紀第2 四半期に位置づけられる。16区112号住居からは、暗文のある高坏と台付甕が出土している。また、18区20号住居からは、埴と平底の坏や球形の甕が出土している。これら2 軒の住居も2 期と考えられる。

16区121号住居と16区151号住居でTK73段階の須恵器が出土している。16区121号住居は、須恵器坏身、16区151号住居は坏身である。2 軒の住居で出土した坏身は、平底で底部は手持ちヘラケズリ調整である。16区121号住居からは、土師器坏・椀・高坏・甕などが出土している。坏は内斜口縁と内弯口縁があり、高坏は脚の柱部が膨らむもの、坏部・脚部ともに暗文を施すものなどがある。甕は、外面ヘラケズリ調整である。埴はみられない。土師器の様相は、坂口氏がTK73段階の須恵器が共伴すると想定される1 期よりは後出する一群であり、段階では3 期、5 世紀第3 四半期と考えられる。

16区151号住居からは、土師器坏・埴・甕・甑などが出土している。土師器坏に平底のものがあり、また、甕の外面調整にヘラケズリだけでなく、ナデ・ヘラミガキ調整などがみられる。16区121号住居と同じく、坂口編年3 期の範疇と考えられる。

須恵器樽型ハソウは、11区161号住居と、16区44号住居で出土している。11区161号住居出土の樽型ハソウは、筒形の体部に波状文が施され、口頸部はやや細くTK216以前の様相を示す。この住居からは、須恵器蓋坏の坏身と小型ハソウが出土している。坏身は体部がやや丸みをもち、たちあがりの端部は丸みを帯びている。また、小型ハソウは頸部と体部に波状文をもち、肩部がやや張り頸部もやや細い。坏身はTK23段階併行期に、小型ハソウはTK208～23段階併行期に位置づけられる。また、土師器は、内斜口縁と内弯口縁の坏が主流で、須恵器模倣坏や椀形の土器はない。甕は長胴で外面ヘラケズリのみである。土器の特徴からみると、TK23段階併行期と考えられ、樽型ハソウと他の土師器・須恵器に時期差が認められる。

16区44号住居からも、体部が大きく膨らむ樽型ハソウが出土している。体部に波状文を施し、体部やや上方に上外方向から円孔を穿孔している。TK208段階の特徴を有する。共伴する土器は、須恵器小型ハソウと土師器坏・高坏・甕・甑がある。須恵器小型ハソウは、体上部と頸基部に波状文が施される。体部はやや丸く頸部がやや太く口縁がかなり大きく、TK47段階併行期に位置づけられる。土師器坏は、口縁が直立する須恵器蓋坏の蓋の影響を受けたものや、外面に赤彩されたものなどがある。高坏は、内斜口縁坏に脚がついた形態で、甕は外面ヘラケズリのみである。土師器も須恵器と同時期のTK47段階併行期の特徴をもち、11区161号住居と同じく樽型ハソウは他の土器より古い段階のものと考えられる。

朝鮮三国系軟質土器は2 点出土している。16区27号住居から出土したのは甑で、外面に格子叩きが明瞭である。口径36.8cm（推定）とかなり大型で器肉が厚い。共伴遺物は、土師器坏・高坏などがある。坏は、体部が浅く内面に丁寧な暗文が施される。高坏は、脚部が細く外面がヘラミガキ調整である。坂口編年3 期、5 世紀第3 四半期に位置づけられる。甕は、10区125号住居から出土している。胴部外面格子叩き後ハケ調整、その後のナデ調整で叩き目及びハケ調整痕は、かなり消えている。この住居の須恵器はTK23段階併行期に位置づけられ、土師器も3 期の様相を呈する。

2．集落分布の傾向

古墳時代の住居は確実に時期の判明するものが380軒ある。古墳中後期と見られる80軒と、時期不明とした22軒も古墳時代の可能性が高く、古墳時代の住居は480軒程度と考えられる。

古墳前期の住居は、調査対象地北東部の9 区西で1 軒、11区で1 軒、12区で2 軒、16区で4 軒ある。調査区中央では、14区で1 軒。南東隅の18区では4 軒確認されている。合計で13軒であるが、調査対象区全域で検出される傾向にある。

5 世紀前半の住居は、調査対象地北西の16区で1 軒、南東隅の18区で1 軒のみである。それに対して、5 世紀後半代の住居は、185軒と多い。9 区西・9 区東・10区・11区の合計で55軒、12区18軒、13区10軒、16区74軒、17区6軒、19区11軒であり、調査対象地の北西部分に濃密に分布する傾向にある。それに対し、調査区中央付近の2 区では2 軒、14区では2 軒、南東隅の18区では9 軒と少ない。

6 世紀の前半代の住居は93軒、後半代は77軒である。前半代は、9区西・東・10区・11区合計で22軒、12区で11軒、16区で49軒、17区1 軒と調査区北西部に分布の中心がある。なお、調査区中央の2 区は1 軒、14区で1 軒、南東部の18区では1 軒である。

6 世紀後半代の住居は、調査対象地のほぼ中央にある2 区で47軒、14区で18軒と調査区中央部に圧倒的に多い。ちなみに調査北西部の、9 区東・10区・11区は合計で6 軒、16区は3 軒、19区は1 軒である。また、調査区南東部の18区でも1 軒検出されたにすぎない。7 世紀前半は、調査対象地中央部の2 区で7 軒、北西の16区で1 軒、合計8 軒。後半は2 区で1 軒、14区で1 軒検出されている。

5 世紀後半から6 世紀前半は、住居は調査対象地北西部へ集中する。また、6 世紀後半から7 世紀にかけては対象地中心部に集中する。集落を営む場所が、北西から南東に向けて移動したと考えられる。そして6 世紀後半代は、5 世紀後半から6 世紀にかけて集落があった調査対象北西部に、大型の水路が掘削されている。

3．玉類と石製模造品および工房址

住居及び土坑・溝から、玉類および石製模造品が多数出土している。玉類は、5 世紀後半代及び6 世紀初頭が特に多い。種類は、ガラス製小玉、土玉、黄味を帯びた玉髓製勾玉、緑色の珪質頁岩製勾玉・管玉・棗玉・平玉、蛇紋岩製管玉・勾玉などがある。特に蛇紋岩製の管玉・勾玉の比率が高い。子持勾玉は3 点出土している。16区108号住居（5 世紀末）、11区の中世館址堀中（SD80）及び16区の遺構外からである。いずれも丁寧なつくりの蛇紋岩製で、黒色を呈している。5 世紀代のものと考えられる。なお、装飾された小突起の一部が3 個体とも意図的に割られている。石製模造品は、5 世紀前半代（13区17号土坑）から7 世紀初め（2 区46号住居）までみられる。剣形・白玉・勾玉・有孔円板・刀子・鎌などの種類がある。5 世紀から6 世紀初頭までは、蛇紋岩製が圧倒的に多く、その後6 世紀前半から7 世紀にかけては滑石製が主体である。

2 区54号住居（6 世紀中頃）の覆土下部からは、滑石の石製模造品、未製品、滑石片など総重量366.4gが出土している。同時に多量の滑石粉が住居覆土の底近くから出土しており、玉造工房址の可能性が高い。14区12号住居（6 世紀後半）からは、石製模造品の未製品や滑石片が総重量229.0g出土している。住居内に滑石粉があったことも確認され、これも工房址の可能性が高い。11区134号住居（6 世紀後半）の覆土から、滑石片が出土している。滑石片はかなり小さく少量で、工房址の可能性は低い。しかし、近くに工房があった可能性が窺われる。また、住居が工房の痕跡はないが2 区100号住居（6 世紀後半）からは、蛇紋岩製紡錘車の未製品が出土している。5 世紀は不明であるが、6 世紀代には石製模造品の工房址が集落内にあったと考えられる。

4．鉄製品及び鍛冶関連遺物に関して

本遺跡では、鎌・鋏先・刀子・鉄鏃・直刀などの鉄製品が、関連して大小の砥石も出土している。大型の砥石は、粒子のやや細かなデイサイト製や幾分粗い安山岩製がある。中小の砥石は、粒子のやや粗い砂岩製、やや細かなデイサイト製、かなり細かな砥沢石製（TK47段階併行期・12区8 号住居、6 世紀前半・13区24号住居）などがある。砥沢石は、群馬県南牧村産で良質な砥石である。

鉄滓が古墳前期の12区36号住居と18区3 号住居で出土している。また、古墳前期の溝・SD99からも出土している（第2 分冊参照）。

5 世紀以降では、TK23段階併行期の10区125号住居と13区7 号住居、TK47段階併行期の13区9 号住居から高坏の脚部を轆の羽口に転用したものが出土している。また、19区7 号土坑（5 世紀後半）及び6 世紀後半以降と考えられる16区83号溝からも高坏転用羽口が出土している。TK47段階併行期の12区8 号住居、MT15段階併行期の12区26住居・10区196号住居からは、土製の羽口が出土している。鉄滓は、5 世紀段階の14区9 号溝、MT15段階併行期の16区101号住居から出土している。

鍛冶関連の遺構は検出されていないが、古墳前期以降、鉄滓や羽口が出土することから集落内に鍛冶施設があった可能性がある。

第 3 節 集落と古墳、水路

高崎情報団地遺跡では、帆立貝形古墳を中心とした古墳群が発見されている。5 世紀後半から古墳の築造が開始されたと考えられている。古墳群の北東側には、ほぼ同時期に規模の大きな集落が形成される。今回調査対象地の北西部分である。集落位置は古墳に近い場所に限定され、また玉類をはじめとする祭祀関連遺物は、集落内祭祀だけでなく古墳に対するものもあると考えられる。古墳群とは密接な関係がある特殊な集落と推定される。

6 世紀後半には調査区北東部では、上幅3.0m～4.3m、深さ1.2m～1.5mと大規模な溝・SD79が、11区北西隅から南東の低地部・6 区にかけて掘削されている。また、上幅1.0m～2.2m、深さ0.9m程度の溝・SD83も 6 世紀後半以降に掘削されている。いずれの溝も、集落南の水田域に送水するために掘削された用水路と考えられる。高崎市域で発見された水路は、5 世紀段階の芦田貝戸遺跡⁽¹⁴⁾の大溝が著名である。上幅約10m、深さ 3 m 以上の規模をもつ水路である。今回検出したSD79・SD83は、これよりやや規模は小さいものの、6 世紀以降も水田開発・水田の拡大につながる水路掘削が盛んに行われていたことを示している。

註

- (1) 坂口 一 1987 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要 4 』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (2) 坂口 一 1999 「群馬県における古墳時代中期の土器の様相」『東国土器研究 第 5 号』東国土器研究会
- (3) 酒井清治 2001 「倭における初期須恵器の系譜と渡来人」『4 ～ 5 世紀 東亞細亞 社會外 加耶』金海市
- (4) 白石太一郎 1985 「年代決定論 (二)」『日本考古学 1 』岩波書店
- (5) 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- (6) 「第73回古代の土器研究会報告―陶邑TK217をめぐる諸問題―」1997 古代の土器研究会
- (7) 「律令的土器様式の西・東 5 7 世紀の土器」1997 古代の土器研究会
- (8) 坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究24』群馬県史編さん委員会
- (9) 「高崎情報団地遺跡」1997 高崎市遺跡調査会
- (10) 中里正憲 1999 「群馬県砂町遺跡の古代道路遺構」『古代交通研究 9 』古代交通研究会
- (11) 坂爪久純 1996 「上野国の古代道路」『古代文化』VOL.47
- (12) 木津博明 1989 「上野国に於ける在地生産土器について」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会
- (13) 「宿大類村西遺跡」 1987 高崎市教育委員会
- (14) 「芦田貝戸遺跡Ⅱ」 1980 高崎市教育委員会 「芦田貝戸遺跡Ⅲ」 1994 高崎市教育委員会

抄 録

フ リ ガ ナ	タカサキジョウホウダンチニイセキ
書 名	高崎情報団地Ⅱ 遺跡
シ リ ー ズ 名	高崎市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第177集
編 著 者 名	角田真也（第 1 分冊）、小泉範明（第 2 分冊）、関口修（第 2、第 3 分冊）
編 集 発 行 機 関	高崎市教育委員会 〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1
発 行 年 月 日	西暦2002年 3 月15日

所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
タカサキジョウホウ 高崎 情 報 ダン チ 団地Ⅱ	ゲン マ ケンタカサキ シ 群馬県高崎市 ナカオオホイマチ 中大類町	102020	309	39°19'30" ～ 39°19'36"	139°03'36" ～ 139°03'39"	19970418 ～ 19991123	41,577.1 m ²	高崎情報団地 造成

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 跡	主 な 遺 物	特記事項
高崎情報 団地Ⅱ	集落跡	縄文時代	住居35軒 土坑（埋甕、集石土坑、袋状 土坑含む）	縄文土器、石器	草創期～後期（中期中心）
	集落跡	弥生時代	住居 4 軒	樽式土器 磨製石鏃	
	溝 集落跡	古墳時代 前期	住居13軒、溝	土師器、手捏土器	99号溝から遺物大量に出土
	墳墓 集落跡	古墳時代 中・後期	古墳 4 基、住居447軒、土坑、 溝、掘立柱建物	埴輪、鉄製品、土師器、須 恵器、紡錘車、玉類、砥石、 土製品、石製模造品	初期須恵器 朝鮮三国系軟質土器
	集落跡 道路跡 墳墓 水田跡	奈良・ 平安時代	住居 5 軒、掘立柱建物、道路 状遺構、土坑、溝、水田	土師器、須恵器、砥石、 鉄製品、白磁	道路状遺構（推定東山道） 浅間 B 軽石下水田
	居館跡 水田跡	中・近世	井戸、土坑、ビット群、溝、 水田	軟質陶器、青磁、石臼、 板碑	居館址 2

高崎情報団地Ⅱ遺跡

高崎市文化財調査報告書第177集

《弥生・古墳・古代・中世編》

印 刷 平成14年 3 月15日

発 行 平成14年 3 月15日

編 集 高崎市教育委員会

高崎市高松町35番地 1 TEL 027(321)1111

印 刷 上武印刷株式会社

高崎市島野町890-25 TEL 027(352)7445

